
植物だいすき

ガケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

植物だいすき

【Zコード】

Z2770W

【作者名】

ガケン

【あらすじ】

幽遊白書のKC1-9巻の「のるか そるか」で幽助でなく蔵馬が異次元砲の自爆ボタンを押してハンターXハンターの世界に飛ばされたら?という内容で書いていくつもりです、でわ・・

第一話 プロローグ（前書き）

皆様の面白い作品を読ませていただいて、自分も書きたいなと思い執筆いたします、誤字・脱字・改行・語句の使い間違い等は、温かい目でみてください。

第一話 プロローグ

「審判の門が占拠された！？100人近い人質の中にコエシマや、ぼたんもいるって！？」

突然、幽助の部屋に現れた靈界特別防衛隊によつて知らされた、詳しい話をきいた幽助は、魔界に居る煙鬼に電話をした。

「久々にパー・ティー組んでやりたいんだが、一人たりねーんだ、大統領権限で、そいつムリヤリこつちに送つてくれねーか？」

そうして、幽助・蔵馬・桑原・飛影の4人が揃い、靈界に飛び立つた。

靈界に降り立ち、飛影が邪眼で内部を索敵し、蔵馬が作戦を考え、桑原を煽てて次元刀で進入をし、4・5秒でコントロール室に入りモニターの画像を録画にきりかえた。

「よし……手分けして残りの見張りをやつちまおつ

・
・
・

「これで見張りは全部片付けた」

「桑原博士、異次元砲の作動を止められねーか

「これ見ろよ、解体不可能自爆しますの注意書き、なめてんのか？メインボタンが3つもあるぜ、2つはダニー間違つて押せば多分ドカンだ」

「・・・直接奴らのボスに聞くか、残は人質のいる会議室、敵は13人、1人ノルマ3人弱、銃つき人質アリか・・・スキさえあればな」

「ドアは正面の1つだけ、人質の安全を考えたら奇襲ですね、密かに部屋に隠れて、機をうかがいましょう」

「隠れるつて、一体どこに?どうやってだよ?」

「木を隠すなら森ですよ」

「つんつん、突然人質になつているぼたんの背中がつつかれた、そこには下の階の天井をくり貫き顔をだしていいる幽助たちがいた。」

「ん?」監視モニターを見ていた大竹(元靈界特別防衛隊隊長)が気づいた

「異常発生!見張りが急に!」「何!」「今だ!」
ボカ!スカ!バキ!ボーン!飛び出した幽助たちによつてテロリストたちは殴り飛ばされた。

「おい!メインボタンの何色が本物だ!赤か!?青か!?黄か!?答える!」

「・・・フンッ、我々の・・・究極の教えに第三者の三択というものがある、最後の運命は、教徒ではなく、第三者に選択させるという教えた、神の意思には絶対・・・例え誰が自分の意思で決めた様に見えても・・・それは全て神の意思・・・単純な三択だ」

「？皿屋敷市に向けて異次元砲発射」

「？審判の門もろとも自爆」

「？何事も起こらない」

「おつと、例外？時間が来れば自動的に発射、お前らが選べ……しかし、それは神の意思……必ず……グッ」

「毒か……魂の死さえ恐れていない」

「……ケツ、マジでターゲットは皿屋敷市か、ウソからでたマコトってか」

「おいオメーら、すぐ、こつから出ろできるだけ遠くにな、蔵馬・桑原・飛影、大急ぎで人間界へ戻つて知り合いだけでも、非難させろ」

「なーふざけんな！オメー一人だけ残せるか！オレもここに……」

「いーから行け」

「オレ達だけ安全な場所に逃げろってのか！？他のヤツリビーすんだもし……」

「うるせーな！グダグダ言つてるヒマねーぞ……もしデジッたら靈界でオレが……」

「おい……幽助どうした！？急に倒れて……」

「桑原君、すまない幽助を連れて行ってくれ、皿屋敷市は雪村さんもいる、俺の両親は今、海外にいっている、幽助には魔界の曼陀羅華を吸つて寝もらつた……俺が残る」

「藏馬・・・オメー・・・」

「フンッ 藏馬がこんな所でくたばるか、桑原、幽助を担いでわざわざ行くぞ」

チツチツチ・・・

「ふー 盗賊時代を思い出すな・・・母さん、父さん、幽助、みんな・・・時間だ、よし・・・やりますか」

「んひ・・・んー・・・はつ！ オイ！ 桑原！ どうなつてるんだ！？ 突然急に田の前が暗くなつて・・・異次元砲はー！？」

「ちよつと！ 幽助落ち着いてよー。」

「幽助・・・落ち着け！ 異次元砲は藏馬が、何とかしてくれる！ 飛影だつて信じてまつてゐんだぜ」

「藏馬――――――――――」

第一話 くじら島1

—くじら島—

少年は、釣りをしていた、息を潜めひたすら沼のヌシをつりあげるために・・・

「きたーきたきたーきたあ————つ————えつ————？女人！—」

大丈夫？返事がない、ゆさゆさ、女人（？）の肩をゆするが返事は無く、手を口に近づけて呼吸を確認すると、息はしているようだつた。とりあえず少年は家に連れて帰る事にした。

「ドドドドー！…女の人（？）を背負い少年は家まで走っていた

「ミトさん…大変だよ！ヌシを釣りにいつたら女人人が釣れて…息をしてるけど、起きないんだ…！」

「ちよつと…ゴン落ち着きなさい！タオルを持つてきて、それから、お湯を沸かして！私はベットにつれていくから…」

「うん！わかった！」

「それにしても、キレイな娘ね、くじら島では見かけない娘だけど…・・・

みどさんはタオルで、女の子（？）をゴンがもつてきたタオルで

拭きながら一人つぶやいていた

「//トモーんーお湯もつて来たよー。」

「コンはタライにお湯を入れて、寝室までやつてきた。」

「ありがと//コン、私が服を脱がせて体をふくから、外でまつて
いてね」

「ミトちゃんは、そう言つて女の子（？）の服を脱がせ始めた・・・」

「あらっこの子、胸がないはね？つーえつーこの子・・・男の子
？まあいいわ、はやく拭いて寝かせてあげないと」

「//トモー女之子（？）どうだつた？大丈夫？」

「コンは心配そうに、ミトちゃんに女の子（？）の様子を聞いてみた

「うん、コン今は落ち着いて寝ているみたい、それに、あの人は
女の子じゃなくて男の子だつたのよ」

「えつーあんなにキレイだつたのに男の人だつたんだ」

「ええ、そりよ、私もおどろいたは、今はちゃんと休ませてあげ
ましょうね」

「それじゃ、今日は夕飯は作つてあるから食べちゃつてね、私は
彼を見るから、あなたは、コンを食べ終わつたら、早くにねなさ
いよね」

「わかったよ、さあ」

「わざわざ、へじの廻の 一 日も終った

第一話 くじり島1（後書き）

うーん、俺には文才が無いですね：

ちゅんちゅん、朝日を浴びて小鳥たちがさえずる、朝日をあび青年は目をさます、ここは？どこだ？眩しい朝日を手でさえぎりながら、辺りを見る、ベット？俺は・・・そうだ俺は異次元砲の解除スイッチを押して・・・体には異常はなさそうだ、解除に成功して幽助たちに寝かされたのか？彼は考えていた。その時ドアがノックされた

「あら、起きたみたいね」

若い女性が、ドアから現れ、彼は聞いてみた

「おはようございます、ここはどこなのでしょうか？幽助たちはいるのでしょうか？」

「ここは、くじら島の私の家よ、幽助？お友達かしら？昨日、コンが貴方を、沼から担いで家に運んできたのよ？チヨットきいてみるわね」

沼？靈界のあの辺りには川も沼も海もなかつたはずだ・・・彼は、審判の門周辺を思い出していた

「ミトさん！あの人起きた？」

「あつ、ちょうど今あなたを呼ぶところだったの、昨日、この人以外にも人はいたの？」

「いなかつたよ、ヌシが居る辺りには、島の人は来ないし、人の

気配もしなかつたし……」

だとすると、『二郎』は……彼は考へをめぐらせる……

「そりだ、あなた名前は？私は『アーティ』、『二郎』の子『アーティ』」

「ああ失礼、『二郎』紹介がまだでしたね、私は藏馬、『ゴン』君、『アーティ』さん、助けていただいて感謝します」

『二郎』紹介をしながら彼らを、藏馬は観察した、妖怪ではないし、靈界の者でも無さそうだな……人間だとすると、言語は、日本語だから『二郎』は、日本か？

「質問してもよろしいですか？『アーティ』は、日本ですか？」

「日本へ『アーティ』を日本つて知つてる？」

「んー聞いたこと無いわね？んージャポンじゃないから？何となく似てるし？」

つー日本をしらない？日本語をはなしして居るのにか？ジャポン……たしかに外国の方だつたら呼ばれる事もあるかもしけないが……

「どうしたの？急にだまつちゃつて？」

『二郎』は、心配させたみたいだ、整理しなくては、『二郎』は、たしか、くじら島と書っていた、日本にそんな島は、なかつたはずだ、だとすると『アーティ』は……

「すみません、ちょっと考え事をしてしまって、いまから言

う単語で知っているものはありますか？アメリカ・ヨーロッパ・アジア・キリスト教・仏教・イスラム教などわかりますか？」

「んー聞いたことないわね？」

「ーまさかー「コレラを知らない訳は、ないはず、この人たちはウソは言つていみたいだし、どうなつてるんだ？」

「ねつ、本当に大丈夫？顔色が良くないわ、食べるものを持つてきてあげるから、食べたら、しつかり休んでね、ゴン台所いってステープとパンをもつてきてね」

そういうと、ゴンは走つて台所のほうに向かつていった

「あーゴン！家の中はほしらないでよねー、まつたく・・・あの人みたいなんだから」

そういうと、トの顔は、少し寂しそうだつた

「「「めんなさい、ミトさん、こんどから気をつけるよ。これ、パンとスープね、じゃ俺、お兄さんも休むみたいだし、夕飯のオカズを釣つてくるね」

「気を付けるのよ、お皿はびりするの？」

「釣つた魚を焼いて食べるから要らないや、いってきまーす！」

「「「めんなさいね、騒がしくて、これ食べて、ゆっくり休んでね、なにがあつたら呼んでね、私は外で洗濯してるから、声をかけてくれればわかるから」

「すみません、たすかります」

藏馬は、そう言つとスープを飲みだした・・・「うまいな、母さんの料理と同じ温かい味がする、スープを飲み終えた藏馬は、考えをまとめていくのであった。

蔵馬は、考えていた、現在わかつてゐるのは、ijiは魔界でも靈界でもないこと、日本のことや宗教について知らない事、そして日本語を彼らが話していたこと、服装を見る限り文化的であること・・・まさか・・・異次元砲によつてどこかに飛ばされたのか・?異世界・・・まさか・・・

「ただいまー! タん大量だよーー!」

ゴンが大きな声で、歸ってきた

「お帰り、ゴン本当に大量ね、あら? その紙はなにかしら?」

「うん!」これ漁師のオッチャンに地図もひいたんだ! 蔵馬さんに見せてあげようと思つたんだ!」

「そうだったの、私は料理をするから、蔵馬さん部屋に居るみたいだから行つてあげなさい、喜ぶとおもひなよ」

「うん! いくつくるね」

うふふ、あの子も成長したわね、男の子の成長は、早いのかしらねハンターにだなんて、なりたい何て言わなければいいのに・・・

「蔵馬さん起きてる? 地図もつてきたんだ!」

「ああ、起きてこらるよゴン君、ありがと! セツナへ見せてもらえるかな?」

やうこひと、ゴンは地図を広げだした

「……」これは、藏馬は地図を見て愕然とした、自分のしつこい地図と違ひ、そして国名を表すだらう文字が、まつたく違ひに元気

（「……」これは、地図の精巧をからして、この地図は本物だらう、だとあると、本当に異世界か……帰れるのだらうか……嘘の嘘るとじゆく……）

「藏馬さん？ どうしたの？ 知つてこる所あつた？」

心配そうにゴンが、見つめてきた

「ああ、大丈夫だよ、なんといつか俺は、この世界の世界の住人じゃないのかもしれない」

「え？ この世界？ どう事？」

「ゴンは興味津々だ！」

「紙とペンはあるかな？ 僕の知る地図を描いてみよ！」

やうに「……」ゴンは部屋の引き出しが、紙とペンを差し出しつきた、それに藏馬は、大まかではあるが地図を描いていった

「俺の世界の地図は、大体こんな感じだつたよ」

「うん！ 大分違つね、それにこれは文字？ 読めないけど……すこや！ 世界つて一つじゃないんだね！ ハンターになれば、他の世

界も見て回れるかな!」

「ハンター? それは猟師とかの事かな?」

「ハンターは、色々な所にいったりするんだ!俺のオヤジもハンターで世界中を飛び回ってるみたいなんだ、世界中をまわれば、他の世界に行くことができるかもしれないし」

「みたい? 父親はハンターなんだろう? 聞いたことはないのかい?」

「うんジンはって、オヤジの名前なんだけど、俺が生まれてすぐ家を出たみたいで、あつたことはないんだ」

「つ! それは、すまない」と聞いたね」

「うん、いよ、俺もハンターになつてジンを探しにいくから」
「うん! ハンの笑顔は、自分の仲間の幽助に似ていた

ハンターか・・・帰る手段を見つけるにはいいかもしないな・・・
・蔵馬は、ふと思いついた

「ゴン君、ハンターには誰でもなれるものなのかい?」

「試験に合格すれば、だれでもなれるみたいだよー蔵馬さんもなりたいのー!」

「ああ、帰る方法を探すのには色々、世界を見て回る方がいいとおもってね、この世界は不慣れでまだ良くわからないしね」

「ちよつと、まつててね、ハンター試験応募カードを持つてくる
よ」

そうこうして、ゴンは部屋まで戻り、一枚の紙を持ってきた

「これに、名前と、未成年の場合保護者のサインを書いて送れば
いいんだよ」

なるほど、名前を書く欄しかないといつ事は、身分証もない俺も
なれることとか・・・

「このカードは、どこで貰えるんだい？」

「このカードは、港にある店に置いてあるんだ、後でもいつまでも
あげるね」

「ああ、ありがとう、ちなみに試験はいつあるのかな？」

「うんと、2週間後に港からハンター試験会場に行く便が出るん
だよ」

「だけど、ミトさんがサインしてくれないから、まだ俺は応募で
きないんだ、蔵馬さんを釣った沼のヌシを釣れば、ミトさんがサイ
ンしてくれるんだ！だから俺は絶対にヌシを釣り上げるんだ！！」

「…どうか、俺は君の釣りの邪魔をしてしまったんだね、すまな
い」

「ここよ、気にしないで、まだ時間はあるし、明日でも沼に行

つて釣り上げるんだ」

「『ン――蔵馬さん――ゴハンできたわよー台所にこいつしゃこ――』

「は――じや蔵馬さんゴハン食べにこいつ

「うふ、やうだね、たべにに行こつか」

一翼口一

「おせよー!!アヤん、俺は鞍馬さんと釣りに行くからー。」

「気を付けてね、お師匠はん作つてあるから、このバスケットもつて行きなさい」

「あらがとひー」おこます」「うふ、!!トさんあらがとひー

2人は、森の中に釣りにこくのであった。

「すいこな、この森は生き生きとしてる

「うん、このあたりは、キツネグマの縄張りだから人は、あんまり入つてこないから、くじら島の中で一番キレイなんだよ、あっこ

「これがヌシの呪の沼だよ」

「ここに、俺がいたのか・・・しばらく俺はこの周りを見させてもらひうね」

「うん、でもあんまり遠くに行かないでね、オスのコンは友達だけど、奥さんは人間になれていないから」

「わかつたよ、」この近くだけ見させてもらひよ」

「きたーきたきたーきたあ—————」

大きな水しぶきを上げながら、ヌシは「ゴン」によつて釣り上げられた

「おぬでヒト。」**「」**、じやあ急いで床ひつか

「うんー。ありがとう、そつだね早くマントせんじ見てもらいたいし」

ざわざわざわ、町につくと、ゴンの釣つた主を見て人だかりがで
きた

「おやまあ」「大の大人が5人がかりでも上げられなかつた沼の
ヌシが・・・」「この島じや10年は釣り上げられる者など現れん
とおもつていたが・・・」「たいした子供じや」

「わあ約束通りヌシを釣り上げたよーー今度はナナさんガ約束を守る番だーー！」

「許してやんなよ試験受けぬぐらこわぬ」 「そいつがゴンなら立派なハンターになれるつて」

キツ！「無責任なこと言わないで……」

「 そうだよ言葉に責任持たなきやね、約束を守れない人間にはなるなつて、教えてくれたのはミートさんだよ！！ 」

•
•
•
•

「ね！」「

「好むにしぬか」

うん、ありがとう

そう言つて行ンは鞍馬と共に、ハンター試験に応募をした

その夜

「いつ出発するの？」

「来週の頭にでも」

「そう、しつてたのね……ジンの仕事を、あいつ、まだ赤ん坊だつたあんたを捨ててつたのよ、それでも……」

「子供を捨ててまで、したいと想つ仕事なんだね、ハンターってそれだけす」とい仕事なんだね」

「「ン……あんた、やっぱりあのこいつの息子だわ……」

「「わざわざめんなさこ、」トちゃんの言つと通り俺は、オヤジの息子だから、オヤジに会こに行くよ……」

—翌週—

「「さてここままであつとい」」

「「ン、」めんなわこ……私、『ン』に『ン』つこちやつた、ジンが……『ン』を捨てたんじやないの、私が、裁判でジンから、親権を奪い取つたの……」

「うん、ウソだつて『』いた、」トちゃん俺に『ン』つゝ時、絶対に俺の顔見ないもんね」

「それじゃ、こいつへべるね」トちゃん鞍馬さんも面おし心配しないでね」

「ここまで、お世話になりました、試験が終わつたら、また『ン』君と来てもいいですか？」

「はい、『ン』を『ン』をよみこへお願いします」

「くくく、立派なハンターかなめられたもんだ、この船だけで十数人のハンター志願者が居る、毎年全国から、その数十万倍の腕利きが試験に挑んで、選ばれるのは、ほんの一握り、狙う獲物によつては、仲間同士の殺し合いも珍しくねー職業だ滅多なことを言うんじゃねーぜ、ボウズ」

こうして、ゴンと藏馬の旅は始まつた、「荒れるな・・・」船長の独り言が2人の耳にいつまでも残つた・・・

第四話 ベジの聲3（後書き）

すみません、主人公は藏馬なはずなのに・・・影つい・・・徐々にでも、主人公になれるようにがんばりますので、暖かく見守ってください。

第五話 ハンター試験へ（前書き）

このペースだと・・・終わらない気がするのでペースを上げて、は
しょりながら進めていきます。

船内

「ロン君、俺は少し眠らせてもらひよ、会場まで時間は掛かるだ
うつし、何かあつたら起にしてください、お手伝いしますので」

「うん、藏馬さんおやすみ」

ざわざわ、ケツ！あの美人のネーチャン子連れかよ、ハンター試験は何時からこんなに温くなつたのかねー、周りの柄の悪い男たちは話していた。

「おれと、おれと感應거든。」

「ん？ どうしたんだ、アソ？ 」

「嵐がきて、みんなダウンしちやつてるんだ、介抱してあげてる
んだけど手が足りなくて困つてたんだ」

「ああ、わかつたよ、森の中で薬草を取つてきつてあるから、俺はコレを飲ませて回るね、ゴン君は水を持つてきつてもらえるかな?」

「うん、ありがとうね」

うん、死ぬ……。ゲロゲロ……うう……うえうふう……。

•

ドタドタ、バタバタ、これを飲むといい、うすみません

「ふーこれで粗方おわったよつだね、『じくわつせま』『ハノ君』

「「うん、」『じくわつせま』手伝ってくれてありがとつ、『藏馬さん』の薬草す、』『いねー！みんな直ぐに落ち着いたよー！』

「薬草とかの知識は、あるんからね、『じくわつせま』君にもおしえてあげるね」

「わつー本当にーーありがとーー！」

「ふふん、今年はちつたー骨のあるやつがいるよつだ、船室を覗きにきた船長はそつづぶやいた。

「『じれから、』『じのきの』『きんじ』『風の中を航行する、命の惜しいヤツは救命ボートで戻す』『じたあー』

スピーカーからアナウンスが入ると、我先にと皆ボートに向かって走り出していくた・・・

「結局のこつたのは、この4人が名前を聞こつ」

船長が、鞍馬・ゴン・サングラスの男・金髪の男に話しかけた

「俺はレオリオといつもんだ」「私の名はクラピカ」「おれはゴンー」「俺は藏馬」

「お前ら、何故ハンターになりたいんだ？」

「えらがつに、面接官でもねーのに聞くもんじゃねーよ」

レオリオといつ男は、柄の悪いチンピラのようだ

「俺は、親父の魅去られた仕事が、どんなものかやつてみたくなつたんだ」

「おい！勝手にこたえるんじゃねーよ、協調性の無いやつだな、俺はイヤな事は決闘してでもやうじねーザ」

「私もレオリオに回惑だな」

「おいつーおまえ年いくつだ人を呼び捨てにするんじゃねーよー。おーークラー・レオリオさんと訂正しろー」

「ほーそーカい、お前らむこの船から、今すぐ降りな、すでにハンター試験は始まってるんだよ」

「俺は、俺の元いた場所に帰るために、世界中を回つてみよつと思つています、そのためにハンターになります」

「モーネーチャンの、地元つてのはそんなに大変な所にあるのか？」

「そりですよ、レオリオさん、本当に本当に遠く行なんですよ・・・
・あと俺は男です！」

「マジか！」（つー私より女っぽいとは・・・苦労してそつだな）
(俺も最初は女人の人だと思ってたもんなー)

「んじゃー次、クラピカ」

「私はクルタ族の生き残りだ……4年前、私の同胞を皆殺しにした幻影旅団を捕まえる為ハンターを目指している」

「要は、あだ討ちか、ハンターにならなくても出来るじゃねーか」

「この世で、もつとも愚かな質問の一つだなレオリオ、ハンターでなければ入れない場所、情報、行動とうものが君の頭にはいりきらないよなほどあるのだよ」

「おい！おまえはレオリオ」

「オレか？金さーー金さえ入ればなんでもできるからなーーでかい家！いい車！うまい酒！」

「品性は、金では買えないよレオリオ」

「3度目だぜ、表に出なクラピカ、うすぎたねえクルタ族の血つてやつを絶やしてやるぜ」

「どうけせレオリオ」

「レオリオさんだ」

「おい！」ら、まだ俺の話は終わってねーぞ、俺の試験を受けねーきか！」

「放つておこうよ、俺には2人が怒つてる理由は大切なことだと思えるんだ、とめない方がいいよ」

「大丈夫ですよ、いざとなつたら俺が一人とも、取り押さえますから」

「ふ
・
・
・
・
む」

「いやがれ……」「いやがれ……」

その時、嵐によつてマストの1本が折れ船員にブチあたつた

「カツツオ！！！！！」

「…」「チツ…」(あらわつか!?)

ゴンが船から投げ出される船員の足を掴んだ、しかしゴンの体も船から離れていてしまっている、そこに藏馬も飛び出し、レオリオとクラピカが藏馬の片足を何とか掴み、ひつぱり上げた。

「なんという無謀な……下は人魚ですから溺れるとこつ危険海流なのに……！」

「俺たちが足を捆まなきやオメエらも海のモクズだぞボケ！！」

「でも、つかんでくれただじゃん」

「そうですよ、ありがとうございましたレオリオさんクラピカさん」（ローズウイップを使えば最悪海には落ちなかつただろうし、命の恩人のゴンを見捨てるわけには行かないしな）

「あ・・ああ・・・」「ねつ!」「うーむ」「

「非礼を詫びよう、すまなかつたレオリオさん」

「なんだよ、水くせえなレオリオでいいよクラピカ、俺の方もさつきの言葉は、全面撤回する、ゴンも鞍馬もレオリオでいいぜ」

「わかつたよ、レオリオ」

「俺は、さん付けになれているので、すまないがレオリオさんと呼ばせてもらつても良いかな?」

「くはははは! 気に入ったぜオメーラ! 俺の気分はすこぶるいい! 俺が審査会場最寄港まで責任もつて送つていってやります!」

「ドーレ港」

「あの山の一本杉を目標しなーそれが会場に着く近道だぜー!」

「わかつた! ありがとー」「ありがとー」

こうして藏馬たちは、一本杉をめざして歩いていった、途中ドキドキ一択クイズがあつたが、藏馬とクラピカが気づき、多少レオリオがキレたが問題なくクリアをした。途中クイズの一択を先に行つた彼の悲鳴が聞こえたが・・・気にしないで置こう。クイズ婆に軒屋にいる夫婦が道案内をしてくれるとの情報を聞き一行は、小屋の前まできた。

「ンゴン、レオリオがドアをのづくしたが反応がない

「はいるぜ」

「…？」

「あらわわわわわわわーーーる」

「魔獣…！」

ガシャン！魔獣が部屋のガラスを割り、右手に人質を抱えながら外に飛び出した！

「はい、おつかれさまでした」

窓の外には、笑顔の藏馬がおり魔獣の頭を押さえていた。

「なぜ！外に居る！なぜ俺が外に跳び出してくれるのがわかつた！…！」

「そうだぜ、藏馬なんでわかつたんだ？」「うん、俺の鼻でも中に魔獣がいるのが分からなかつたのに」

「簡単ですよ、建物の中から妖気が3つ、建物の外にも1つ、貴方たちが案内人でしょ？」「レはしけんですね？」

「妖気だあ？そんなの分かるのか藏馬…」（妖気…？なんだそれは…？）「す」「いや藏馬…！」

「くくく、あははは、おいカーチャンすぐきな…面白いもんが見れるよ…」

「ふー む妖氣ね」 「そんなんで見破られたのは初めてだね」

「わて、もうお分かりのとおり我々夫婦がナビゲーターさ」「娘です」「息子です」

「本当なら、色々なヒントを見つけて答えにたどり着くはずなのにねえ、こんなに早くたどり着いたのはアンタ等がはじめてぞーね」

「合格だ！あんたら四人会場まで案内しよう」

つかの間の空中遊泳を楽しむ一行、だが彼等はスタートラインにすら着いていないのだ。

第五話 ハンター試験へ（後書き）

やつと、会場にたどり着ける・・・眠るまでに何処まで書けるかな
？

第六話 一次試験

—ザバン市—

「おーっと…」こだ、この建物がハンター試験の会場さ

「どうみても、ただの定食屋だな？」「冗談きついぜー。案内者さんよ、まさか、こんなに、全国からのハンター志望者があつまってるんなんて言つんじゃねーだろ？」「う…」

「そのまさかさ、ここならハンター試験の会場だと思わないだろう？」「う…」

「いらっしゃーい！…」注文は？
「ステーキ定食」「焼き方は？」「弱火でじっくり」「あいよー」「お客様奥の部屋にどうぞー！」

「一万人に一人…」ここにたどり着くまでの倍率さ、お前たち新人にしちゃ上出来だ、それじゃ頑張れよルーキーさん達、お前らなら来年も案内してやるぜ」

「失礼なヤツだぜ、まるで俺たちが今年受からないみてーじゃねーか」

「三年に一人、ルーキーが合格する倍率だそつだ」

「それは、大変な倍率ですね、でもルーキーで合格する試験なら合格できないことは無いでしょう皆さん、なりたい理由があるのでから」

「「「おお、やうだぜ合格しような」」」

チン！地下100階まで降り、ようやく会場にたどり着いたようだ、会場には既に沢山の者たちが集まっていた、それら全てが、会場に着くまでに会った者たちとは、雰囲気がちがっていた、皆それが何かの達人のようだった。

（これがハンター試験の参加者達ですか、靈力もさほど高い者も余りいないようですね、B級並なのが3人・・・C級なのが、ぼちぼちつてところですか・・・）

蔵馬は、周りの様子を伺っていたが、そこに、小柄なオッサンが話しかけてきた

「それにしても薄暗いところだな

「地下道みたいだね」

「何人ぐらい居るのかな？」

「君たちで406番人目だよ」

「よつーおれはトンパよろしく」

「君達、新人だね？」

「分かるの？」

「まーね、なにしろ俺は、35回も受けているから、まー試験べテランだよ、なにか分からないうことがあつたら何でも教えてあげるよ」

「俺は、藏馬といいます、教えてもらい人たちが居るのですが？ よろしいですか？」

「おおーーいぜー一番号を言つてもらえれば、教えるぜー。」

「ありがとうございます。では44番と301番彼らについて教えてほしい」

「2人だけでいいのかい？ それにしてもヤバイやつらに田をつけたな、301番は、今年からのルーキーで分からないうが、見た目だけでもヤバすぎるだろ？ 44番こいつはルーキーじゃないから、情報はある、去年合格確実といわれながら気に入らない試験官を半殺しにして失格になつたやつだ、去年は試験官の他に20人の参加者を再起不能にしている、極力近よらないほうがいいぜ」

「ありがとうございました」

「おつと、そだお近づきの印だ飲なよ、お互の健闘をいのつてカンパイだ！」

「ありがとうございます。」

「ダーペッペ」

「トンパさん」のジュース、味が変！古くなつてるよ！」

「えつ！あれ～～おかしいな？」

（この臭いからして、下剤の類か・・・トンパという男、話に聞く新人漬しか？）

「いや一本本当に申し訳なかつた」（まったく今年の新人たちは、どうなつてやがるんだ？ベテラン並にくせの強いやつが揃つていやがる・・・だが、それだけ漬しがいがあるつてもんだ！）

じりじりじりじりじりじりじりじり！

「ただ今をもつて、受付を終了いたします、これよりハンター試験を開始します、こちらへどうぞ、私一次試験担当のサトツと申します、これより皆様を一次試験会場までお連れします」

髭の紳士が、試験開始を伝えたようだ、そして皆が前に進みだす、そのペースは次第に上がつている様だ

「？」「？」「？」（あの髭・・・メソ！？）

「一次・・・？つて事は、一次は？」

「もう初まつているのでござります、一次試験会場までついてくる、これが一次試験でござります、ただ私について来ていただきます、到着時刻や場所はお伝えできません」

「ゴン君ちょっと私は、前の方に行かせてもらひよ、何人か今のうちに、気になる人物を見ておきたいんだ、すまないが、またあと

で

「氣になる？ セリキーン・パさんに聞いた人？」

「うん、それと後数人かな？」この先の試験が、どんなものかは分からぬが、情報収集は、早めにしておくに限るからね、この一次試験は危険は少なそうだから、また後で合流したときにでも話すよ」

「うん、わかつた氣をつけてね」

「おー、セリキーン・パさん、氣を付けてよ」

「わかつた、また後で合流しよう」

「うーん、おんぶん、藏馬は、前の方に走つていた

「すげーな、藏馬のやつ、もつ見えなくなつたまつたぜ」

「だね、藏馬す」じやー」

（藏馬たしかに、すげー魔獸の時とくに何者だらつ？）

（うーん、藏馬は、前の方にいる氣になる人物たちに話しかけていた。）

（やはり、危険なのは44番か、301番は、話は出来なかつたが少なくとも手を出さなければ問題ないだらつ、あとは、16番トンパやはりヤツは新人潰しだつたようだ・・・）

「あー、おー、藏馬ー、追いついたやつたね」

「ああ、そのようだね」「君、俺の方も、だいたい話をしてみたよ、といひで彼は誰かな？」

「あー俺？俺はキルア、オネーサンも「君の友達？」

「ピシッ！（なぜこの世界は俺を女と間違えるんだ？元の世界でも間違えられたが、これほどヒドクはなかつたのに）

「そうだよ、藏馬といこます、くじら島から「君君とじ試験を一緒にきました、それと、俺は男です」

「ー、マジで、お兄さん、全然わからなかつたよー。」

（「ー、本当にですか？キレイな子が後ろを走つていて、キドキしていたのに・・・」）

サトシは「クロニ100のダメージを受けたw

「キルア君、俺の事は藏馬でここですよ、これからみひじくべ

「おう、わかつた藏馬よひじくば

（それにしても、今年のルーキーは、豊作のようですね）

「まあ、そこの出口から外に出ますよ、暫くは出たといひで、待つていてください、暫く後ろを待つてから、再出発いたしますので」

「ふう、ゆうやく、うすぐりこ暗い地下からおもひばだ

「な・・・なんだ・・・こ」は?

「ヌメーレ湿原、通称詐欺師の壠・・・十分注意して着いてきて
ください、だまされると死にますよ」

「おかしな」と言つざつ、だまされるのが分かつていて、だまされ
るわけがねーだろ

レオリオが、息切れをしながら答えた

「ウソだ！そいつはウソをついている！そいつは一セ者だ試験官じゃない！俺が本当の試験官だ！」

「一セ福一へど、うつむくとだー?」

「じゃあ、こいつはいつたい？」

「コレを見ろ！」 いつはヌメーレ湿原に住む人面猿だ！ いつは、ハンター受験生を一網打尽にする気だ！」

ヒュッ！ サク！ サクサク！ パシ！ パシパシ！

「ガツ・・・」

・・・チラッ（）んなはずじゃなかつたッキ、一気に逃げ出すッ

！

死んだ試験官が運んできた人面猿の死体が起き上がり、一気に駆け出した！

ヒュツー・サク！サクサク！！

「…………あの猿死んだフリを…………！」

「これまで決定 そつちが本物だね？試験官と言つ者は、審査委員会依頼されたハンター あの程度防げない訳ないからね 」

「ほめ言葉と受け取つておきましょ、しかし、次から試験官に 対しての攻撃は即失格とします、よろしいですね」

「はいはい

「では、まいりましょ」

受験者達は足場の悪い湿原を走つていった、湿原にすむどんな生き物より恐ろしい者と一緒に・・・

「コンもつと前に行こう

「うん！試験官を見失うと困るもんね

「キルア君の言つ通りに前に行つた方がいい、44番のヒソカ、ヤツの殺気が膨れ上がつて来ている、さきほどの血で、押さえが効かなくなつてているみたいだ、霧に乘じて、かなりの数を殺すだろう

（へーやつぱり、コイツ俺と同じ住人か？ヒソカの殺氣に気づくし、なにより隙が無い）

「レオリオ——！クラピカ——！キルアと藏馬が前に来た方が良
いつてさ———！」

「ドアホーー！ いけるなうとっくに行つてゐるわい。」

「緊張感ないやつらだなも～」

霧が濃くなりだし、後ろの方から悲鳴が聞こえだした

「『めん、キルア、藏馬！俺！レオリオとクラピカのところにいくてくる！』」

そういうと、ゴンは悲鳴のする方に走つていった

「あれ？ 鞍馬は行かないの？ ゴンのヤツは行っちゃったけど？」

「ああ、ゴンは問題ない、地道のなかでヒソカと話したが、有望なら食べないって言つてたから、一応、手を出さないことに、お願いしてあるしね」

「ザハーマジでのヒソカに話かけたのかよ、アイツが約束なん
て守ると思つ?..」

「叶ねば、ヤツは強者と戦うのが好きなので、だから、俺との約束は、叶ねば」

「ふーん、でどんな約束なの？」

「試験が終わったあと、俺と戦う事、ゴン君、レオリオさん、ク

「ラピカさんを殺さない事これだけだよ」

「げー、蔵馬ってバカ？ アイツと自分から戦おうなんてさ」

「負けない位には手札があるしね」

（すげー自信じゃん、でもコイツ、底がみえねー本当にヒソカと
ヤレむのか？まあー俺には関係ないけど）

「おっ！ 蔵馬！ 先の方に建物が見えるぜー」これで一次試験おわり
かな？ 結構ハンター試験も楽勝かもな、つまんねーの

そうして、二次試験会場に着いた蔵馬とキルアは、ゴン達が来る
のを試験会場でまつっていた

第六話 一次試験（後書き）

今回の投稿は、これでおしまいです、おやすみなさい。

第七話 一次試験

—一次試験会場—

ガオオオオオ グオオオオオ ギュルギュルグー

「ゴン達着てないみたいだぜ蔵馬！さつきヒソカのヤツみかけたけどな、約束は守られなかつたみたいだな」

獣のうめき声が鳴り響くかのよくな、一次試験会場の一角で、キルアは蔵馬に話しかけた。

「いや、そうでもないですよ」

蔵馬がヒソカの方を向くと、ヒソカが近づいてきた

「やあ フフフ？ 彼なら入り口の方に置いてきたよ、後の二人は自力で追いついて来るつてさ？ ああ君との約束も美味しそうだけど、彼らも美味しそうだ？ フフフ楽しみにしているよ？ ジャーまたね」

(ゲツ、あの新人ヒソカと知り合いかよ、美人だと思つてたのに)
(フー本当に今年のルーキーは潰しがいがありそうだぜ、トンパ様の腕の見せ所だな・・・) (なるべくアイツ等にも近づかないで置こう)

「本当に、ヒソカ約束守つたんだ」 (あーでもなんか、ヒソカに俺も目を付けられてるような・・・殺氣とも違う、兄貴とも違う、なんか、お尻に危険があるような・・・)

「ね、大丈夫だったでしょ、コーン君達を迎えて入り口の方で待つてましょ！」

二人は、会場から少し歩き、ヒソカがレオリオを置いてきたという入り口に向かっていった

「蔵馬ー！キルアー！ここだよー！」

「おーどうやって追いついたんだ？もう絶対追いつけないと思つたぜ、どんなマジック使つたんだ？」

「香水の臭いを辿つて来たんだ、レオリオの香水特徴あるから数キロだつたら嗅ぎ分けられるよね」

「はあー？おまえやつぱ、相当かわつてるぜ」

「コーン君、クラピカさん、レオリオさん、お疲れ、この薬草を飲むと良いよ、疲労回復に効くからね、あと、レオリオさんは、この薬草を殴られた顔に塗るといい、腫れが収まるから」

「おーありがとう蔵馬、こいつら俺の顔が殴られたことにも気づきやしねー、気づいてくれたのは、鞍馬だけだぜ」

（一顔殴られていたのか！？）（わー全然気づかなかつたや・・・）（コーンあんまり変わってねーじやん）

ギギギギーゴ、試験会場の方で、大きな音が鳴った

「おー、一次試験はじまるみたいだぜ、行こ！」

キルア達は、会場に向かつて走つていった、会場から聞こえていた獸のうめき声は、どうやら、試験官の腹の音だったようだ。

「どお~、もう大分お腹はすいてきた?」

「聞いての通り、もーペコペコだよ」

「そんな訳で、二次試験は料理よ! 美食ハンターの、あたし達二人を満足させる食事を用意して頂戴」

「まずは、俺の指定した料理を作つてもらい」

「そこで合格した者だけが、あたしの指定する料理を作れるつてわけ、つまり、あたしたち二人が美味しいといえば腫れて二次試験合格、試験はあたし達が満腹になつた時点で終了よ~」

（男のほうはともかく、女のほうは、あんまり食べそそうにないな）
（まさか、料理とは・・・）（これで、かなり人数が絞られる）

「俺の指定するメニューは・・・豚の丸焼き!!!俺の大好物!!!
森林公園に生息する豚なら種類は自由」

「それじゃ、二次試験スタート!~!」

受験者達は、一斉に森の中に走つていった

「豚の丸焼きなら簡単だね! さつさとつくつまおうザ~!」

「たしかに、普通の豚と比べると大きくて、凶暴だが、この程度

問題ないな

「じゃあ、途中でみつけた香草を畠さんに渡しますね」

「サンキュー、藏馬！」

わたしも、使わせて貰おう、あらかど、「

あじかとニ、薩摩ー！」

「しかし、藏馬オマーさつきの薬草と良い、香草と言い、植物の知識スゲーな、ありがとよ…」

会場に戻り、受験者達は豚を丸焼きにしていくのであつた。

ドドドドー！！へイお待ちイ！！試験官の前に大量の豚の丸焼きが並べられていった。

「うん美味しい！これもこれも、イケルイケル、バクバク！！ゲ
ブ！」

「あーくつた、くつた、もうおなかいっぽい」

ゴホ――ン――終――了――!!

豚の丸焼き71頭！！バケモンだ・・・！！受験者達の心は一つになつたw

「あたしは、ブハラとちがつてカラ党よ！ 番査もキビシくいくわよー！ 一次試験後半！ あたしのメニューはスシよ」

（スシ・・・！？スシとは・・・！？）（一体どういった料理なんだ？）（知ってるか？）（いや）

「ヒントをあげるわ、中をみて」らんなぞーーー！」ここで料理を作るのはよーー最低限の道具と材料、スシに不可欠なゴハンも用意してあげたわ、最大のヒント！スシはスシでもニギリズシしか認めないわよ、それじゃスタートよーー！」

（この課題もらつたぜ！まさか俺の国の伝統料理がテストに出るとは！しかし、ここで浮かれたら周りにバレちまうからな、知らねーフリして、あつさと一人で合格しちまうのが利口なやり方だぜ・・・それにしても普普パー）

（クラピカ、スシしらねーか？）

（具体的な形は知らないが、文献を読んだことがある、酢と調味料を混ぜた、ごはんに新鮮な魚肉をくわえた料理のはずだ）

「魚アーニーお前こりは、森の中だぜ！」

「声がデカイ！！川とか池とかあるだろーが！！」

「 「 「 「 魚！—！」」

「ちいーつー盗み聞きとは汚ねーやつらだぜー。」

「あれを盗み聞きと言つならぬつ何も言つま」・・・

「くそお、俺のほかにも知ってるやつがいるのか！」

「ねー蔵馬はスシってじつてるの?」

「「ンくん、知っていますが普通スシを作るのには海魚を使つんですよ、川の魚でスシを作る場合は時間が掛かるし、生のまま食べると、寄生虫や病原体がいるのでオススメできませんが」

「えーどうしよう!これじゃ合格できなー」

「そうですね、とりあえず魚を確保して、様子を見まーじにしま

おののの、川や池に向かい魚を取つてくるが、まともな魚はいなかつた・・・

「自信アリ!!!新鮮な魚を加え!ござるとこえばコレしかねえ!
!よし!出来たぜ!俺が完成一号だ!名づけてレオリオスペシャル
!...ああくつてくれ!...」

「食えるか?...」

「なにも放るひとねえだろコリコリ...」

「何?失格にするよ?ほれ、さつわと戻りな!...?形は大事よー二ギリズシの形をしていないものは、味見の対象にもならないわ!...」

「よし!次は私だ!」(彼女のセリフや彼女の前にある調味料の入っている皿から考察すると、コレしかない!)

「つーあんたも403番と回じよーー食えるかあーー」

(レ レオリオと同じだとつ・・・「ひひひ」)

「クラピカ！ そんなにショックか！ 」「うー」

「もーどうじつもこじつも、観察力や注意力以前にセンスが無いわーーやんなつちやつーー」

「フツフツー！ そろそろオレの出番だなーーだーーこれがスジだろーー」

「ふーん、ようやくソレらしいのが出てきたわね、どれ、パク・・・ダメねおいしくない！ やり直し！」

「メシを一口サイズの長方形に握つて、その上に山葵と魚の切り身を乗せた、お手軽料理だろーがーーこんなもん、誰が作つても味に大差ねーべーーはあ！ しまつたーー！」

(((なるほど、そつ言う料理か！ ーー)))

「お手軽ーー？ 味に大差ないーー？ やけんなてめーー！ スシをまともに握れるまで十年の修行が必要って言われてるんだーー！ キサマラ素人が、いくら形だけ真似したって、味に天と地ほど味が違うんだよボケーー！」

「んじゃ、そんなもんテスト科目にするんじゃねーよ

「つせーよー」「うー！ ハゲ！ 殺すぞー！ 文句あるのかー！ おおーー？ あん？」

（あーあ、メンチの悪いクセでつけました、暑くなつたら最後、味に妥協できなくなるからなあー）

「オイ！次は俺だー！」「いや俺のをー」「俺のだつて

「もーハゲのせいで作り方が皆にバレちゃつたじゃないーこれからは味で審査するしかないわね」

次々ともつていかれる、受験者達のスジだが、どれも試験官の舌を満足させられるはずがなかつた・・・

「蔵馬アーー皆もつていつてゐるけどどうなの？」

「味で審査するなんて、まず受からないから、まあ、ゴハンと魚もある事だし、お皿たべましょつか？さきほど森の中でキノコなども見つけたので、ちゃんとした料理が作れると思いますよ」

「おいおい蔵馬ー、すんなに何で落ち着いてられるんだ？」

「そうですね、この試験、まず合格するとしたら、その道何十年のベテランのスシ職人だけですよ、なので、素人が何をもつていつても合格できない、ここでハンター試験が終了になるか、ハンターアカデミーから試験の変更があるかだと思います。なので、次の試験に備えて腹ごしらえをしておくのが良いと思いますよ」

「ああ確かに、この試験では合格者は出さうにないな・・・」「オリオと同レベル・・・」

「おい！クラピカ！お前まだ俺と同レベルなのが、気に入らねえ

ーのかよー。」

「んじゃーまあせつかく蔵馬が作ってくれたし、メシたべよーぜ」
ゴン達は、試験そっちのけで、蔵馬が作ってくれた、料理を食べ、
一休みをしていた

「悪ーーおなかいつぱいになっちゃった！試験終ーーーアー
ーーー！ー合格者は〇よーーー」

「納得いかねえな、とてもハイそうですかと帰る気にならねえな
！俺が目指してるのはコツクでもグルメでもねえハンターだーー！し
かも賞金首ハンター志望だぜーー！美食ハンターー」ときに合否を決め
られたくないねーーな」

「それは残念だったわね、今回の試験では試験官運がなかつたつ
てことよ、来年また頑張ればーーー？」

「いーーーふざけんじゃねえーーー！」

パン！メンチに殴りかかった受験生は、ブハラの平手打ちで宙
を舞い倒れた

「ブハラ、余計なマネしないでよ」

「だつてさー、俺が手を出さなかつたらメンチあいつを殺つてた
ろ？」

「ふん、まーね、どのハンター目指すとか関係ないのよ、ハンタ
ーたる者、誰だって武術の心得があつて当然ー武芸なんてハンター

やつてたらいやでも身につくのよ！あたしが知りたいのは、未知のものに挑戦する気概なのよ！！」

「それにしても、合格者は、おとキビシすぎやせんか？」

「なんだ？あの飛行船は？」「あれはハンター協会のマーク！」「審査委員会か！？」

「ヒュ――ドオオオン――空の上から老人が飛び降りてきた

「なに者だあの爺さん！？」「あの位置からから飛び降りて足は！？」（ククク やるねえ？）

「審査委員会のネテロ会長、ハンター試験の最高責任者よ」

「ほほほ、ワシはハンター協会のネテロとこ、メンチくん、今回 の試験は事前に報告されたものとは大分ちがうな？」

「・・・はい、すみません料理のことになると我を忘れるんです、審査員失格ですね・・・私は審査員を降りますので試験を無効にしてください」

「ふむ、審査を続行しようとメニュ―の難易度が少々高かった ようじやな、よし！こりしよう！審査員は続行してもらひ、そのか わり新しいテストには君にも実演というかたちで参加してもらひ、 というのでいかがかな？その方がテスト性も合否に納得がいくじや ろ」

「そうですね、それじゃ一ゆで卵！会長わたし達をあの山まで連 れて行ってくれませんか」

「ふむ、いいじゃね?」

—マツタツ山—

「着いたわよ、試験は簡単ここマツタツ山の崖から飛び降りて、クモワシの卵をとつてくる、下は深い流れの速い川よ流れが速いから数十キロ先の海までノンストップだけど、命の危険はそんなにないわ、クモワシは陸の獣から卵を守る為に谷の間に丈夫な糸を張り卵を吊るしてる、その糸につかまり、卵を一つだけもつて岩壁をよじ登つてくる—簡単でしょ?それじゃお先に!」

ナツコってメンチは、崖から飛び降りていった

(・・・簡単に言つてられるぜ、こんなもんマトモな神経で飛び降りれるかよつ!—)

「本当に藏馬の言つた通り試験の変更になつたな、あーよかつた」

「ユーハの待つてたんだよね」

「走るのや、民族料理を作るのなんかより、よせじやなくて分かりやすいぜ」

「でわ、いきましょうか!」

・

「残りは？ギブアップ？」

「やめののも興味じや、テストは今年だけじやないから」

グツグツグツ、飛び降りた参加者達のクモワシの卵を大ナベでメンチが茹でていった

「アリスのアリス...！」

「濃厚でいて、舌の上でとろける様な深い味わい！」

「美味しいものを発見したときの喜び！少しばかりは味わつてもらえた
かしら？」じつと、これに命をかけてるのよね」

について、第一次試験後半めんちの料理合格者43名

第七話 一次試験（後書き）

次はトリックタワー……」からは、「ゴンたちと離れて藏馬メインにしていきます! そしてヒロイン……どうしよう……メンチをヒロインにするつもりだったのに、これだと出来なさそうだ。」
オリキャラは出したくないので、ヒロインになれるそうな娘いないかな?

第八話 飛行船

—飛行船内—

「残つた43名の諸君等に、あらためてあこやつしておいつかの、わしが今回のハンター試験審査委員会代表責任者のネテロじや、本來ならば最終試験で登場する予定であったが、いつたんこうして現場に出てくると、なんともいえぬ緊張感が伝わってきていいもんじや、せつかくだからここのまま同行をせてもううことにする、ほほほ

「次の目的地には、明日の朝八時到着予定です、此方から連絡するまで自由に船内でお時間をお使いください」

受験生をのせた飛行船は大空に飛び立つて行つた

「ゴン! 飛行船の中を探険しようぜ」「うん

「元気な奴等・・・俺は、とにかくぐつすり寝てーぜ

「私もだ、おそりしく長い一日だった

「俺も、少し眠らせてもらおう

「試験は一体後いくつ有るんだろうか?」

「あつ! そういうや聞かされてねーな

「試験の数は、審査委員会が、その年の試験官と試験内容を考慮

して、加減する、だが大体平均して5つから6つくらいだ

「あと、3つか4つぐらいにっこりとか」

「なあのこと、今は休んでいたほうが良いな」

「だが気を付けた方がいい、さつきの進行係は、次の目的地と言つただけだから、もしかしたら飛行船の中が三次試験の会場かもしれない、連絡があるのも朝八時とはかぎらない、寝ている間に試験が終わってしまって、なんてこともなりかねない、次の試験受かりたきや、『』でも気を抜かないほうが良いってことだ」

（なーんちゃって、せいぜいキンチョーして心身ズタボロになりな）

「なー蔵馬、今のトンパの話どうみる？」

「そうですね、他の参加者おもにヒンカに一次試験の時話を聞きましたが、トンパという男はルーキー潰しで有名だそうですよ、なので、飛行船の中では休憩をとるのが良いと思しますよ」

「ケツ一マジかよトンパのヤツ…！分かつたよ、疲れてるし十分休憩させてもうつぜ」

「私も、同じだな、トンパは信用できない、休ませて貰つよ」

「あちらのほうに、休憩できそうなスペースが有ったので移動しまじょうか」

「ねえ今年は何人くらい残るかな?」

「合格者って事?」

「そつ、なかなかシップぞろこだと呟つたよね」

「でも、それは、これから試験内容じゃない?」（メンチみた
いな試験官じや一人も残らないだろつじ）

「そりやま、そーだけどあー、試験してて気づかなかつた?け
けいの良いオーラ出してたヤツラいたじやない、サトシさんどつ?」

「ふむ、そうですね、ルーキーが良いですね今年は」

「あーやつぱりー?あたしは254番が良いと呟つたよねーハゲ
だけど」

（唯一スシじついたしね、406番もじつてやうだつたけど・・・

）

「私は、断然99番の彼が良い、406番の彼も捨てがたいです
が、これからを考えると99番ですね」

（女性なら、是非とも試験終了後にでも、スカウトしたいもので
すが・・・もつたといない）

「99番ー?あいつきっとワガママでナマイキよー絶対B型!ー

緒に住めないはー406番の彼？あれは女の子じゃないの？スシ知つてゐるみたいだつたけど作らなかつたみたいだし、きっと家事は苦手なタイプね」

（そーいう問題じゃないんじゃないかな・・・？406番のスシを知つてゐるのは氣づいてたんだ）

「406番は、男性だそうですよ、一次試験の時に99番と話しているのを聞きましたから」

「じーでも、女性だと思われてゐる藏馬だつた・・・

「ブハラは？」

「そうだねールーキーじゃないけど僕になつたのは、やっぱ44番かな、メンチも氣づいてたと思つけど、255番の人がキレたとき、一番殺氣をはなつていたのが、実は44番だつたんだよね」

「もちろん、しつてたわよ、数え切れない凄い殺氣だつたわ、でも知つてゐるブハラ？あいつ最初からああだつたわよ、あたしらが姿を見せてからずーっと」

「ホントー？」

「そつーあたしが、ピリピリしてたのは実は、そのせい、あいつずーーとあたしに、ケンカ売つてるんだもん！」

「私にもそうでしたよ、彼は要注意人物です、認めたくなりませんが彼も我々と同じ穴のムジナです、ただ彼は、我々より暗い場所に好んで住んでる、我々ハンターは心のどこかで、好敵手を望ん

でいます、そんななかにたまに現われるんですね。ああ、いつ異端児が・・・我々がブレーキをかけるところで、ためらい無くアクセルを踏むような

一 飛行船内一

「へへへ？」

（やつぱり、アイツは危なすぎるな・・・近づかないでおいっ）
（つい近くにいるだけで寒気がするぜ）

そのころ、「ソノとキルアはネテロ会長と玉取り遊びをしていた

・

「機長か？ワジジやネテロじやがの一飛行は順調？そうか、順調なところ悪いんじやが、少しうーつくり飛んでくれんか？」

疲れ果てて、熟睡しているソノのためにネテロは機長にお願いをしていました・・・それから数時間後・・・

「皆様大変お待たせしました、目的地に到着です、ここはトリックタワーと呼ばれる塔のテッペンです、ここが三次試験のスタート地点になります、さて試験内容ですが、試験官からの伝言です、生きて下まで降りてくること、制限時間は

72時間、それではスタート！」

第八話 飛行船（後書き）

うー三次試験の前に、飛行船がありましたね・コンビに行って帰つてきたら、三次試験を書き始めます。

第九話 三次試験 前編（前書き）

あああトリックタワーを降りきったところまで書いたのに・・・消えちゃったT-T途中保存とかできないのかな～？はあーおーん

一トリックタワー頂上一

(生きて下まで降りる」と制限時間は72時間)

「側面は窓一つ無いただの壁か」

「「」から降るのは自殺行為だな」

「普通の人間ならなー」のぐらいの取っ掛かりがあれば一流のロッククライマーなら難なくクリアできるぜ」

グツ グツ スス86番の男は、どんどんと壁を降りていった

「うわすげ～もうあんなに降りてる」

「あ・・・あれ」

ゴンガ遠くから飛んでくる怪鳥の群れを発見した

「ふふん、どうやら第二次試験の合格者第一号は俺様の様だ・・・
?・!・!・!・!わああああああ

「外壁をつたうのは無理みてーだな狙い撃ち・・・」

「もつと、どうかに下に通じる扉があるはずだ」

「・・・？ 人数が減っている 21 22」

「23人！？」

「半数近くが、すでに頂上から脱出したことになるな」

「くそつーこつのもに」

「この人数の中、こつやうと全員が同じルートを使って降りたとは考えづらい。きっとこくつも隠し扉があるんだ」

「蔵馬ー！ レオリオー！ クラピカー！ そこで隠し扉見つけたよ、でも今迷ってるんだ」

「は？ なにを迷う」とあるんだ？」

「じれにしようかと思つて、扉がいっぱい、こじこじ、あとコツチに2つ、少し離れた所に2つ」

「6つの隠し扉か、こんなに密集しているのが、いかにも胡散臭いぜ」

「おやうく、このうちのこくつかが罷・・・」

「だるうな」

「扉は一人につき一つずつ、皆バラバラの道を行かなきやいけない、ゴンとオレはこの中の1つをそれぞれ選ぶ事に決めた」

「罷にかかっても恨みつこ無し！」

「鞍馬、レオリオ、クラピカどうする？」

「いいだろ！……運も実力のつかってな」

「最初に誰が選ぶ？」

「ジャンケンポン！－あいこでしょ－あいこでしょ－

「決まつたな1・2・3で金剛行ひつけ、1レード二つたんお別れだ、地上でまたあおひげ」

「1」

「2」

「3－－」

スター・ストード・カ・ザ－

「くつねーどの扉をえらんでも同じ部屋に降りる様になつてたのかよ」

「違うよレオリオ、鞍馬がいなこよ」

「よつー・飛行船ぶりだな」

「あー・トンパさん・トンパさんが先に降りてたんだね」

「あージュースくれた人が、まだ余つてゐるのど渦こちやつて

「すまない、もうジュースは無いんだアハハ」（）「まだあのジュースを飲むつもりかよ・・・何者だ?しかし、このメンツはルーキーだけだな、ククク」

「そうゆうと、蔵馬の方がわなだつたなかなー」

「いや、もう考えるのは早計だ、この部屋のように全てが下に降りれる可能性もある」

「壁にプレートがあるぜ、多数決の道だー?」

（）「うして、ゴン、キルア、レオリオ、トンパは多数決の道を進んでいく

—蔵馬—

（）「は、眼では無さうだな・・・ゴン達とは別れてしまったが、地上であることを祈りつつ、ん?壁に何かプレートのようなものが・・・」

ひゅーじやー!上からターバンを巻いた人物が降ってきた、蔵馬の降りていた近くにあつた隠し扉からである（）

「いてて、なんとか頂上から脱出できたか

「大丈夫ですか?怪我はないようですが」

「あー大丈夫だよ、オレはポツクル！よろしくなー」（おおラッキー美人のネーチャンと一緒にとは！オレにも運がむいてきたかも）

「よろしくお願ひします、オレは藏馬、壁にプレートがあるみた
いなんで読んで見ましょつか」

バトルの道・このルートは下に向かつと闘技場がある、そこをク
リアすれば地上に向かえる

「バトルか、あんた腕に自信はあるかい？オレはこの『』があれば
ソコソコ戦える」（良いとこ見せて、ポイントをかせぎたいな）

「ええ、オレも腕にはソコソコ自信がありますよ、ではポツクル
さん向かいましょつか」

一本道を暫く藏馬達が歩いていると開けた空間でた、部屋の中
央にはリングが設置されていた、様子よ見ていると、天井から釣り
下がっているスピーカーからアナウンスがながってきた

「ここでは、君たちに向こうの扉からでてくる囚人達と戦つても
らう、人数は5人、一人で戦つても、交互に戦つても構わない、た
だ参加をすると棄権は認められなくなる、ルールを説明しよう、武
器の使用は許可する、リングがら出た場合は10カウントで負けと
なる、勝負は死亡するか場外でのカウント負けのみ、ギブアップは
認めない、ああ相手は、凶悪犯罪犯、殺しても気にしなくて良
い、どうする、参加する？しない？キシシ」

「もちろん！参加するに決まってる！犯罪者！」ときにオレは負け
ない！」（オレの勇姿をみせてムフフ）

「参加します」（死亡するかカウント負けのみ？なにがあるのか？）

「よろしく！でわ第一試合を開始する」

試験官がそういふと、反対側のゲートが開き、一人の男があるいはきた

「彼の名は、ゲイリー。リッジウェイ、通称：川男、彼が殺してきた人数は1000人以上、殺した人間の血で川が出来たことからそう呼ばれている、刑期は1200年だ、存分に戦つてくれたまえキシシ」

「じょ！冗談じゃ無い！あんなヤツと戦える訳ないだろ！」

「・・・いったはずだよ、参加をすると棄権は認められなくなるとね」

「くつ！（いい所をみせるどころか、殺されちまつ・・・オレつてやつぱり運が無いのかな・・・）

「ポツクルさん、オレが先にいきますね」（特に問題は無いな・・・。ただの犯罪者か）

「わ わかった、でも気を付けるよ、危険だと思ったら場外に出て、カウント負けをするんだ」

「大丈夫ですよ、でわ行つてきます」

そういうと藏馬は、リングの上に飛び乗った

「ククク、対戦相手はキレイなネーチャンか、シャバにいた時にも殺せなかつた上玉だ、囚人になるのも悪くねーなー、一番手になれるなんて俺はシイてるぜ」

「じゃたくは良いー・・・わざわざ掛かつて来い、あとオレは男だ」

女に間違われて、蔵馬は頭にきてこるようだ、この世界に着てから間違われっぱなしなのがいけなこと思つが

「いれより第一試合はじめ！－キシシ」（406番が男だつたとは・・・）

「男でも、キレーなツラしきむなら楽しめやー。」

ゲイリーは蔵馬に向かつて走り出し、背中に纏していた鎌で足元を薙いだ、鞍馬は軽くジャンプして交わし、ふたたび距離をとる

「たいした使い手でも無わやつだ、今樂にしてやるよ。」

蔵馬は、ゲイリーの鎌をかわしつつ、右手で手とつを呑み込んだ

「ちよこまかと逃げやがるーお前もオレが過去に遊び殺したヤツと回じよつに、この鎌で切り裂かれればいいんだよーーお前の攻撃なんてオレには効きはしねーよ。」

やう言つて、ゲイリーは鎌を振り回しながら蔵馬に攻撃を仕掛けたが、どんどんと激しくなる攻撃、しかし蔵馬は、ソレをなんなく交わしていた、する突然ゲイリーの動きが止まった

「うつ！？体が動かねエ」

藏馬は、冷酷な目でゲイリーをみると闘技場の気温が低く感じられる殺氣を出しながら、口を開いた

「さっき、お前にシマネキ草の種を植えこんだ、体の自由がきかないほど、根が全身に行き渡った様だね・・・おれが、ある言葉を発すれば、爆発的に成長し体を突き破る、キミが外道でよかつた、オレも遠慮なく残酷になれる」

（なんだ、蔵馬の、あの凍るような目は・・・アレは俺たちとは違う！ヒソカの様な危険な感じがする・・・）

「まっ！待つてくれ俺が悪かつたア許してくれヒイイイ！！！！！」

(ほーあのゲイリーを、あそこまで追い込むとは・・・シマネキ草?聞いたことが無いな?寄生植物だろうがキシシ)

死ね

「……………」ハヤセはまたまた笑った。「……………」

「皮肉だね、悪党の血の方がきれいな花が咲く……」

（ちよつ！マジかよ！何この死に方！）「うーん、ああー、やつぱりオレは運が無いワーゲン）

「あつー！ 蔵馬さんー！ 試合お疲れさまでしたー！ タオルあるんで使つて下さーーー！」

ポツクルは恐怖の余り藏馬の機嫌を取ることにした

「ポツクルさん、ありがとう！」わざわざ

笑顔で、答えた藏馬の顔すら今のポツクルには、恐怖以外の何者でもなかつた

「死体の片づけが終わるまで、暫く休憩してくれたまえキンシ」

—囚人控え室—

「じょ[冗談じやねえ。俺たちはもう抜けるぜ]…」

「殺しが出来て、恩赦がもらえるって参加したんだ、オレはあんたやゲイリー程、強くねーんだ！」

「刑務所の中の方がよっぽど[安全だぜ]

バシユーバシユーバシユ！

奥に座っていた男が立ち上ると、3人の首めがけて回し蹴りをした

「フイー、おい！刑務官！不慮の事故で3人が死んだ、この場合、オレが出ても問題ねえよな？」

「・・・問題ない、しかし、殺した囚人の分は、お前の刑期に加えるからなー囚人を殺すなど何度も言つたろつ！…」

「ん～～はいはい、これから氣をつけるよ、刑務官殿アハハ」

（ちつ～恥々しいヤツめ！コイツも殺してくれないかな・・・しかしコイツは念能力者、406番に対抗できるか？）

第九話 三次試験 前編（後書き）

次回：トリックタワー後半！また消えるのが怖いので途中で区切らせていただきます。

—闘技場—

先ほどの試合が終わり、死体の処理も終わった闘技場で、次の試合が始まるのを、蔵馬たちは、じつとまつていた。

「ポツクルさん、次の試合はどうしますか？俺がこのまま戦つてもいいですか？」

蔵馬は、さっきのポツクルの様子を見ると、もう使い物にならないと重いながらも話しかけた

「へへい、すみません、俺では力不足のようです、蔵馬さんよろしくおねがいします！」

ポツクルは、完全に小物になっていた。

そこに、アナウンスが流れ始めた「これより第五試合を始める！キシシ」

第五試合？次は第一試合のはずだろ？蔵馬は、疑問に思いながらアナウンスに耳を傾けた。

「先ほど、控え室で不慮の事故がおきた、第一、第二、第三、第四試合に出るはずだった囚人が、死亡これにより第五試合の囚人しかいなくなつた。この試合に勝てばクリアだ、では、頑張つてくれたまえキシシ」

試験官が、そう言つとゲートが開き、大柄な男が笑顔で手を上げながら進んできた、隙があるよつて隙が無い、先ほどの男とはまったく違う、強者のオーラをかもし出しながら。

「彼の名は、ジョン・ウイリー、通称：ナチュラル・ボーン・キラー、彼が殺してきた人数は5000人以上、生れながらにした殺人鬼だ、刑期は6400年だ、格闘かや腕自慢のを殺してきた男だ、ゲーリーとは別物だよ・・・出来ればコイツは殺して貰いたいよ、

でわ戦つて勝つてくれたまえキシシ

「よう！刑務官さみしいーこと言つじやねエーか、囚人なんか殺しても問題は無いだろ？俺は強いやつと戦いたいだけなんだ、ビビッてる小物なんかに時間を取られたくなエ、本物の戦いがしたいだけさ、さあ！早くリングに上がつて来い！」

蔵馬は、試験官とジョンの会話を聞き、相手の予想を立てていた、彼は戦闘狂か、確かに彼から感じるオラーは戸愚呂並だ、それにヤツの右腕・・・異常に発達している、おそらく彼の最大の武器は右腕からの攻撃だろう、しばらく様子を見るか。

そう考えながら、蔵馬は、リングの上にたつた。

「それでは、第五試合開始キシシ！！」

ジョンの姿が、突如として消失した。

視界が捉えたのは、碎けるリング、視界をさえぎる粉塵のみ、そしてジョンが大声で叫んだ。

「コレが俺の必殺技よ、死招ワーリングクライト乃右だ、単純に右手で思いつきりブン殴るだけだがな、威力はこの通りだ、リングはもう無い！場外負けは無くなつた！お前のチカラも俺にみせてくれよ！」

粉塵が収まるごとに、そこにはリングの元あつた位置に一人は立つて、いた、ポツクルは先ほどの衝撃で壁に激突し、気を失つていた。

（チツ！ジョンのヤツまた施設を破壊しやがつた！俺に何か恨みでもあるなか？406番！本気であいつは殺してくれ）

「俺からも、行かせて貰います薔薇棘鞭刃ローズウイップ」

蔵馬は懐から1本の薔薇を取り出し、妖氣をこめムチに変化させた、ムチを構えながらジョンに向けて疾走する、放たれた蔵馬の一撃はジョンの胸板めがけてき、直撃した、しかし・・・

「フー、いい一撃だぜ、血を流すなんて何年ぶりだろ？アハハ」

ジョンは、切り裂かれた傷口を楽しそうに右手で撫ぜ口元にもつていく。

「さー、こつからが本番だ！」

一気に駆け出したジョンは、右手で蔵馬の腹めがけてパンチを繰り出した、蔵馬はその間合いから逃れるように後退したが、かわしたはずの攻撃が激しい衝撃となつて腹部を襲つ。

「くつ！かわしたはずが……」

「コレは、遠当てつて技だ、文字道理の攻撃を遠くに当てるだけの技だが、俺の右手から放たれる一撃は岩をも碎くぜーコレを食らつて立つているのはアンタで3人目だ！」

今の人間の姿をした、蔵馬には、結構なダメージだった、接近すると死招乃右間合い^{カーリングクラッシュ}が離れると遠近^{カーリングクラッシュ}で、ジョンはこの攻撃2つで数々の格闘家たちを倒してきた。

「ならば、これはどうだ！」

鞍馬は懐から葉っぱを左手で出し妖氣を込めナイフにする、それをジョンめがけて投げつけた、かわすことをせず間合いを詰めてくる、ナイフは腕や体に刺さるもの、気にする様子も無く蔵馬の手の前まできた。

「風華円舞陣！！（フウカエンブジン）」

空中に撒かれた、刃のように研ぎ澄ませれた花びらが蔵馬を守り包み込んで、その領域を侵す全てのものを切り刻む。

「ぐはっ！」

流石に、この攻撃にはジョンも後退した、蔵馬は懐に潜り込みジョンの胸に当身を食らわす。

「中々やるじやねーか！楽しいぜ！だが、最後の一撃は失敗だな」ジョンはそう言つと血の胸の傷に指を突つ込んだ

「わつきの試合は控え室のモニターで見させてもらつたぜ、この俺に一番煎じはきかねよ」

シマネキ草の種は指で、すりつぶされた。

さつきの試合で、シマネキ草を見せたのは間違いだつたか、だが今の大蛇のチカラを取り戻した俺なら吸血植物は呼べる、コイツを胸に叩き込めば決まる、勝負は、攻撃後の隙が大きいウェービングライトをかわした時！

蔵馬は、考えをまとめるに、ジョンの攻撃を誘つ為にムチを捨て、接近戦に持ち込んだ。

「おお、インサイトか！俺の最も好きな事に付き合つてくれるなんてありがてエーな」

二人の攻撃は、激しさをます、衝撃で砂煙が舞い上がり、徐々に両者にダメージを与えていく、ジョンの左ストレートを蔵馬は右手でガードし、飛ばされ間合いが少し開いた！

「死招乃右！」
ウェーピングライト

すかさず、絶好の間合いに必殺技を放つ！蔵馬はそれをしゃがみ込みながら回避しジョンに向けて吸血植物を吐還した。

「ぐがああ！！！」

吸血植物はジョンの胸を突き破つた。

「ぐはっ、コレで勝負は決まったな楽しかったぜ、俺アーモう満足だ、ハラア いっぱいだ・・・」

そう言つとジョンは息絶えていた。

「キミも強かつたよ・・・生まれ変わって魔族になつたら幽助と戦つて見るといい・・・」

大量殺人を犯した、ジョンだが非道な男では無かつた、彼はただ強いものと戦いたい、それは魔族の本能のよつなものだ、蔵馬は彼にそつとぶやいた。

「試合終了、おめでとうキシシ、ゲートを開けるからそこから降りるといい、壁際に転がつている彼も連れて行つてくれたまえキシシ」

ゲートが開かれ蔵馬はポツクルを担ぎ闘技場を後にした・・・
(ジョンをやぶるほどの念能力者か、今年のルーキーは優秀なようだキシシ)

「第三次試験406番53番合格！所要時間13時間45分」

スピーカーから、合格を告げるアナウンスが流れた、蔵馬は今だ氣を失つているポツクルを壁際に寝かせ、持つている薬草で腹の傷を癒していた。

「ククク 試験おつかれさま、キミに傷をつけるなんて試験官も中々いい手駒をもつていたね」

ヒソカが、そういうながら近づいてきた。

「ええ、手ごわい相手でしたよ、手当でが終わつたら試験終了までやすませてもらいますよ」

「トランプでもどうかと思つたんだけど しかたがないね、キミと戦えるのを楽しみにしているよククク？」

ヒソカは、蔵馬のそばから離れ、トランプタワーを作つては倒し、作つては倒して時間を潰していた。

残り時間が30秒のアナウンスが流れてきたとき、3人の足音がゲートの方から聞こえてきた。

「ケツいてー」

「短くて簡単な道が、滑り台になつてるとは思わなかつたよ」

「ギリギリだつたね」

「もう手がマメだらけだ」

「全くイチカバチかだつたな、だが5人揃つてタワーを攻略できた、ゴンのお陰だな、全くあの場面でよく思いついたもんだ」

「長くて困難な道から、50分以内に壁を壊し短く簡単な道へ行く、確かにこれなら5人揃つて時間内に脱出出来」

「対戦した試験官が壁や床を素手で壊してたからさ、道具さえあれば、残り時間内に穴を空けられるかもつて、思つただけんあんだけどね」

（极限の精神状態で、一択を迫られてなお、それをブチ壊す発想

が出来る・・・そこがお前のすゞ」といふだ

「タイムアップーーーーー第三次試験通過人数26名ーーーー（内1名

死亡）」

第十話 三次試験 後編（後書き）

それにして戦闘描写は難しい・・・

第十一話 四次試験

一船上一

三次試験が終わり、四次試験会場に向かう船の上で、試験内容が発表された

「諸君タワー脱出おめでとう、残る試験は四次試験と最終試験のみ、四次試験はゼビル島で行われる、でわ早速だがこれからクジを引いてもらつ」

「くじ・・・？」

「これで一体なにを決めるんだ？」

「このクジで決定するのは、狩るものと狩られるもの」

試験官助手が持ってきたクジの箱に皆の視線が集中する。
「」の中には24枚のナンバーカードと1枚ワイルドカードすな
わち、今残っている諸君らの受験番号とプラス1枚が入っている。
今から一枚つ引いてもらおう、それではタワーを脱出した順にカードを引いてもらおう」

受験者たちは、順々にカードを引いてきつた

「全員引き終わつたね、諸君がそれぞれ何番を引いたかは、全てこの機械が記録している、したがつて、そのカードは各自自由に处分して結構、それのカードに記された番号の受験生が、それぞれのターゲットだ」

試験官は、受験生たちを見渡すとルール説明を続けた

「奪うのはターゲットのナンバーカード、自分のターゲットとなる獲物のプレートは3点！自分自身のナンバーカードも3点！それ以外のナンバーカードは1点！最終試験に進む為に必要な点数は6点！ゼビル島での滞在期間中に6点分のナンバーカードを集めること！例外としてワイルドカードこのカードを引いた受験者

のナンバープレートは6点だ」

試験官の説明が終わると、受験者たちは、自らのナンバープレートを懐に隠していった、誰が自分を狩る者か、誰が自分の獲物か誰とも視線を合わさず、情報を遮断していった。

－ゼビル島－

「それでは、第3次試験の通過時間の早い人から順に下船してもらいます。一人が上陸してから3分後に次の人人がスタートする方式を取ります！！滞在期間は丁度一週間！そのあいだに6点分のプレートを集めて、またこの場所に集まつてください！！それでは、一番の方スタート！！」

全ての受験生が、島の中に散らばつて行つた、ゼビル島は縁豊かで過ごしやすい島だが、人の手が全く入っていないことから、森に入ると見通しが悪く、ジャングルのような生態だつた、藏馬は運良くワイルドカードを引き当てたので、この試験中は誰とも会わないように、森のを進んでいった。旅で使つた薬草の補充も兼ねて奥へ奥へと、薬草を探しながら試験終了まで森の奥深くを探索しつた。

「ボー！！スタート地点の方から船の汽笛が島一帯に鳴り響いた

「ただいまをもちまして、第四次試験は終了となります。受験生の皆様はすみやかにスタート地点にお戻りください！これより一時間の帰還猶予時間とさせていただきます。それまでに戻られない方は、すべて不合格とみなしますのでご注意ください！なおスタート地点に到着後のプレートの受け渡しは無効です、確認され次第失格となりますので、ご注意ください！！」

—飛行船内—

最終試験会場に向かう飛行船の中では、ネテ口会長を始め、試験官たちが集まつて今年の試験について話をしていた。

「10人中7人がルーキーか、ほほほ豊作、豊作」

「たまにあるんですか？こんなことつて？」

「うむ、たいがい前触れがあつてな10年ぐらいルーキーの合格者が出ない時期が続く、そして、わっと有望な新人があつまりよる、ワシが会長になって、かれこれ4度目かのー」

「へえー」

（会長って年いくつなの？）

（20年ぐらい前から約100歳と言つてますけど）

「ところで、最終試験は一体何をするのでしょうか？」

「あ、そうそう、ぼくらも、まだ聞いてないね」

「ルーキーの豊作の年かどうかは、まだ最終試験次第だもんね」

「うむ、それだが一風かわった決闘をしてもらひつもりじや」

「？」

「その為の準備として、まず10人とそれぞれ話をしてみたいの

オ

（ビーウーことだら？）

（わー会長の考える事は私には、わいぱり

「えーこれより会長が面接を行います。番号を呼ばれた方は2階の第一会議室までお越しください」

「受験番号44番の方！44番の方をお越しください」

会議室は、和風の居間の様な部屋だった、ネテ口会長が上座に座り、ちやぶ台をはさんだ反対側には座布団がひかれていた。

「まあ座りなされ」

「まさか、これが最終試験かい？」

「まったく関係ないとは言わんが、まあ参考までにちょっとpiri質問する程度のことじやよ。まず何故ハンターになりたいのかの？」

「別になりたくないけど、資格持つてると色々便利だから？例えば人を殺しても免責になる場合が多い意しね？」

「なるほど、ではおぬし以外の9人の中で一番注目しているのは？」

「99番？405番も捨てがたいけど一番は彼だね いつかは手合わせ願いたいなア ククク？」

「ふむ・・・でわ最後の質問じや、9人の中で一番戦いたくないのは？」

「・・・それは405番・・・だね 99番もそうだが・・・今は、まだ戦いたくない・・・と言う意味では、405番が一番かなちなみに、今一番戦つてみたいのは、あんたなんだけね」

「うむ、じうううだつた、さがつてよいぞ」

質問が終わりヒソカは部屋から退室していった
(くえないジイサンだな まるでスキだらけで毒氣抜かれちゃつたよ)

一ポックル

「注目しているのは404番だな、一番バランスが良い」

「406番！..ムリ！..絶対にムリ！..わあーーん」

一キルアー

「ゴンだね、あ、405番のさ同い年だし」

「53番かな、戦つてもあんまし面白く無せうじやないし」

一ポドロー

「44番だな、いやでも田に付くつぐ

「99番と405番と406番だな女子供とは戦つとは考えられぬ」

—ギタラクル—

「99番」

「44番」

—ゴン—

「44番のヒソカが一番きになつてゐる色々あつて」

「うん99・403・404・406番の4人は選べないや」

—ハンゾウ—

「44番だな、こいつがとにかく一番ヤバイからな」

「もちろん44番だ」

—クタピカ—

「良い意味で405番、悪い意味で44番」

「理由があれば誰とでも戦うし、無ければ誰とも争いたくない」

—レオリオ—

「405番だな、恩もあるし、合格して欲しい」と思つぢや

「そんな訳で405番とは戦いたくねエーな」

—蔵馬—

「そうですね、そうですね405番彼には助けてもらいましたし、彼の目標は是非かなえてもらいたいので」

「405番です、同じ理由で」

「ひして参加者すべての面談が終わり、ネテ口会長は、決闘の組み合わせを書き出した

「うーむ、なるほど思ったより、かたよつたのオ、これで良しつ
ヒーおい、みんな見てみイ、組み合わせが出来たぞえ」

「会長・・・これ本氣ですか？」

「大マジじや、ひえつひえつ」

（たしかに本氣の田だ：」

「みなさま長らくお待たせしました、間もなく最終試験会場に到
着します」

飛行船は最終試験会場に降り立つた、降り立つた受験者たちは最終試験に向けて気合を入れなおした。

「これで勝てば晴れて、ハンターの仲間入りじゃ、試験は3日後に行う、各自それまでハンター委員会が経営するホテルで疲れを癒して欲しい、それでは3日後に又会おう」

受験生たちは、各々今までの試験の疲れを癒す為に、割り与えられた部屋に向かっていった。

第十一話 四次試験（後書き）

はい！すみません、三次試験で戦闘描写に疲れたので、ぶつちやけ四次試験は逃げました。

第十一話 最終試験（前書き）

何気につーナメント表作るのに苦労しました……投稿してズレがあつたら直します

第十一話 最終試験

—最終試験会場—

ホテルでの3日が過ぎ、これから、最終試験が行われようとしていた
「さて諸君、ゆっくり休めたかな? ここは委員会の経営するホテル
じゃが、決勝が終了するまで、君達の貸切となつておる、最終試験
は一対一のトーナメント形式で行つ。その組み合せは? じや?」
「!」

209

405

406

53

99

301

191

404

—

「さて最終試験のクリア条件だが、いたつて明確たつた一勝で合格である！！」

「つてことは・・・」

「つまり、このトーナメントは、勝つた者が次々抜けていき、負けたものが次々上に上がっていくシステム！この表の頂点は不合格者を意味するわけだ、もう、お分かりかな？」

「つまり不合格者は、たつた一名つてことか」

「さよう、しかも、誰でも2回以上の勝つチャンスが与えられている、何か質問は？」

「組み合わせが公平ではない理由は？」

「うむ、当然の疑問じゃな、この取り組みは、今まで行われた試験の成績を元によって決められている、簡単に言えば、簡単に言えば成績の良い者にチャンスが多く与えられているということ」

「それって、納得出来ないな、もつと詳しく点数の付け方とか教えてよ」

「だめじゃ

「～～～なんでだよ！？」

「採点内容は極秘事項でな、全てを言つ訳にはいかん。まあ、やり方くらい教えてやろう、まず、審査基準これが大きく分けて3つ、身体能力値、精神能力値、そして印象値これからなる。重要なのは印象値！」

これすなわち、いうなればハンターの資質評価と言つたところか、それと諸君等の生の声とを吟味した結果こうなつた以上じゃ！」

「・・・」

（試験の結果ならオレの方が上のはず・・・！資質でオレがゴンに劣つてはいる！？）

キルアは、ネテロの説明を聞いて、今まで感じたことの無い感情が湧いてきた

「戦い方は単純明快、武器OK反則なし相手に”まいつた”と言わせれば勝ち！ただし、相手を死に至らしめてしまったら即失格！その時点で残りの者が合格、試験は終了じゃよいな」

「それでは、最終試験を開始する！――」

－第一試合 ハンゾー対ゴン－

開始直後、ゴンがスピードで撓乱しようと走り出しだが、ハンゾーのスピードの方が速く、首に手とうが叩き込まれてしまつ、倒れたゴンの頭をハンゾーは脳震盪を起こすように平手打ちで叩いた、しかし、ゴンは、負けを認めず、ハンゾーは3時間同じ事を繰り返した。ハンゾーはゴンの腕を折ると言い負けを認めさせようとするが、これはゴンが否定、ハンゾーはゴンの左腕を折った、それでもゴンは負けを認めない、今度は足を切り落とすと脅されたが、切断したらオレは死ぬとゴンに言われ、踏みどどまり何故負けを認めないか、ゴンに問いただし、ゴンの目を見て自分の負けを宣言したが、ゴンがワガママをいつたところでハンゾーの右アッパーが決まりゴンは氣絶

第一試合－勝者 ゴン

－第一試合 クラピカ対ヒソカ－

クラピカから攻撃を仕掛け、ヒソカは交わしていく、そしてヒソカはクラピカの耳元で囁いた、その後に負けを宣言

第一試合－勝者 クラピカ

－第三試合 蔵馬対ポツクル－

開始直後、ポツクルがジャンピング飛び土下座、泣きながら負けを宣言

第二試合ー勝者 蔵馬

ー第四試合 ハンゾー対ポツクルー

ハンゾーに「ゴンと同じような体勢に押さえ込まれたポツクル、ハンゾーの「悪いが、あんたにや遠慮しねエーゼ」の言葉で泣きながら負けを宣言

第四試合ー勝者 ハンゾー

ー第五試合 ヒソカ対ポドロー

スタートから一方的にヒソカの攻撃、ボロボロになつたポドロヒソカが耳元で囁き、ポドロが負けを宣言

第五試合ー勝者 ヒソカ

ー第六試合 キルア対ポツクルー

ポツクルの前の試合をみてキルアは、戦う気が起きず開始と同時に負けを宣言

第六試合ー勝者 ポツクル

ー第七試合 レオリオ対ポドロー

レオリオが、ポドロの怪我を理由に、試合の延期を申請

第七試合ー第八試合後に再戦

ー第八試合 ギタラクル対キルアー

スタート開始に、ギタラクルが喋り、顔に刺さっていた針を抜き出す。そしてキルアと話をし出し、会話が終わると、キルアは負けを宣言、宣言後は抜け殻になつたようにうつむいて、誰が話しかけても無反応になつた。

第八試合！勝者 ギタラクル

一第九（七）試合 レオリオ対ポドロー

レオリオとポドローが向かい合い、開始が宣言された直後、キルアがポドローを背中から貫き手で突き刺し死亡させた。そしてキルアは会場から姿を消した。

第八試合！勝者 レオリオ

一ハンター合格者説明会一

合格者達は、キルアの失格について話し合っていた、キルアに暗示が掛けられていたという意見、レオリオ対ポドロー戦で起きた事なのでレオリオが不合格という意見、クラピカの勝利が不自然という意見、ポツクルの不戦勝での勝利が不自然と言う意見、しかし、一度決まつた結果は覆されないとネテロが言い、ハンター試験合格者説明会を始めた。

「皆さんにお渡したカードがハンターライセンスです、偽造防止のための、あらゆる最高技術がほどこされています、民間人が入国不能の約90%と立ち入り禁止地域の75%まで入ることが可能になります。

公的施設の95%は無料で利用でき銀行からの融資も一流企業並に受けられます、売れば人生七回は遊んでもごせますし、持っている

だけで一生なに不自由せざ暮らせるはざです。それだけに、紛失・
盗難にはご注意ください、再発行はいたしません。我々の統計では
ハンターになつた者の5人に1人が、一年以内に何らかの形により
カードを失つています。」

「プロになつたあなたの方の最初の試練は”カードを守ること”とい
つて良いでしょ、次は協会の規定についてですが……さて
て以上で説明を終わります。あとは、あなた方次第です。試験を乗
り越えて自分自身を信じて夢に向かつて前進してください、ここに
いる8名を新らしくハンターとして認定いたします……」

説明会終了後、ゴンはギタラクルにキルアの居場所を聞いた、ギ
タラクルはあつさりと自宅の場所を教えた”ククルーマウンテン”
ギタラクルに居場所を聞いたゴン達が歩いていると、ハンゾー・
ポックルが近づいてきて、ホームコードの交換を持ちかけて、レオ
リオ・クラピカは交換した、ホームコードを持つていなかつた、ゴ
ンと藏馬は名刺だけ貰い、ハンゾーとポックルに別れを告げた。
目指すはククルーマウンテン！電脳ページで場所を検索”パドキ
ア共和国”飛行船のチケットを予約し一行はキルアを迎えて行く・
・

第十一話 最終試験（後書き）

「うーん、下書きではチャンと表になってるのに、にじファンで見るとズレてる・・・何故？解決方法知ってる方、是非教えてください m(。。)m
ギリギリ何とか見えるよくなつたかな？」助言有難うございました。

闇話　靈界ランク・念能力（前書き）

頭の中で、強さを考えるのが限界になつたので追加をさせていただきます。

閑話 霊界ランク・念能力

< 蔵馬 >	
ランク	A級下位
念能力	無し
< ゴン >	
ランク	D級下位
念能力	無し
念系統	現在不明
< キルア >	
ランク	C級下位
念能力	無し
念系統	現在不明
< レオリオ >	
ランク	D級下位
念能力	無し
念系統	現在不明
< クラピカ >	
ランク	D級下位
念能力	無し
念系統	現在不明
< ポツクル >	
ランク	D級下位
念能力	無し
念系統	現在不明
< ハンゾー >	
ランク	C級中位
念能力	無し

念系統 現在不明

〈ゲイリー・リッジウェイ〉

ランク D級上位

念能力 無し

念系統 現在不明

〈ジョン・ウイリー〉

ランク B級上位
ウェーピングライト

念能力 死招乃右

右拳に大量のオーラを込めて繰り出すストレートパンチ。

非常に単純な技だが、小型ミサイル並の威力を誇る。

念系統 強化系

〈ヒソカ〉

ランク B級上位

念能力 現在不明

念系統 現在不明

〈イルミ（ギタラクル）〉

ランク B級上位

念能力 (仮称) 針で刺したものを操作する能力

針を刺したもの操る能力。相手に自由を強要したり、暗示を与えることもでき、また、自分に刺して顔を変えることもできる

念系統 操作系

〈ネテロ〉

ランク A級上位

念能力 現在不明

念系統 現在不明

矛盾点が出次第修正いたします。
念能力にはウイキペディアから、引用しております。
ジョン・ウイリー・・・ぶつちやけウボーギンと被ります。

第十二話 試しの門

一パドキア共和国一

パドキアに着いた一行は、電車にのりゾルディック家を目指していた。電車揺られ、窓からみえるククルーマウンテンは、不気味な雰囲気をかもし出していた。

駅に到着すると、聞き込みを開始した、すると、駅から出てすぐの八百屋のオバサンが、ゾルディック家観光バスの話をしてくれた。ゴン達は、バスに乗り込んだ、バスの中には一般的の観光や客に混じり、明らかにカタギでは無い人物達も乗っていた。

バスガイドは、ゾルディック家の説明をし、ゆっくりと目的地に進み到着した。

「ここが正門です、別名黄泉への扉と呼ばれています。

入つたら最後生きて出られ無いとの理由です、中に入るのは看守室横にある小さな扉を使いますが、これから先は、ゾルディックの私有地になりますので見学できません」

ガイドの説明を聞き終わると、辺りを見渡して見る、高さ50メートルを越える巨大な壁が、辺り一帯を囲つており、目の前の門は、巨人が住む家の門の如く、重厚な雰囲気だ。

ギタラクルから聞いたゾルディック一族の住むククルーマウンテンの頂上は、はるかまだ先立つた。

ゴンは、ガイドに質問をした。

「ねエ、ガイドさん中に入るのはどうしたら良いの?」

「ん~ボウヤ、私の説明聞いてまして?中に入れば二度と出てこれません、殺し屋の隠れ家なのよ~」

ガイドと話していると、バスの中にいたカタギでは無い者たちが、

看守室の扉を壊し、看守の胸ぐらをつかみ持ち上げ、看守から鍵を奪い取ると小さい扉から中に入つていった。

「おじさん、大丈夫？」

「ゴンは、看守に近づいて、心配そうに見つめる
「いてて、大丈夫だよ、あーあ、またミケがエサを食べちゃうよ」
「えっ？」

看守が、不穏な事を言うと、小さい扉が、内側から開き、熊よりも大きい何らかの動物の腕が、先ほど入つていった者達であろう、入つた時と同じ服装をした骸骨を外に捨てるように落とし、扉から腕を引っ込めた。

「わあ――――！」「ひい――――！」その様子を見た一般観光客達は、われ先につとバスに向かつて走り出した。

今まで人間の死を身邊にあるとは感じられなか
が、邊にハシ
パクトが強すぎたようだ。

通り無残な姿を晒すことにして・・・」

してんだ、早く乗つてーーー。」

「あつ、えーと行つて良いですよ、俺たちココに残ります」

ガツワールドー！「ンの一言で、観光客・ガイド・看守の時間は一瞬止まつた・・・そして、時は動き出す・・・

バスは、ゴンたちを置いて町に戻つて行つた。

レオリオが、巨大な門を開けるのに挑戦するが、押しても引いても左右に開けようとしても、扉は全く動かなかつた。

単純に力が足りていないと看守のゼプロさんは言い、お手本を見せてくれる事になった、上着を脱ぎ呼吸をととのえると、ゼプロさんの筋肉がパンプアップされ一流のボディービルダーのよつた腕になつた。

「ギイゴオオン!! 重い音を立てながら扉は開いていつたが、すぐ閉じていつた。

「ふうー、『ご覧の通り扉は自動で閉まるから、開いたらすぐ入ることだね』試しの門を開けて入つてくる者には攻撃するな』ミケにはそう命令されてるんですよ、1の扉は片方2tあります」

「2ト・・・そんなもん動かせーねぞ普通・・・1の扉はだと・・・？」

「ええ、じらんなさい」まで扉があるでしょ」

「ああ

「扉が1つ増えていく」とに重さが倍になつて行くんですよ

「倍!?

「力を入れれば、その力に応じて大きい扉が開く仕組みです。ちなみにキルア坊ちゃんが、戻つてきたときは3の扉まで開きましたよ」

「3の扉・・・つてことは12t!?

「・・・16tですよ」ゴン君・」

「うーん、気に入らないなー、おじさん鍵貸して友達に会いに着ただけなのに、試されるなんてまつひらだから、俺は侵入者でいいよ」

ゴンは、ハンター試験のハンゾー戦の時のよつて、意地でも試しの門から入ろうとはしなかつた。そこで蔵馬が・・・

「ゴン君、キミは友達の家に玄関からはいらないんですか? 本当にキルア君と友達なら正面から行きましょ、地域によつて色々な風習があるんですよ、俺の地元(魔界)でも似たような所はありますたし、時間もあることだし試しの門から堂々とキルア君に会いに行きましょ!」

「私も同感だ、1の門から入る」とこじょつ

「ゴン」

三人の説得もゴンは聞かず、ゼプロさんに手を向け鍵を要求していた。

ゼプロは、キルアの友達をミケのエサにはする訳にはいかないと、看守室に戻り執事に電話を掛けたが、おしかりを受けただけだった。ゴンは、俺にも話をさせてくれとゼプロにたのみ、執事室に又電話を掛けもらひ、しかし、「キルア様には友達などおりません」と電話を切られてしまつ、すぐさま電話を掛けなおすが「余計な外敵から主を守るのが執事の務め、悪いがお引取り願おう」と又切られてしまった。

ゴンは、キレていた、釣竿を振りかぶると門の頂上にハリを引っ掛け、よじ登るうとした。

ゼプロは見ていられなくなり、鍵を渡す、しかし自分も着いて行くといった、もしかしたらミケが自分の事を覚えていて、攻撃をしてこないかもしないと、ほぼ100%殺されると付け加えて。

ゴンは、ゼプロのその言葉に落ち着きを取り戻した。

「それは、ダメだよ、そこまで迷惑は掛けられない」

「いいえ行きます、残つても同じことですから、いざれにしろキルア坊ちゃんの友達を見殺しにしたらもひ、坊ちゃんに呑わせる顔がありません、貴方たちが死ねば、私も死にます」

「わかったよ、ゴメン、おじさんのこと全然考えてなかつたね」（良い子だ・・・芯が厚く、仲間を信頼し、他人のために私憤をおさめる優しさを持っている）

「ゴン君、もう一度試しの門を開けます、今度はミケを正面から見てください」

ゼプロは「ゴン」に、そう言いながら試しの門の前にたつた

「ゼプロさん、ちょっと俺に開けさせてもらえませんか？」

蔵馬はゼプロに言つて門の前に立つた

「構いませんが、大丈夫ですか？」

「おい、蔵馬さつきの俺を見ただろ、お前じや開かねエよ」

「ゼプロさんに任せた方が良い」

「蔵馬開けるの！？」

「まあー見ていて下さい」

スゴオ「オオオオー！蔵馬が扉に手をかけ力をこめると、大きな音を立てながら扉が開いていく、1の門2の門3の門4の門

「おおーまじかよ蔵馬！！」（俺の立場が・・・）

「なつー」（何者なんだー？蔵馬）

「すゞこいやーー」（すゞこいやーー）

「ほおーまさか4の門を開けるとは・・・」（彼等なら、もしかして・・・）

「でわ皆さん中に入りましょうか」

一行は、扉をくぐり辺りを見渡した、月明かりに照らされた森の中遠くにそびえたつククルーマウンテン、普通ならキレイだと思えるこの景色も今は、不気味に感じた。

ゼブロはミケを声をだし呼んだ（呼ばなくても来るけど）フーフー「コー、藪の中から巨大な犬がノシノシと歩いてきて、ゴン達の前に座りこみ、じつと一行を見つめていた。

「ゴン君・・・分かつたかな？あのが完璧に訓練された獵犬つてヤツですよ。ゴン君・・・こいつと戦えるかい？」

「いやだ、怖い絶対戦いたくない」

（ふつ、本当に素直な良い子だ）

「よし、じゃあこちらにいらへどい、すぐ近くに使用人の家があります。まあ泊つていきなさい」

一行は使用人の家にたどり着いた、そこはログハウスのような建物だった。入り口の扉を押して入るようになわれるが、扉は軽く押しただけでは、開かなかつた。

「片方200キロあります、常に鍛えてないといけませんからね、さあ入つてみてください」

中に入ると、スリッパは片方20キロ、お茶を出されたが湯飲み

20キロの中のものは全て通常のものとは違ひ、重いもので出来ていた。

「4人とも観光ビザでこの国に？」

「ええ」

「そうですか、じゃあこの国に居られるのは長くても一ヶ月ですね、もしよろしければ、この家で特訓しませんか？君達の若さがあれば、あるいは一ヶ月で1の門を開けられるかもしれません、蔵馬君は4の扉を開けていますが、自分で開けないと納得いかないでしよう？」

「試されるのは不本意でも」

「他に方法が無いのなら」

「やるしかねーな！よし分かつたー世話になるぜ！…」

「そう3人が言つどゼプロは、なにやらベストとズボンを持つてきました。

「寝るとき以外はコレを着て、まずは上下で50キロからはじめましょう、慣れたら徐々に重くしていきましょう」

「そーいや蔵馬ー？お前はどうやって鍛えたんだ？」

「そうだ！蔵馬のトレーニングおしえてよ」

「そうだな、良かつたら訓練メニューを教えてくれないか？」

「いいですよ、ただ、うまい食事と適度な運動ですけどね

「まじかーそれだけで！？」

「本当にー！？」

「それは、是非ともお願ひしたい」

—2週間後—

「ギオオオオンー！」ゴンとクラピカは1の門を開けるだけでは無く2の門まで開けていた。ソレを見てゼプロは

「いや～驚いた、まさか2週間で2の門を開けるとは、蔵馬さん何をしたんですか？」

「ただ、うまい食事と適度な運動ですよ」

藏馬は、口やかにゼプロに答えた。

「つまーーーーーあの毒みてーな食事がかーーーーー？」

「適度ーーー地獄だったあれは・・・」

「つー もウアレは食べたくないや、ミトわんの食事が恋しいな・・・

」

（「へ、うーむ、大変だったんだね」コン船たちは・・・だが、この4

人なら屋敷を見つけることが出来るのかも知れない）

第十一話 試しの門（後書き）

戦馬の訓練の毒のよつた食事ってどんだけマズイんでしょ？

第十四話 ククルーマウンテン

試しの門を開けた翌日、4人は使用人の家の前でゼプロに、お礼を言つていた。

ゼプロは、ゴン達に屋敷に行くには道なりに山に進んでいけばあると教えた。

（しかし、本当に試しの門を開けられるとは、蔵馬君は最初から4の扉を開けるし、ゴン君クラピカ君も2の扉を開けレオリオ君に関するでは3の扉を開けていた。彼等なら屋敷につけるんじゃないかな）

使用人の家を出て、山に向けて一本道を暫く歩いていくと、小さな門がありソロには一人の執事服を着た一人の女の子がいた。

彼女はゴン達に、ソロは私有地だから出て行けといった。ゴンは試しの門から入ってきたし電話もしたと答えたが、女の子は室自室から許可を得ていないと通さない、ゴンが許可をどうやれば貰えるかと尋ねると。

「さあ？ 許可した残例が無いから分からない

」と返してきた、ゴンは「だつたら無断で入るしかない」 そう言つて足を踏み出した。

バキッ！ 門を越えようとしたゴンに、女の子は、先端に鉄球が付いたステッキでゴンの頭を殴り飛ばした、蔵馬、レオリオ、クラピカが構えをとるが、それをゴンは「手を出しちゃダメだよ、俺に任せて」と制した。

「俺達キミと争う気は全然無いんだ、キルアに会いたいだけだから」「理由が何であれ関係ないの、私は雇い主の命令に従うだけよ」

そういうて、女の子は門の前から動こうとはしなかつた。

ゴンは、門を越える為に踏み出す、女の子は通らせないようにはぐる・・・何度も何度も倒れては起き上がり倒れては起き上がるゴン

に、女の子は殴りながら喋った。

「もう、やめてよ・・・もう来ないで！！いい加減にして！！無駄なの！！分かるでしょ！！あんた達も止めてよ仲間な・・・」

女の子に言われるも、3人は動かない真剣な目で、ゴンと女の子を見つめる。

「なんでかな、友達に会いにきただけなのに、キルアに会いたいだけなのに、なんでこんなことしなきゃいけないんだ！！」

ゴンは、コブシを握りしめ、飛びこんだ、女の子はゴンの気迫に押され後退してしまった。

「ねエ、もう門はぐぐったよ、殴らないの？」

ゴンに言われ、女の子はステッキに力を込めるが、ゴンの真っ直ぐな目を見ると、ステッキに入れる力が抜けていく・・・

「お願い・・・キルア様を助けて」

パンつ！女の子が喋り終わると同時に銃声が鳴り響き、頭から血を流しながら倒れた。

「全く、使用人が何を言つているのかしら」

白いドレスを着て、顔を包帯でまき日にバイザーを付けた婦人と、黒髪で、和服日本人形のような子が現われた。

婦人は、ゴン達にキルアからのメッセージがある、そのまま伝えると言つた。

「来てくれてありがとう、すげーうれしいよ、でも今は会えないゴメンな」

婦人がメッセージを伝えると、自己紹介を始めた、私はキルアの母、隣にいるのはカルトつと、ゴンは反応せず、倒れた女の子に向かい歩いていった。

レオリオが抱き起こし診断して、蔵馬が傷に薬草を塗りこんでいた。

「女の子は氣絶しているだけで、とくに問題は無いようだ。

「キルアが俺たちに会えないのはなんですか？」

ゴンは婦人に問いかけた。

「独房に居るからです」

婦人は答えた。

「キルは私を刺し、兄を刺し飛び出しました、しかし今は、反省し自ら戻つてきました。今は自分の意思で独房に入っています、ですからキルが、いつそこから出てくるからは・・・」

と言つたところで、婦人のバイザーのランプが消えた。

「まあ、お義父様つたら！なんで、邪魔するの！..ダメよ！..まだ、つないでおかなくちゃ！」

婦人は、急用が出来たとカルトを連れて踵を返し戻ろうとしていた。

「まつて下さい、俺たちあと2週間位町にいます。キルア君にそう伝えてください」

「分かりました。言つておきましょう、それでは・・・」

婦人は、どんどんと森の奥へと帰つていった。カルトは少しその場に残り、ゴン達を睨みつけた。

婦人たちが去つて暫くすると、女の子が目を覚まし、執事室に連れて行くといった。執事室の館直通の電話をつかい、ゼノ様が電話に出ればあるいはと・・・

女の子は、ゴン達を連れ森の中を歩いていった、暫く薄暗い森の中を歩くと、大きな屋敷が見えてきた、屋敷の前には執事服を着た5人の男たちが立つており、ゴン達が近づくと頭を下げた。

—執事の館—

館に入ると、ゴン達はロビーに案内されてソファーに座った、女の子はゴン達にお茶を出し、男の執事の横にたつた。

ゴン達の向かい側の椅子には、執事の一人が座りゴン達に、謝罪をいれ、キルアが、この屋敷に向かっているという事を伝え、女の子にやられたゴンの傷を治療した。

ゴン達は喜んでいたところに、正面に座つた執事が、ただ待つて

いるだけだと退屈で時間が長く感じられるので、ゲームでもして時間を潰しませんか?と問いかけてきた。

執事は一枚のコインを取り出すと、コインを指で弾き、左右の手を交差させながらキヤッチした。

「コインはどうひらのてに?」

「「「「左手」「」「」「」」

「「」答、では次はもっと速くこまますよ」

にこやかに執事が、やう言つと先ほどより速く手を交差させキヤッチした。

「さあどうちら?」

「また左手」

「すばらしく」

執事達は、ゴン達に向け拍手をした。

「じゃ、次は少し本気を出します」

ビュオオ!! 交差する手が震むほど複雑に動きコインをキヤッチした。

「さあ、どうち?」

「ん~自信薄だが・・・多分右・・・」

レオリオは、自信なさげに顎に手を当てながら答えた。

「私は・・・キルア様を生まれた時から知つている、僭越ながら親にも似た感情を抱いている・・・正直などころ・・・キルア様を奪おうとしている、お前等がにくい」

執事は、睨みながらゴン達に聞いた

「・・・」

「さあ・・・どうちだ? 答えろ」

「左手だ」

クラピカが答えると、執事は左手を差し出し握っていた手を開いた、そこにはグヤグヤに握り潰されたコインがあつた。

「奥様は・・・消え入りそうな声だった、断腸のお思いで送り出すのだろう・・・許せねエ」

執事は新しいコインを出すとまた喋りだした。

「キルア様が来るまでに結論を出す。オレはオレのやり方で、お前等を判断する。文句は言わせねエ」

座っている執事以外の男執事4人が懐から、ドスを構え、その内の一人が、執事の女の子の首にドスを突きつけた。

「いいか？一度間違えたらそいつはアウトだ、キルア様が来るまでに4人ともアウトになつたら・・・キルア様には4人は先に行つたと伝える、2度と会えないところにな・・・」

「キルアは」

「黙れ、てめエらは、ギリギリのところで生かされているんだ。オレの問いただけバカみてエに答えてろ」

ギュオオオ！！先ほどの速さ以上のコインキャッチだった。

「どつちだ？」

（わからない・・・）

「モタモタすんじゃねエー3秒以内に答えるーおいソイツの首カツ切れ！」

ゴン達が答えない、執事は、女の子を取り押さえている執事に命令をした。

「待て！！左手だ！！」

「俺は右手です」

「オレも右手」

「私もだ」

急いで答えを言ったゴン達、レオリオだけが左と答えた。

「まず、一人アウトだ」

パシュ！残像すら残らないほどのスピードでコインがキャッチされる。

「どつちだ？」

「俺は左手です」

「私は右手だ」

「じゃあ俺は左手」

執事は左手を開いた。

「コレで又一人アウト残りは2人・・・いくぜ」

執事がコインを指で弾くとゴンが待つたをかけた。

「なんだ？ただの時間稼ぎなら一人ブツ殺すぞ」

「レオリオ、ナイフを貸し」

ゴンはレオリオにナイフを貸してと、ゴンは先ほど治療で貼られている左目ガーゼを剥がしながら、ナイフを受け取り、晴れ上がったまぶたの上を自ら切り裂き、中に溜まった血を貰き、傷口にテープを貼り両目が見える状態にした。

「よし、OKよく見えるーどんと来いー」

執事は先ほどと同じスピードでコインをキャッチした。

「どっちだ？」

「左手！」

「・・・やるな、じゃこいつはどうだ」

執事は立ち上がると、女の子を押されていない2人の執事を近くに呼んだ。

ビュウオオオ！！三人の手が交互に交差し複雑に、そして速く動いた！

「さあ・・・誰が持つている？」

「二ツ！後ろのこっちの人でしょ？」

そう、答えるとゴンの後ろに立っていた執事は手を開いた。パチパチパチ！執事達は一斉に拍手をした。

「すばらしい！！」

「ゴーン！入り口の方からキルアの声が聞こえてきた。

「キルア！」

「いやー少し悪フザケが過ぎました。大変失礼いたしました。しかし、時間を忘れて楽しんでいただけましたでしょ？」

そう執事に言われ、レオリオは自分の腕時計を覗き込んだ。

「あ・・・もう、こんな時間がたつてたのか、いやーあんた迫真の演技だつたぜ」

レオリオが執事にそう話していると、キルアが走つてやってきた。

「ゴン！！蔵馬！！えーっとクラピカー！リオレオー！」

「レオリオ！ー」

「ついでか？」

ハハしてキルアと再開した一行はククルーマウンテンを後にした。

第十四話 ククルーマウンテン（後書き）

「『のとじの蔵馬喋つてないなー、天空闘技場からはメインにして
いきたいです。』

一パドキア共和国一

キルアと再開したゴン達は、今後について話をしていた、ゴン達が観光ビザで滞在していたとキルアは聞くと、ゴンは、やるべき事が終わらないとハンターライセンスは使わないと答えた。

キルアにやることつて何？と聞かれゴンはお世話になつた人達にあいさつ、カイトに会つて落し物を返したい、そして懐をあさりハンター試験のときヒソカに渡されたプレートを出した。

「かくかくちかじかで、渡されたプレートをヒソカに顔面パンチのおまけつきで叩き返す！！そうしないうちは絶対、ハンター証は、使わないつて決めたんだ！！」

勢い良く答えたゴンに、キルアはヒソカの居場所を知つているか尋ねたところ・・・知らなかつた様だ。

「私が、知つているよゴン」

みかねて、クラピカが答えた、レオリオに何故知つているか聞かれたところ、本人に聞いたと答えた。

「前から聞きたかった事だが、最終試験のときか？」

「ああ、最終試験のときヒソカに囁かれたのは”クモについて”クモは旅団のシンボルだ、ゆえに旅団に近しいものはヤツラをそう呼ぶ。ソレを知つていたヒソカの話に興味があつてな、その後、講習が終わつた後に聞いた」

「なるほどな」（プライドの高いお前が、甘んじて敵の試合放棄を受け入れた理由が分かつたぜ）

「ヒソカは”9月1日ヨークシンシティーで待つている”と

「・・・」

「9月1日は半年以上先だね」

「ヨークシンシティーで何があるの？」

「世界最大のオーフショントンがある！」

「そつだ9月1日から10日までの間、世界中からお宝が集まつてくる場所だ」

「旅団が来るのかな？」

「かもな、少なくとも関わりの深い連中は『』まんと来るだろ、と
いう訳で、その日ヒソカは、ヨークシンシティードリカに居るばず
だ、見つけたら連絡するよ」

そう言つと、クラピカは別れを告げる。

「キルアと再開できたし私は、区切りがついた。オーフショントンに参
加するにも金が必要だしな、これからは本格的にハンターとして、
雇い主を探す。」

「そつか・・・さて・・・俺も故郷へ戻るぜ、やつぱり医者の夢は
捨てられねエ、これから帰つて猛勉強しねエとな」

クラピカとレオリオはゴン達に別れを告げた、又再開をする事を
約束して

「9月1日ヨークシンシティーで！！」

一空港一

クラピカとレオリオを乗せた飛行船は大空に飛び立つていった。

「あつという間に3人なつちゃつたね」

「さて、どーする？」

「どうするつて、訓練に決まつてんだろ」

「え？なんの？遊ばないの？」

「今のゴン君では、ヒソカに一発を入れるのは難しいですね、試し
の門を開けた時の食事と軽い運動メニューを倍にすれば2ヶ月もあ
れば可能ですよ？」

「ゲッ！あれはもういいよ、他に無いかな？」

「フーン、ゴンが嫌がるってどんな特訓したんだ藏馬？」

「わーわー！思い出さないでよキルア！！」

「おっ、おう…（本当に何やったんだ藏馬？）

「フフフ、いつた通りの事しかしてませんて」

笑顔の藏馬の顔を怖いと思つた一人だつた。

「あーそういうば、一人とも金はもつてる？」

「…うーん実はそろそろヤバイ」

「俺も無いですね」

「オレもあんまもつてない」

「そこで一石二鳥な場所があるんだ”天空闘技場”」

3人の目的地が決まつた天空闘技場！！地上251階、高さ991M世界第4位の高さを誇る建物だ、3人は有り金全てを使って飛船にのり天空闘技場に向かつていつた。

－天空闘技場－

飛行船を降りて闘技場に向かうと、長蛇の列が出来ていた。入り口前の受付に着くと案内係に申し込み用紙が渡され、必要事項を記入し、3人は建物の中に入つていつた。

中に入ると、8個のリングが並んでおり、熱氣あふれるなか激しい格闘が行われていた。

「あつかしいな～ちつとも変わつてねーや

キルアが呟いた

「キルア君はここに来たことがあるんですか？」

「ああ、6歳のときに無一文で親父に放りこまれた”200階まで言つてこい”ってね、そのときは2年かかった」

(6歳のときはいえ・・・キルアでもそんなに掛かつたのか)
「ヒソカクラスと戦うなら、それ以上の階の相手と戦わなきゃダメだ、急ぐぜ」

「ゴン達が会話をしているとアナウンスが流れ、ゴンの番号を呼んだ。

「あ、おれだ、キンチューしてきた」

緊張しているゴンにキルアがアドバイスをした・

「お前、試しの門クリアしたんだろ? なつもつとただ思いつきり相手を押してみるよ」

「え? 本当に?」

試合が始まると、ゴンの対戦相手はゴンの4倍はある大男だった、男はゴンに向けてダッシュし殴ろうとした「ヒン・・・ドン!! 対戦相手は観客席の2階まで飛んでいった!

「2963番キミは50階に行きなさい」

ゴンの勝ちが宣言され、50階に行くよつと言われた・

「なー蔵馬? ゴンのヤツ試しの門をいくつ開けたんだ? 1の門開けただけじゃ、あんなに飛ばないと思うんだけど」

「ゴン君は2の扉まで開けていましたよ、クラピカさんも同じ2の

門、レオリオさんは3の門まで開けていましたよ」

「マジで、良くそんな短い間で開けられる様になつたね、レオリオなんてオレと一緒にやん! ちなみに蔵馬は、いくつの扉を開けたんだ?」

「俺は、4の扉まで開けましたよ」

「げつ、まじかよ蔵馬つて俺より力が強かつたんだ」

「鍛えている年数が長いだけですよ、でわ俺の番がきたよつなので行つてきますね」

「おつと、オレも呼ばれたが、さて今回は200階まで行くのに行つてかかるかな」

蔵馬もキルアも危なげなく勝利し2人とも50階行きが決定した、そん中、離れたリングでゴンたちと同じくらいの、空手胴着を着た

少年も50階行きを決めていた。

第十六話 念

一 天空闘技場

一階で試合を終えた三人は、他の参加者達と一緒にエレベーターに乗り、エレベーター係りの女性に天空闘技場の説明をされながら50階に向かっていった。

チン！50階に到着すると同じエレベーターに乗っていた胴着を着た少年が話しかけてきた。

「押忍！自分はズシとあります！あなた方は？」

「オレはキルア」

「俺は蔵馬です」

「俺はゴンよろしく」

四人は挨拶を交わしながら、とことこと歩いていた。

「さつきの試合拝見したいやーす」いつすね！」

「なに言つてんだよ。お前だつて一気にこの階まで来たんだろ？」

「そうそう、いつしょじやん！」

「みんな、若いのに有望ですよ」

「いやいや、自分なんかまだまつす！ちなみに3人の流派はなんですか？自分は心源流拳法つす！」

3人は、ポカンと顔を見合せ答えた

「「「別に・・・無いよな（ですね）」」

「ええ！-誰の指導もなくあの強さですか・・・ちょっとぴり自分シヨックつす、やつぱり自分まだまだです」

会話をしながら歩いていると、拍手をしながら近づいてくる、黒髪メガネのズボンからシャツの一部がはみ出た男の人人が近づいてきた。

「ズシ！-よくやつた、ちゃんと教えを守つてたね」

「師範代！押忍！光栄つす、師範代またシャツが
「あつゴメン、ゴメン」

師範代と呼ばれた男の人は、慌ててズボンにシャツをしまい込んだ。

「そちらは？」

「キルアさんにゴンさんに藏馬さんす！」

「はじめましてウイニングです」

「「「オスッ」」」

「まさか、ズシ以外の子供が来ていると思わなかつたよ、キミたち
は何でここに？」

「えーと強くなる為なんだけど、俺たち全然力ネなくて、小遣い稼
ぎを兼ねてんだけど」

「そつか・・・ここまで来るくらいだから、それなりの腕なんだろ
うけど、くれぐれも相手と自分の相互の体を気遣うようにね」

そういうて、5人は賞金受け取り所まで歩いていった。

ファイトマネーは152ジェニー1階は勝つても負けでもジュー
ス1本のギャラが貰える、ただし、次の階から負けると賞金はゼロ
！50階では勝利すると5万ジェニー手に入る。

天空闘技場では上に行けば行くほど高い賞金が手にはりるシステ
ムになつている。

－50階選手控え室－

1階でダメージを受けずに勝ち上がつた4人は、本日もう1試合
組まれる事になつており、控え室で自分の順番を待つていた。
アナウンスが組み合わせが発表された

「キルア選手対ズシ選手」

試合が開始され、キルアは、ズシの目に映らないスピードで背後
に廻り首に手とうを打ち込んだ、ズシはダウンしたが、直ぐに起き
上がつた、キルアは手加減をし過ぎたと思い込み、今度は、かする

だけで悶絶するような一撃を放つちズシを吹き飛ばすが、ズシはかなりのダメージを受けたが審判にダウンを取られる前に立ち上がる、キルアが疑問に感じて動きを止めると、ズシが構えを取る瞬間！ズシはら異様な圧迫感が発せされキルアは後ろに飛びのいた！「ズシ！」観客席から試合を中断させる大声をウイニングが出し、ズシは構えを解く、その後キルアの攻撃でポイントが溜まりキルアのTKO勝ちが決まった。

試合を終えキルアは60階にたどり着いた、そこには、試合を終えたゴンと藏馬がまつており、キルアは2人に試合のことを話した。ズシは才能はあつた、弱くはない、しかし、現状ではキルアが楽に勝てる相手だつたが、倒し切れなかつた、そしてズシが構えた瞬間に兄貴

イルミ

に感じたイヤな感じを話した。

そらが何かは分からなかつたが、何らかの技だと考えた。

キルアが60階に来る前、50階の廊下でウイニングが”レンはまだ使うな”お前の目的ははずか先に、あるのだろう？この塔の最上階にと話しているのを聞いていた。

3人の目標が決まった！レンの秘密！そして最上階！！

－天空闘技場－

目標が決まつた3人は、破竹の勢いで勝利し、3日前に参加以来6戦連続無傷の無傷の勝利！ついに100階に到着し個室をゲットした。

とどまり事を知らない3人は、一週間という短い時間で150階にまで到着していた。

レンの秘密は、ズシに聞いたほうが早いと途中ゴンに言われ3人

は、今だ50階で戦つているズシに元へ向かう。

50階に着いて早々、ズシを発見し、レンについて聞いた。

「”レン”はヨンダイギョウの一つ、ヨンダイギョウとはシンを高めシンを鍛える全ての格闘技に通じる基本つす。テンを知りゼツを覚えレンを経てハツに至る一要するにこれ全てネンの修行つす！」

「わかんねーよー！」

キルアとゴンにはチンパンカンパンだった。蔵馬は、己の経験から独自の拳法の奥義だらうと考えていた。

そこへ、ウイングが歩いてきて、何時から貴方は人に物を教えるほど修めたのかとズシを諫めた。

キルアは、ウイングに、すぐネンについて知りたいと訴えた、自分の兄貴の強さの秘密に近づきたいと、ウイングが教えてくれないなら自分で調べる、でも半端に知るよりキチンと理解したい、ウイングさんが教えてくれれば下手に我流で覚えようともしないと言いつた。

ウイングは、キルアのその言葉を了承し、ネンについて教える為に、自分の宿に3人を招待した。

部屋に到着すると、ウイングは説明を始めた。

「心を燃やす”燃”のこと、すなわち意思の強さ、四大行とは、意思を強くする過程の修行”点”で心を一つに集中し自己を見つめ目標を定める”舌”でその思いを言葉にする”練”でその意思を高め”発”でそれを行動に移す」

説明を終えたウイングはキルアにズシの”負けない”という鍊に気圧されたのですといい、実演してもらつことになった。

”点”構えをとり集中”舌”キミを殺すと発言”鍊”その瞬間！ゴンは構えをとり、キルアは天井の隅まで飛びのき、蔵馬は手に薔薇を持った。

最後にウイングが今は”点”を極めることに励むようアドバイス

をし、ゴン達は礼をいって部屋を後にした。

次の日の夜には、3人は揃つて190階の試合を一発クリアしていた。

—天空闘技場200階—

200階に到達した3人、突如ただまつすぐの今までと変わらない天空闘技場の廊下が、まるで魔物がすむ密林の様に感じられた。気圧されながら進んでいくと、2人の足が止まつたコチラに向かれる強い殺氣のせいで足が進まないのだ、そこへ女性職員があらわれ、200階の受付案内をし始めた、今夜24：00までに200階クラス参戦の受付をしないと、登録不能になつてしまつ」と、200階クラスには現在173名の選手が待機していること、このフロアから武器の使用が認められること、ファイトマネーがなくなることが告げられた。

女性の後ろから、ゆっくりとヒソカが歩いてきて、女性の横で立ち止まつた、そしてゴン達に向け

「君達が、このフロアに踏み入れるのはまだ早い」

そういうて廊下に座りこみ、殺氣を飛ばしてきた。

「通れないよ ってか通れないだろ？ 蔵馬は通れるだろ？ けど君もまだ早い？」

重いフレッシャーがヒソカから放たれてこれ以上2人は進めないようだ、そこにゴン達の後ろからウイングが現われた。

「無理は止めなさい、本当の念について教えます。だからひとまずこつから退散しましょう」

現在20：20分

「もし・・・今日登録できなかつたとしたら俺たちどうなるの？」

ゴンは女性職員に問いかけた。

「ゴン選手と蔵馬選手は、また1階から挑戦しなおしていただけます。ただ・・・キルア選手は、以前登録を断つていらつしゃいます

から、また未登録となりますと登録の意思なしとみなされ、参加 자체不可能となってしまいます」

キルアは、ウイングに聞いてみた

「ひとまず・・・引いて、0時までにココに戻つてこれるかい？」

ゴン達はウイングと見つめあいウイングは・・・

「君、次第だ」

現在 20:30

—ウイングの宿—

ウイングは、本当の念について説明を始めた。

「念とは、体からあふれだすオーラと呼ばれる生命エネルギーを自在に操る能力のこと」

そして、ウイングは内に秘めている力、眠れる能力を目覚めさせる2つの方法を提示してきた。

「ゆっくり起こすか、ムリヤリ起こすか」

ゆっくり起こした場合、飲み込みが早く、努力を惜しまなかつたズシの場合で約半年、ムリヤリ起こした場合は君達次第ですが、すぐにも、しかしムリヤリ起こした場合は死ぬことだつてある。

「俺たちは0時までにヒソカの念の壁を突破したいんだ！」

「分かりました、ゴン君、キルア君、上着を脱いでこちらへどうぞ、そして背を向けてください」

ウイングに言われ、2人は、上着を脱ぎウイングのそばに近寄らせ、ウイングは2人の背に手を当てる念を叩き込んだ。

「ゴオオオオオ！」「一人の体からオーラが噴水のように湧き上がる

！ウイングにより全身の精孔が開かれ

て、ウイングによりオーラの留め方が説明されだと、一人は、自然体になりオーラを留める事に成功した。

「次は、蔵馬さんの番ですね、女性に服を脱げと言いづらいのです

が、素肌に手を当てないと行けませんの申し訳ありませんが、脱い

で「チラに来てください」

少し、顔を赤らめながらウイングは言った。

「気にしないで下さい、俺は男なので」

「そりだよウイングさん！ 蔵馬は男だよ」

「そりそり、でもオレも最初まちがえたしな、藏馬つて、スゲー女顔だよなー」

三人はウイングに男である事を話した。

「そ、それはすみませんでした、でわ時間も余り無いことですし、
藏馬君こちらへ」

（男性だったのですが、私も修行が足りないです、それより藏馬君は、精孔が開いていないのにこのオーラ・・・何者なのでしょうか？）

ウイングは、藏馬の背に手を当て念を発した、瞬間、藏馬からゴンやキルア以上のオーラが噴出した。

例えるなら、ゴン達を水溜りの水とする、藏馬はプールの水、まだ念を習っていないのに脅威的だった、しかも、藏馬は、一瞬でオーラを体に留めることに成功していた。

そして、ウイングは、3人を自分の前に立たせると、悪意を込めたオーラをぶつけた！ 3人は無事に耐え切りった。

「おめでとう、キミたちなら先ほどのオーラを突破できるだらう、しかし、戦うのは2ヶ月我慢して下さい、その間に出来る限りのことは教えましょう、さあ、もう行きなさい受付時間が迫っていますよ」

「ゴン達は、200階の受付をするために、エレベーターに乗り込んだ。

一 天空闘技場 200階一

200階に到着しヒソカが居る通路を通る、今は纏をしているのでヒソカの悪意あるオーラに対抗できた。

「200階クラスへようこそ？洗礼は受けずにするそうだね？キミが天空闘技場に参加した理由は想像出来る？ここで鍛えてからボクと戦うつもりだったんだろう？」

「まさか、そっちから現われるのは思わなかつたよ手間が省けた」「ククク？纏を覚えた位でいい気になるなよ？念は奥が深い？」

そういうと、ヒソカは指先にオーラを集めスピードの形を作り、そこからドクロの形に変化させた。立ち上がりながらヒソカは、闘志むきだしのゴンに歩きながら喋りだした。

「はっきり言つて。今の君と戦う気は全くない？だが、このクラスで一度でも勝つ事が出来たら相手になろう？」

ヒソカが歩き去つた方から、車椅子の男、一本足の義足の男、隻腕の男が現われた、

現在 23：35

ゴン達は、無事に受付をすることができた、その後受け付け嬢に200階クラスの説明を受け、ゴンはワイングとの約束を破り対戦申し込み書に必要事項を書こうとしていた。

「・・・何が用？」

キルアは、自分たちの後ろに並んでいる3人組みに声を掛けた。
「いいや、オレ達も申し込みをしたいから並んでいるだけだよ」

申し込み用紙をみると、対戦日の指定項目があつた。

「ゴン、こいつらお前と同じ日に戦いたいらしいぜ」

「・・・」

無言で、男たちを見つめるゴン、薄笑いを浮かべる男たち。

「オレは、いつでもオーケーです」

ゴンは、指定日を、いつでもオーケーに印をし、受付に提出してから、ゴン、キルア、蔵馬の三人は、それぞれ200階クラスの部屋のカギを受け取り、各自自分の部屋に行つた。

ゴン達の後ろにいた3人は、それぞれゴンと同じ日に戦えるように、申し込み用紙を記入して、ニヤけながらゴン達を見つめていた。

こうして、200階クラスに参戦することになった3人、ウイングとの約束を破つて試合を組んだゴン初めての試合は、どうなるか！

第十七話 一人旅

一 天空闘技場200階、ゴンの部屋

受付が終わってから3人は、ゴンの部屋に集まって話をしようとしていた、カギを開けると、ホテルのスウェーツルームの様な豪華な部屋だった。

備え付けのテレビを見てみると、ゴンの試合の対戦日が表示されていた。

「戦闘日決定！！225階にて3月11日午後3：00スタート！」

「はやつ11日つたら、明日じゃねーか

ゴンはオーラをみなぎらせながら

「たぶん、明日は勝てない、でも良いんだ。早く実感してみたいんだ。この力で、一体どんなことが出来るのかを」

「すまない、ゴン君、キルア君、薬草の残りが、試験のときでかなり減つてしまっているんだ、200階に登録できだし、キリがいいから、2ヶ月ほど薬草採取の旅に出かけたいんだ」

そう言うと、藏馬は懐から、様々な瓶を出した。

「これは？」

「残っている、薬草ですよ、瓶のラベルに用途を書いてあるので、もし怪我をしたら使つてください」

「おーサンキュー！早く帰つてこいよな」

「うん、ありがとう大切に使わせてもらつね」

「ウイングさんに挨拶をしたら、今日のうちに準備をして行きますので、また2ヶ月後に会いましょう」

そういうて、藏馬は一人に別れを告げ、部屋から出て行つた。

—ウイングの宿—

ウイング部屋にやつてきた蔵馬は、薬草採取の旅に出むけとを告げた。

「でわ、蔵馬君、気をつけて行つてください、点の練習は毎日続けてくださいね」

「はい、ありがとうございました、また2ヶ月後に会いましょう」別れを告げ、点の修行は欠かさず続けるように言われた

—200階某所—

「やあ？ どうしたんだいククク？ 何か話があるのかな？」

蔵馬は、ヒソカの元を訪ねた。

「ゴン君と口で戦つつもりみたいだね、試験のときの約束だが、ゴン君とキミが戦い終わつた後に、天空闘技場以外で戦おつ」

「オーケー？ 楽しみにしているよ？」

蔵馬は用件を伝えるとヒソカの元を離れていった・・・

「ククク？ ああ青い果実は何でこいつも美味しそうなんだろ？ ククク？」

—天空闘技場—

蔵馬は、旅に出る前に必要なものを天空闘技場で買い揃えようと、商店が立ち並ぶフロアに来ていた、まずは、ケータイショップに行き、防水、衝撃に一番強い機種で店員のオススメを聞きビートル07型を購入、その後非常食や水を購入、大きめなカバンも買い揃え、電腦ページをメクリ、今回の目的地ジャポン行きのチケットを購入した。

ジャポンは、蔵馬が居た世界の日本に似た文化があることから、帰る方法を探しながら薬草も集められると思ったからだ。

鞍馬は、飛行船乗り場にそのまま向かひと、ジャポン行きの飛行船に乗り込んだ。

－ジャポン－

ジャポンに着いて、とりあえず街中を歩いてみると。そこには、現代の様に高いビルが建ちならんでいるが、歩いている人たちの服装は、着物などの和服の人達ばかりだった。

やっぱり、日本とは違うなつと、苦笑した。

全然知らないジャポンで、一人で情報収集や薬草探しでは2ヶ月では足りない思い、ハンター試験終了後にハンゾーから貰った名刺をカバンからだし電話してみると、

「お久しぶりです、ハンゾーさん、ハンター試験の同期の蔵馬です。ケータイを買って、今ジャポンに居るので、お電話させてもらいました」

「おー久しぶりじゃねーか！今どの辺にいるんだ？俺まだジャポンにいてな、修行がひと段落したところなんだ、良かつたらジャポンを案内するぜ！」

相変わらず、テンションの高いハンゾーだった。

「ありがとうございます、いま飛行船から降りたばかりなので、オエドシティーのナリタ市に居ます」

「おーわかった、2時間くれエーで行けると思うからよ、どこか茶屋にでも入つて待つていてくれよ」

「ええ、わかりました、丁度目の前に、良さそうな店があるので、そこでお待ちしていますよ、店名は枯山水です」

そう電話で話し、蔵馬は茶屋で休憩することにした。ジャポンの茶屋には日本の茶菓子等が、メニュー表に載っていた、この辺りは、日本と変わりがなかつた。

一時間がたとうとしたとき、柵を上げながら近づいてくるロンゲで侍の様な格好をした男がいた。

「おーまたせたな！」

手を上げながら男は蔵馬の向かい側の席に座った。

「！？」

「なんだよ、オレだよハンゾーだ、試験のときの服と違つたから分かんなかつたのか？」

むしろ、ものある所に気づかなかつたとはいえない蔵馬だった。冷や汗をかきながら蔵馬は、ハンゾーに話しかけた。

「え、ええ侍の様な格好をしていたので、気がつきませんでしたよ」

「まあな、流石に地元で忍びの格好で歩いてちや田立つからな、変装だよ、それより、久しぶりだな、『ゴン達は一緒じゃないのか？』

「ゴン君たちは、今天空闘技場で戦つてますよ、ヒソカに一撃を入れるために頑張つてます」

「げつ、ヒソカと戦つつもりかよー」

ハンゾーは頭に手を当てた。

「まあ、すぐに戦つ訳では無いでしょ？が、闘技場で戦つならヒン力も命を奪うことはしないでしょ？から他で戦つよりは安全ですよ」

お茶を啜りながら、蔵馬は答えた。

「んで、お前さんは、何しにジャポンへ来たんだ？まさかオレに会いに来る為だなんてことは、いわねエーよな？」

「残念ながら、違いますな、今回は薬草探しと、ジャポンの文化について調べる為ですよ」

「おお、そうか、そうか、ジャポンは良い所だぞー、ハンゾー様特性ジャポンガイドブックを上げよーついでに薬草の方は、この巻物に書いてあるから見るといー」

そういうと、ハンゾーは懐からカラー印刷で、『ジャポンガイド！ハンゾー特選100』と書かれた雑誌と古い巻物を蔵馬に差し出した。

「良いんですか？雑誌はまだしも、巻物は秘伝とかなにがあるんじ

やないですか？」

（雑誌もコレ自費出版しているのか？といつも持ち歩いているのだろうか？）

「かまわねエーよ、雑誌は、まだまだ自宅に大量にあるし、巻物は流石に秘伝のはわたせねエーから、それは里で一般向けに販売してるヤツでオレのお古だけどなアハハ」

「ありがとう」ゼコム、助かりましたよ、こんなに詳しく載つているものがあれば、調べ物も、薬草集めもはがどりますよ」

藏馬とハンゾーが会話をしているとケー タイの着信音が、ハンゾーの方からなつてきた。

「ちょっと、すまねエーな、電話ださせてもらひザ」

ハンゾーは、電話を出すと、話をしだした、

「師匠一体なんつすか？今ハンターの同期と茶してるんですけど・・・

・ハイ、分かりました直ぐ向かいます」

電話していると、突然ハンゾーの目が鋭くなり、真面目な雰囲気で電話応対していた。

「すまねーな、会つたばかりで申し訳ないが、用事が出来ちまつた、また茶でも飲もうや、じゃあな」

「ええ、こちらこそ、いきなり尋ねてきて申し訳なかつたです、またお会いしましょう、雑誌と巻物ありがとう」ゼコム

そう言つとハンゾーは茶屋から早足で出て行つた。

ハンゾーと別れ、雑誌を元に、色々な所に藏馬は出かけ、情報収集をしていた。

しかし、元の世界に戻る手がかりは見つからなかつた。

「ふーやつぱり、そう簡単には見つからないですね」

藏馬は、独り言を呟きながら、今度は薬草を探しに山の中を探索して行つた。

—2カ月後—

二ヶ月のジャポン滞在を終え、ハンゾーに帰る旨を電話で伝えようとしたが、電話が繋がらなかつたので、ホームコードに留守電を入れ、蔵馬は、飛行船に乗り、ゴン達の待つ、天空闘技場に向かつていつた。

第十七話 一人旅（後書き）

今回はオリジナルストーリーを書いてみました！ハンゾーの髪はカツラだったのでしょうか？地毛だったのでしょうか？

第十八話 正体

－天空闘技場－

2ヶ月ぶりの、天空闘技場は出発した時と変わらず、熱氣に満ち溢れていた。

帰ってきた挨拶を念の師匠である、ウイングさんに先に済ませうとウイングが泊っている宿に向かった。

ドアをノックして部屋に入ると、丁度、ゴン、キルア、ズシ、ウイングが揃っていた。

「ただいま戻りました、コレお土産です。召し上がってください」
蔵馬は、ジャポンのベーアンシティー買ってきた、八橋をウイングに渡した。

「お帰りなさい蔵馬君、丁度いいしお茶でも飲みましょうか」
そういうてウイングは、お茶の準備をし出した。

「ねー蔵馬どこへってたの？」

ゴンに聞かれ蔵馬が答えた

「ジャポンに行つて来ましたよ、向こうでハンゾーさんに会つて、ジャポンのガイドブックや薬草について書かれた巻物を頂いたので、旅は順調でした」

キルアも蔵馬に質問をした。

「ハンゾーって、試験にいたハゲだろ？」

「いいえ、ハンゾーさんは、ハゲでは有りませんでした。むしろ口

ンゲでビックリしましたよ！」

蔵馬は、冷や汗を流しながら答えた。

「「マジで！？」

流石に、ゴンもキルアも驚いていた。

「ゴン君たちは、どうでした？」

今度は、蔵馬の方からゴン達の様子を聞いてみた・

「それがさあー、聞いてくれよ藏馬、『ゴンのアホがさ、200階受付した時のヤツらと試合した時に、コイツ纏解きやがって、まともに念の攻撃受けて、全治4ヶ月の怪我おつたんだぜ…』」

「むーそれは、反省してるよ、あー藏馬薬草ありがとひねー薬草を塗つたら1ヶ円で全快しちやつたよ」

「そつそつ、藏馬の薬草効果高すぎー。ヤバイ薬でも混ぜてるの?」

「いいえ、俺の薬草は、天然物100%ですよ、役に立つてよかつた」

そこにウイングさんが、お茶をもつて帰つてきた。

「そうですよ、『ゴン君、念の恩返しを伝えていたはずですよ、もう無謀な事はしないで下さいね』

「うー反省しています」

「あーそれから、『ゴンと戦つたヤツらは、そのあと全員呪きのめしてやつたぜ』

キルアは「ブシを握りながら、そういった。

「えーでも、隻腕の男の人は、いつの間にか、いなくなっちゃつたけどね、キルア不戦勝だつたじやん」

「んーまあな、何か怖いものでも見て、にげたんじやね?」

いい顔押して笑いながらそう言つキルアを見て、藏馬は、何かやつたなと思った。

「色々大変だつたみたいですね」

ウイングがい入れてくれたお茶をのみながら藏馬はいつた。

その後、暫く雑談し、ウイングから発の修行をする」とを告げられた。

「”発”これをマスターするれば、念の基礎は全てマスターした事になります。後は基本に磨きをかけ、創意工夫をもつて、独自の念を構築していくだけです」

それでは、説明しましょ、ウイングはホワイトボードに書き込みながら説明を始めた。

“発”とは、オーラを自在に操る技術、つまり念能力の集大成といえます。放出系・具現化系・強化系・変化系・操作系・特質系の6つのタイプに分かれています。そこで、大事なのは、自分にあつた能力を見つけることです。」

ワイングは、ワイングラスを戸棚から1つ取り出し、ミネラルウォーターをグラスに注いでいき、窓際に有つた観葉植物から葉っぱを一枚とり、グラスに浮かべた。

「水見式、心源流に伝わる選別法です”発”の修行としてもコレをもちいます。グラスに手を近づけ、鍊を行う、その変化によつて資質を見分けます」

ワイングが鍊を行うと、グラスの水が溢れ出した。

「”水の量が変わる”のは強化系の証です。さあ4人も試してみて下さい」

ゴンがグラスに手を近づけ鍊をすると、チョロチョロと少し水が溢れた。

「ゴン君は強化系ですね」

ズシがグラスに手を近づけ鍊をすると、ゆらゆらと少し葉っぱが動き出した。

「”葉が動く”ズシは操作系ですね」

キルアがグラスに手を近づけ鍊をすると、少し水が甘くなついた。

「”水が味が変わる”キルア君は変化系ですね」

蔵馬がグラスに手を近づけ鍊をすると・・・グラスの中の葉が成長し、奇妙な植物が生まれた。

「――――――？」

「ワイングさん、この変化は、何系統なのですか？」

蔵馬が、そうワイングに聞いてみると、ワイングを含め4人が蔵馬を見ながら口を開け目を見開いていた。

「け、獣耳つす！尻尾も生えてるつす！もふもふつす――髪の

毛も銀色になつてゐるし、顔も全然変わつてゐるじゃないですか！！？
師匠！！水見式で試した本人が変化することつてあるんつすか？」

驚きながらも第一声をだしたのは、大興奮のズシだつた。

蔵馬本人も、いきなり自分が妖狐のすがたに戻つてゐるとは思わず、手を頭に乗せ耳を確認した。

（妖狐にならうとしなくても、鍊をすると妖狐の姿に戻つてしますのか！？）

「ぐ、蔵馬君？ その姿は一体なんですか？」

動搖したウイングだつたが再起動し、蔵馬に離しかけた。

今だ、自分自身も混乱している蔵馬だつたが、次第に落ち着きを取り戻し、素直に自分の正体についてはなしだした。

「信じられないかも知れないが、俺はこの世界の住人では無いんです。元の世界で事故があり、気がついたら、この世界に飛ばされました。元の世界の俺は、魔族の中の妖狐でした。ある、事件で人間の胎児に憑依融合した俺は、人間の南野秀一として生きていましたが、ある植物の実を使用し妖狐に戻れるようになりましたが、戻るたびに生命力をかなり削るので、人間としてくらしていました。今回は鍊をしただけで、生命力を削られずに妖狐の姿に戻つたので、俺自身が驚いています」

「そーだつたんだ！ でも蔵馬は蔵馬じゃん！ なにも変わらないよ」

「ゴン？ 俺が怖くは無いのか？ この世界を調べて、この世界には魔族はいなかつたんだぞ？」

「さつきも言つたじやん！ 蔵馬は蔵馬！ なにも変わらないよ」

「そーだぜ、蔵馬！ むしろ俺んち家族の方が、人間離れしてゐるぜ」

「むしろ良いつすよ！ もふもふしてゐるつす！ 一触つていいつすか！」

！」

「ゴンとキルアは、気にしないと蔵馬に言い、ズシは・・・大興奮だ！！

「そうですね、姿が変わつても、蔵馬君は、蔵馬君です、驚いてしまつて、すみませんでした。私も修行が足りませんねアハハ」

笑つて答えてくれるワイングさん

「みんな。ありがと！」

「しかし、変化については、魔族については、今はまだ伏せておいた方が良いですね、何をされるかわかりませんし、妖狐に変化することは、あまり隠さなくても大丈夫ですよ、念能力で変化していると思いますから」

「すっげー、念能力つてこんなことも出来るの！？」

「ええ、念能力の可能性は、無限です。自分の想像した事を表す！これが、念能力です」

ワイングはキルアに念の可能性について説明した。

「さきほどの、蔵馬君の水見式の変化ですが、放出系・具現化系・強化系・変化系・操作系には無い変化だったので特質系ということになります」

一日話が落ち着いた所で、蔵馬は鍊を解いた、すると人間南野秀一の姿に戻った。

「さて色々ありましたが、これから4週間は、この修行に専念し今的变化がより顯著になるように鍛錬を続けなさい」

「「「「押忍」」」

ワイングの説明が終わり、各自自分の部屋に戻つていった、部屋にもどったゴンは部屋に備え付けの電話を手にとり、電話を掛けた。
「もしもし、ゴンだけど」
「やあ、まつていたよ、ボクといつ戦つか決めたのかい？」
「ああ7月10日に戦闘日を指定するから天空闘技場で戦うつー」
「・・・オーケイ？ 楽しみにしているよ？」

— 4週間後（7月9日） —

各々が鍛錬の成果を見せに、ワイングの部屋にやってきた。
まず始めにゴンが、挑戦した、グラスからは、ブワツー！ と前回

ウイングが見せてくれたお手本の時より大量の水が溢れ出した。

次にキルアが、挑戦した、グラスの水を舐めてみると、ハチミツのようすに甘くなっていた。

最後に蔵馬が、挑戦した、グラスからは、わさわさと、大量の謎の植物が繁殖していた。

「まつたく・・・たいしたものです。3人とも今日で卒業です。そして、ゴン君、蔵馬君、裏ハンター試験合格!!おめでとう!!」突然ウイングから言われた言葉に3人は驚いた。

「「「!?!?」」

「念法は、ハンターになるための最低条件、何故ならハンターには”相応の強さ”が求められるからです」
ウイングは一息ついて最後にこう言った。
「明日の試合くれぐれも無理をしないよ!!」

ゴン達は、明日のゴンの試合に向け最終調整を行っていた・・・

第十八話 正体（後書き）

ウイキ見てたら、蔵馬の妖狐化は寿命を減らすよつたことが、書かれていたので練で妖狐化させて、制限無しでやらせていただくことにしました。

あと、蔵馬の念ですが、変身まえ操作系で変身後は具現化系にしようと、悩みましたが特質にちやいました。

今後の展開は、いつもどうり何も考えていません

第十九話 夢

－天空闘技場－

一夜明けて翌日、「ゴンの試合が始まるの」としていたが、観客席には蔵馬の姿は無かった、時間になつても現われない蔵馬に不安感じ、キルアは蔵馬の様子を見に、蔵馬の部屋に向かつた。

蔵馬は、ベッドに寝ていたのを見つけ、キルアは、「起こさう」と思い、蔵馬を揺すつてみるが起きない、「ゴンの試合開始時間がまじかに迫り、キルアは2ヶ月の旅から帰ってきたばかりで、疲れて起きれないんだと考えることにして、ゴンの試合を見学しにいった。

蔵馬は、疲れて起きれなかつた訳では無く、夢の中で話掛けられていた。

「蔵馬！ ちょっと蔵馬！ 起きてよ……」

夢の中で寝ている蔵馬を、女性の声が起こさうとしているた。

「へ、うーん……」

眠い目をこすりながら、夢の中の蔵馬は起きたした。

「あつ、良かつた蔵馬！ 私ボタンだよ分かる？」

蔵馬に、話しかけていたのは、靈界の道先案内人（死神）のボタンだつた。

「心配したんだよ、蔵馬！ なんとか靈界の秘法の使用許可を貰つて、蔵馬の妖気を追いかけたけど中々見つからなくて、ようやく見つけたと思ったら、今度は起きやしないしさヒーン」

泣きながら、ボタンは蔵馬に話しかけていた。

「お久しぶりです、ボタンさん何処に居るんですか？」

何も無い真っ白な空間に、ただ声だけが聞こえる状態だった。

「此処は夢の中だよ、靈界の秘法、夢繫ぎの枕を使って交信してい

るのを」

ボタンは得意げに藏馬に話した。

「ボタンさん、異次元砲はどうなりました？」

藏馬が一番気になることを聞いてみた。

「うん、最悪の事態だけは、免れたんだけど、異次元砲の爆発に巻き込まれて、アンタだけ消えちまつたんだよ、幽助たちも心配してるよ、飛影だけは、アイツは死なないって、さつさと魔界に帰つちまつたんだけどね」

「あはは、飛影らしいですね、幽助たちは、無事ですか良かつた」

「良かつたじゃないよ！アンタは！心配掛けで！…」

「すみません、連絡しようにも方法がなかつたもので」

藏馬は素直に謝つた。

「まつたく、所で藏馬今何処に居るか分かつてるのかい？」

「多分・・・異世界かと思います。こっちの世界に来て色々調べたんですけど、大陸の位置も形も、文字は違うんですけど、言語は同じで、日本と似たような文化がある世界ですね」

「異世界かー、まいつたね、戻る方法は、見つからないのかい？こつちでも調べてみるけど、ファンタジーみたいな事になつちまつたね」

「ええ、でも、ありえない事が起こつたなら、あり得ない事は、あり得ない、必ず戻る方法があるはずなので探してみますよ」

「そうだね、そうだよね、こっちも魔界にも協力を要請しているし、靈界、人間界、魔界の3界が力をあわせればきっと解決作が見つかるさね、現にこうして、夢の中でだけど話が出来ているし」

「そうですよ、きっと大丈夫です。幽助達にも、元気でやつてる、安心してくれと伝えて下さい」

「分かつたよ、必ず伝えるね、そろそろ充電が切れるから通信が終わるけど、充電が終わつたら、また連絡するから、それまで頑張つておくれ」

「ええ、それじゃあ・・・」

はつと藏馬は、現実世界でも起を出した。

「夢・・・いや、違う、ボタンさんから連絡は有つたんだ・・・」

藏馬は、天井を見つめながら、一言呟いた

「必ず戻る」

「藏馬ーー！」

急に、扉が開き、ゴンとキルアが飛び出した

「ああ、ゴン君キルア君どうしたんですか？」

「どうしたんですか？じゃねエーヨゴンの試合も終わっちゃった

ゼ」

「ずっと寝てたなんて何かあつたの？藏馬なんか嬉しそうだし」

ゴンとキルアが交互に藏馬に詰め寄った。

「大したことじや無いんですけど、多分良い事が有つたんだと思いますよ」

「なんだよそれー」

「それ、よりゴン君の試合はござりました？」

「うん！ヒソカにブレートをオマケ付きで返したよー負けちゃつたけどね、今度は勝つよ」

「そうだよ、コイツー！ヒソカにボコボコにされたけど、しつかり顔面に一撃入れたんだぜ」

ワイヤワイヤと、騒ぎながら3人は夜遅くまで、ゴンの試合について話をしていった。

—翌日—

目的を果たした、3人は、天空闘技場をあとにする。

「なーこれから何する？9月1日まで結構あるぜ」

「ゴン君そろそろ、マニアさんに合格の報告をしに帰った方が良くな
いかな？」

「あっ！忘れてた！そうだね、キルアも蔵馬も一緒に、ぐじら島に行こう！」

「うして、次なる目的地は決まった。

第十九話 夢（後書き）

久しぶりの、幽白のキャラ登場しました、この設定をどう生かすか、まったくもって無計画です！

藏馬は本当に幽白の世界に戻れるのでしょうか・・・

第一十話 資金稼ぎ（前書き）

先に謝罪を申し上げます。すみませんでした。原作のゴークシンシティー編が好きな方がいらっしゃいましたら、この話は、読まないで先に進んで頂きたいです。

—55—

卷之三

「ゴンー？ もー帰つてくるなら先に教えてよ、何も用意してないわ

「タタタと慌しく、料理の準備をする//エイジンに話しかけた
「お久しぶりです、またお世話になりますね、何か手伝いましょう
か？」

藏馬とキルアはミートに向かっていった。

「良いから座つてて、そーだゴハン作る間に、お風呂入りなさいよ、服も全部出しなさい先程するから

「ハセ、おとで」

「今！10秒以内！！イーチ！――！・・・」

「だいたい」

「上さんは、相変わらずですね」

キルアは、ミトに気圧されながら、コント藏馬は寝かしく感じながら、言われた通りに、3に揃つて風呂に入った。

べられていた。

「「「「いただもーす」」」

久しぶりのマークの手料理に「」は泣きながら食べていた。

「 もう、泣きながら食べる」と無いじゃ無い」

ミトは、微笑みながら「ゴンに言つた。

「 ぱつべぐりばのぼぶびがびどすきでびじやくぼぼぶびがだぼじび

だふだほん」

* 訳（だつて、鞍馬の料理が酷すぎて、ミトさんの料理が楽しみだつたんだもん）

「 食べながら喋らないの……」

こうして、楽しい食事は終わった。

食事が終わり、「ゴンはミトにハンター試験であつたことなどを話した。

その後、ゴン達3人は森に遊びに行つた。

その夜、ゴンはミトから、箱を手渡され、そして、ミトからジンについての話を聞かされた。

次の日の朝、ゴンは、キルア達に箱のことを話し、開ける事に、知恵を出し合つて挑戦し、念を込め、外側の箱を解き解き、ハンターライセンスを使い、中の箱を開けた。

すると、箱の中には、指輪とテープとロムカードが入つていた。まずは、テープを再生するためにラジカセを用意して、テープを流した。

すると、テープから俺に会いたかつたら捕まえろつといづ内容がしらされた。

ロムカードは、対応機種がジョイステーションだったことから、キルアが電腦ページを使い注文をかけた。

翌日、ゴンの家にはジョイステーションが届いた、届いたジョイステーションにロムカードを入れ電源を入れると、ロムカードに入っているゲーム名が表示された”グリードアイランド”電腦ページで、グリードアイランドを調べると、ハンター専用ゲーム定価58億ジェニーという、とんでもない情報が表示された。

キルアは実家に電話をし冗貴

ミルキ

と話取引を持ちかけ、グリードアイランドの入手情報を聞き出した。ゴークシンのオークションに数本流れると有力情報を得た。ゴンとキルアはグリードアイランドをオークションで購入すべく蔵馬がとめるのも聞かずネットオークションで資金を増やそうとしていた。

一週間後、そこには、7億ジョニー以上も資金を減らしたゴンとキルアがいた。

「だから言つたでしょ、素人が手をだすと火傷をすると」

二人は諦めず、資金を半分ずつ持つて、どちらが資金を増やせるのか勝負を始めた。

「・・・俺は先にゴークシンシティーに行つてますね、何かあつたら連絡ください」

二人を止めるふとを諦めた蔵馬は、一人先にオークション会場のあるゴークシンシティーに向かつた。

—ゴークシンシティー

先に向かつた蔵馬は、ゴン達だけでは資金調達は無理だと考え、自ら作った薬草を販売し資金を徐々に稼いでいった。

2週間後、蔵馬の元にキルアから、到着したと連絡を受け、資金集めの事を聞くと散々だったようだ。

一応自分の方でも今資金集めをしていて、現在36億ジョニーまで稼いだことを伝え、オークションが開始され、グリードアイランドが競売に掛けられるまで、別行動する事が決まった。

ゴークシンで、薬草を販売していた蔵馬の薬草の事をしつた者たちから、科学薬品を一切使わない、凄腕の薬師が居ると噂になつていた。

名前を伏せていて、植物しか使わない、その薬草を作ること、隠

ミット

ハ

者の薬師と呼ばれる様になつていった。

蔵馬も、田立つ事は、あまりしたくなかったので、今は口元をスカーフで隠し、ハーミットハーミット隠者の薬師の名前で商売をするようになった。

クモの騒動で、「コン達は慌しく動いていたが、懸賞金探しに蔵馬は誘わないで、蔵馬には、そのまま薬草販売で資金を稼いでもらつた。

丁度、蔵馬の元には、クモによつて、大量のケガ人が出でているマフィアから大量注文が続いており、資金のも順調に増え、9月3日、遂には70億ジェニーを超えた。

9月4日蔵馬は、ハーミットハーミット隠者の薬師として依頼を受け、ヨークシンシティーの隣の国、マクバク共和国に向かつた。

依頼人は、共和国のサキ王女、依頼内容は恋人の遺伝子治療だった。

蔵馬は、依頼人と患者と話をする為に、とあるホテルの1室に呼ばれた。

「初めましてハーミットプラントさん、私はサキです。隣に居る彼が私の恋人のミキヒサです。」

「はじめまして、ハーミットです。それで、遺伝子治療という依頼ですが、どういった症状があるのでしょうか？」

すると、恋人であるミキヒサは自分の服を脱ぎだした。

「・・・失礼、彼は恋人なんですよね？」

ミキヒサを見て、蔵馬は少し固まつたが、直ぐに王女に聞いてみた。

「はい、間違いなく私の恋人です。」

蔵馬は、頭に手を当てて考え込んでしまつた。

「分かつていてると思いますが、俺の体は女性です。しかし、俺は男だ！研究所で調べてもらつて、俺の染色体XYつまり男なんだ！どんな病院でも研究所でも、俺の体を男にする事は出来なかつたんだ、最近ウワサになつてゐる貴方ならと思い依頼をさせて頂きました。

もう、貴方しかたよる人がいないんです、お願ひします、俺を！俺たちを助けてください」

泣きながら、自分に助けを求めてくる一人に

「無理かもしれないが、最大限努力させてもらう、過度の期待は持たないように、それと実験用に、血液と皮膚を一部頂きたい」

そういうて、ミキヒサから血液と皮膚を貰つた蔵馬は、部屋を後にした。

部屋から出た蔵馬は、自分で借りているホテルに戻つてきた。

「流石に、予想外だつたな・・・しかし一人を見捨てられないな」二人の涙を見て見捨てられなくなつた蔵馬は、現状の薬草では、治療できず、この世界の植物では、新たに探すのに時間が掛かり過ぎる、そこで、鍊をし妖狐に変化して、魔界の植物を召還することにした。

9月5日蔵馬の部屋の中には、数百を越える魔界の植物が生茂つていた、そして遂に試作品が完成した。

魔界の毒素が人体に影響が無いか、血液と皮膚で治験する・・・問題は無いようだ。

動物で試したところ、およそ1時間でメスの検体がオスの固体に変化した。

蔵馬は、二人に連絡をいれると、昨日会つたホテルの同じ部屋に来るよう言われた。

「わざか1日で出来たのですか！？」

二人は、かなり驚いているようだ。

「ええ、無理をして作りましたので、ただ、動物実験と血液や皮膚での治験は出来たのですが、流石に人体実験は行つていません。服用後、どんな症状が出るか分からぬのですが、飲みますか？」

「ええ、二人で結婚出来る様になるのなら、どんな障害も乗り越えてみせます」

そう言つと、ミキヒサは、一気に薬を飲み込んだ・・・暫く、床を悶え苦しみながら、転がりまわるミキヒサだつたが、1時間がたつ頃には、状態が落ち着いていた。

「どうやら、成功したようですね、動物実験の結果通りなら、精子も正常に作られるはずです。念の為、一年は、途中経過を俺のホームポーダーに送つて下さい」

「ありがとうございます。これで、幸せになれます。本当にありがとうございました」

泣きながら礼を言つ一人に別れを告げ、蔵馬はヨークシンシティーに戻つた。

その後、二人は結婚し、元気な子宝を授かつたのは、また、別の
お話・・・

第一十話 資金稼ぎ（後書き）

今回は、今まで以上に、シッカリとした満載だと思いますが、設定などは、見て見ぬフリをお願いします。

第一十一話 オークション

—三一クシンシティー

9月6日蔵馬は、久しぶりにゴン達と再会した。

「よー！蔵馬ひつさしぶりーゴッチは、何とか話は纏まつたぜ」

「本当に、久しぶり！オークション競り落とせなくとも、グリードアイランドに参加する方法も見つけたんだよ」

「よつ、初めましてだな、俺はゼパイルつてもんだよんじくな」

「お久しぶりです、最終的に170億ジニー稼げましたよ」

「マジかよー！一体何を売ったんだよー！やっぱ、蔵馬の薬草つてヤバイのが入つてんだる」

「170億あれば競り落とせるよね」

「いや、そうともいえねエーのがオークションだぜ、『』の様になるかバカみたいな金額になるかは、オークションが始まるまではかんねーのよ」

話をしながら、歩いていくとザザンピースオークション会場に到着した。

オークションが行われる、大ホールに着くと、開始まえから参加者たちは、ソワソワしながら、オークションが開始されるのを待つていた。

自分たちの指定された席に向かうと、途中で他の参加者と目が会つた・・・幻影旅団のフィンクスとフェイタンだった。

二人は、脇目もふらず、逃げ出した。

しかし、すぐに回り込まれ、お前たちをもつ狙わない事、パクノダが死んだ事、今回は、普通にオークションに参加している事を話した。

「それでは、これよりザザンピースオークションを開催いたします！！」

オークションが、開始され様々な物の落札が決まっていった。遂に、グリードアイランドの競売が開始された・・・落札価格305億ジョニー

落札できなかつた一行は、落札者であるバッテラ氏の元に訪れ、ゲームクリアに協力すると申し込んだ、だがバッテラの雇つているプロハンターにダメ出しをされてしまつ、しかしバッテラから9月10日にプレイヤー募集の選考会がある事を伝えられる。

ゴン達は、自分自身の発を作ろうとしていたが、蔵馬の念能力¹¹鍊で妖狐に変化するだけで強力になれる、キルアは自分の中で作りたい念の方向が決まつてるので、その特訓、ゴンは、自分の念を何にしたいかが、決まつておらず、色々なひとにアドバイスをもらいながら訓練をした。

－G.I.プレイヤー選考会－

9月10日ついに選考会が開始された、審査員はプロハンターのツエズゲラが行うようだ。

「1人づつステージの上で”鍊”を見せてもらう、ステージは、シヤッターとカーテンで仕切り、他のものには様子が、分からぬよう配慮する、合格者が32名出た時点で審査は終了とする」

そう言い終わると、ステージの、シャッターとカーテンが閉まりだした。

試験が開始されると4つのグループに分かれだした、直ぐに審査を受けに行くもの、列を作つて並ぶもの、列の周りで様子を伺うもの、席に座つたまま待つているものに、ゴン達は、席に座つてしまつているグループだった、並んでいるグループが終わると、蔵馬たちは、試験をうけた。

「前回オーラクション会場で、鍊を見せなかつたキミか、では試験を始めるとしてよう」

「ゴオオオオオー！」蔵馬が鍊をすると、妖狐の姿に変化し、凄まじく強力で切れる様に鋭く冷たいオーラが立ちこめた。

（な、なんだこの念は、変化系？いや、そんなもの関係ない、今まで見てきた能力者で、こんな化け物は見たことも無い）

「ま、まて！ 合格だ！ 合格！！」
(あれで、全力では無いだと！ ！ バカな！！)

同人からの幾々断築が拂ひ着一レ一レ、或

黒毛席で待っていた。一ソとギルアも控え室に入ってきた。

書を合格者に配つてその場は解散となつた。

集合場所に行くと、貸切列車が用意されて、古城まで連れて行かれた、古城の中の一室には、モニターとジョイスティックがG.I.をセットされた状態で待機したあつた。

> $\overline{T_s}$

第一十一話 オークション（後書き）

今回は短くて「ゴメンなさい」、眠りずに書き続けていたら限界が来ました・・・ねやすみなさい

第一十一話 グリードアイランド

－グリードアイランド－

選考会で合格し、ジャンケンで順番にG.Iの世界に降り立つたゴンとキルアは、スタート地点の平原で蔵馬が来るのを待っていた。

スタート地点の平原には、ログイン場所の小屋が一つ建っているだけで、見渡す限り青々とした草が辺り一面に生えている、ただの平原で、遠くのほうに山や森が見えているだけだった。

続々と、参加者達が、平原に降り立つては、何者かに見られる視線を感じる方向に向かつていった。

「おせーよ、蔵馬！」

「蔵馬つてジャンケン弱い？」

「すまない、この妖狐の姿に変身する所を、あまり人に見られたくない、わざと最後に廻つたんだ」

G.Iにログインするには、ゲーム機に手を当てるで練をする必要があつた、そして、蔵馬は練をすると、妖狐に変身してしまう、この世界で蔵馬が妖狐に変身できることを知つてているのは、ゴン・キルア・ウイング・ズシ・ショズゲラの5人だけである。

「先に言つてくれよなー待つて間に、なんか良くなきゃーけど、なんか俺攻撃されちまつたみたいだし」

「そうそう、バインダーからカードを出して”^{トレースオン}追跡使用キルアを攻撃”って言つたらカードが光つてキルアに当たつたんだ」

「そんでもさー、何しようか聞き出そうとしたら、他のカードを出して向こうに飛んでつ行つちまつてさー、結局何かわかんねーつの、体には異常は無いんだけどさ、バインダーから出していたから多分アレはゲーム内で使える魔法だと思うんだよね」

「ふむ、そんなことがあったのか暫くは、ゲームの情報を集める事

に専念したほうが良いか」

蔵馬は、顎に手をあてながら考えた。

「視線を感じるのは、コッチとアツチからなんだけど、どちらに進むか「 Gon と考へてたんだぜ」

「だったら、3人いることだし、一手に分かれよう、「 Gon とキルアが組んで、俺が一人で行く、途中どこかで会つたら会流して情報交換をするだつだ?」

「オーケイ、それでこいつ、「 Gon もいいよな」

「うん、いいよ! それじゃしゅっぱーつ! ! !」

こいつして、「 Gon とキルアは、北に蔵馬は北西に向かつていつた。
(選考会で、南野秀一の姿は見られている、 GI 何があるか分から
ないし妖狐の姿でいつてみるか)

北西に向かつて、蔵馬の前に3人の人影が見えた、一人は金髪でオールバックでジャージの男、一人は黒髪でスカーフで隠してい
る小柄な男、この二人はオーケーション会場で「 Gon 」達が逃げ出した時
にいた男達に似ており、一人はドレッドヘアで地面に倒れている
男。

「おい、フヨイまた獲物が歩いてきたぜ」

「本当ね、でもアレはプレイヤーか、獸耳と尻尾ついてるよ」

「人の男たちは、妖狐の姿に、プレイヤーか否か考へていたが、
金髪の男が突然走り出した。

「関係ねエー、どつちにしろ殴れば分かるぜーーー」

蔵馬に殴りかかってくる金髪を、蔵馬は軽く体よ捻り攻撃をかわ
しつつ、強力な手どうを金髪の首に与えた。

金髪は、そのまま地面に意識を失い倒れこんだ、蔵馬はそのまま
伏せている金髪の首に右足を軽く乗せて、小柄な男に話しかけた。
「いきなり攻撃してくるとは、何だ?」

冷たく冷酷な視線を、小柄な男に向けると、男は後ずさりしなが
らも答えた。

「待つね、ワタシ達はプレイヤーね、カードを集める為に襲つたよ」
蔵馬を見てウソは通じないと思い本当の事を話した。

（ツイてないね、こんな田をするヤツに出会つなんて、フィンクスを助ける事を優先するね）

「ワタシ達の集めたカード全部わたすね、だから足元のを開放してもらいたいね」

フェイは、蔵馬に交渉を持ちかけ、蔵馬は少し考へると「承した。
「分かつた、先にお前のカードを渡せ、渡し終わつたら、金髪を起
こしてカードを貰う、その後、開放する」

「わかったね」

フェイタンは、蔵馬に近づきバインダーを差し出し、蔵馬はカ
ードを自分のバインダーに入れると、足元の金髪の背中に活をいれて
起こした。

「う、うう・・・」

呻き声をあげながら、金髪は田を覚ますと、蔵馬に話しかけた。

「ちつ、あんた強いな、何者なんだ？」

バインダーを差し出しながらフィンクスは蔵馬に聞いた。

「蔵馬ただの盗賊だ」

蔵馬は、魔界で過去、冷静沈着で冷酷と恐れられていた一流の盗
賊をしていた。

「なんでエー同業者かよ、俺はフィンクス、こつちはフェイタンだ、
幻影旅団つて盗賊をしている、蔵馬あんた旅団にはいらねーか？」

フィンクスは、蔵馬の強さを認めクモに勧誘を始めた。

「いや、遠慮しておく、ただカードの礼だ、また会つたら手伝いく
らいしてやるよ」

そういうて、蔵馬は北西の方角に歩いていった。

「フィン、なんで勧誘したね？アレは、どう考へてもヤバイね」
「だつてよー、アイツつええぜ、ウボーは鎌野郎にやられちまつた
し、団長は行方を晦ませてるし、ヒソカの野郎は裏切り者だしな、

つええ仲間が居た方が良いじゃねーか

「無理よ、フインあいつの目みたか？あんな冷たい目はじめて見た

よ、「フタシ恐怖を感じたの初めてね」

フェイタンは、冷や汗を流しながら、答えた。

「しかし、藏馬なんて盜賊は聞いたこと、ねえよな？あんだけの腕で目立つ格好をしてりや、有名になつてゐるだろ？」「その辺を考えてもアイツは不気味よ、手を出さないほうが良いね」「もつたいたいねーけどな、しかし、カード全部持つてかれちまつたし、別行動にするか、一週間後にママサドリ集合つてことだ」

109

「どっちがプレイヤー多く殺すか競争な」「いいけど、カード奪つてから殺るよ」

— 今回の藏馬の入手カード —

No.053	キングホワイトオオクワガタ	入手難度	:	A
1枚	島の地図	入手難度	:	G 1枚
No.100	監視	ステイール	入手難度	G 4枚
No.1001	透視	フルラスコピー	入手難度	F 3枚
No.1002	防壁	ディフェンシブウォール	入手難度	:
No.1003	G 2枚			
No.1005	磁力	マグネットイックフォース	入手難度	:
C 1枚	掏摸	ピックポケット	入手難度	:
No.1006	窃盗	シーフ	入手難度	C 2枚
No.1007	再来	リターン	入手難度	G 4枚
No.1009	初心	デパートチャ一	入手難度	5枚
No.1013	離脱	リープ	入手難度	:
No.1014	同行	コリジョン	入手難度	B 3枚
No.1017	衝突	アカンパニ	入手難度	F 1枚
No.1039	離脱	入手難度	:	F 2枚

—バインダー内のカード—

指定ポケットカード 15種類15枚

その他カード 12種類29枚

第一十一話 グリーードアイランド（後書き）

盗賊妖狐鞍馬の復活です（笑）

—マサドラー

草原を歩き続け、蔵馬は遂にマサドラーに到着した。

マサドラーの町の雰囲気は、ファンシーな建物がたちならび、空中には派手な柄の球体が浮かんでいた。

町の中は、結構な賑わいを見せ、カード売り場には、プレイヤーとおぼしい人達が列を作りレジの前に並んでいた。

「くそつ！またリープが、出ない！もう5年もG.I.から出ることもできやしない！…」

店を出てカードの袋を開けて、男は、大声をあげていた。

「まあーそんなに、落ち込むなよ、中には10年もG.I.から出られないヤツだつて居るんだぜ、マサドラーで働いてカードを買い続ければG.I.から出られるんだ、諦めるなよ、レアカードが出ればG.I.でも良い生活ができるんだしよ」

「それでも俺は、現実世界に戻りたい！家族だつて居るんだ！！娘が3歳のときにG.I.に入つちまつたんだ、もう娘に会つても俺が誰だか分からぬかもしない、嫁さんだつて、帰らない俺を見捨てちまうかもしれないウウウ」

男は、泣きながら知り合いと思しき人物と話をしていた。

「ちょっと良いか？」

蔵馬は、一人の男に近づいていった。

「なんだい、アンタ？見かけねエツラしてるが、プレイヤーか？」

「ああ、昨日入つたばかりだがな、話を聞かせてもらつたよ、G.I.の先輩なんだろアンタらは」

「それが、なんだつていうんだ、お前も「愁傷様だな、G.I.からは出られないぜ、出る為にはリープつていうレアカードを引き当てるか、港にいつてバカ強い所長を倒さないかぎり出られねえー、所長

に勝てるヤツなんざ早々いやしねえ

「そのことで、アンタに取引を持ち掛けたい、ちょっと話だけでも聞かないか？悪い取引じゃないと思つぞ、悪くても話をした時間が無駄になる位だしな」

「ふん、新人と取引なんて、意味は無いかもしけんが、外の話が聞ければ、コイツの気分転換になるだろうしなオーケーだ、向こうに俺の借りてる部屋がある、ひとまず移動しよう

蔵馬と二人の男たちは、男の一人の部屋に移動した。

「ここが、俺の部屋だ、まーそいら辺に適当に座つてくれ

男の部屋は、安い宿の一室だった。

「それで、話つてなんだ？」

「まず先に、俺はリープを2枚持つている

（本当は3枚だが言つ必要はないだろう）

「「「！」」

「ほ、本当か譲つてくれ！！なんでもする…たのむ、家族にあいたいんだ」

先ほど、泣いていた男は身を乗り出して蔵馬に迫つたが、もう一人の男が、なだめた。

「ちょっと、落ち着けよ、ちゃんと話を聞けよ！それでアンタこれは、取引なんだろ？何が目的だ？」

なだめながら男は、蔵馬に質問した。

「俺の求めているものはG.Iの情報、このゲームのルールとカードの情報だ、情報の報酬としてリープを2枚だ、悪い取引じゃないだろ？」

「あ、ああアンタはソレで良いのか？どう考へても俺らに有利すぎる条件じゃ無いか？裏が有るんじゃないのか？」

男は、あまりに自分たちが有利な条件だつたので蔵馬を警戒した。（リープは、そんなにレアなカードだったのか・・・ランクBだから妥当と思つたが、上乗せするか）

「すまないな、昨日始めたといつたろう、まだ、G.I.に詳しく述べてな、だつたら、先にリーブを渡す、だが、お前等の持つてゐる力ードは俺によじせ、それなら心配ないだろ？」「

そう言つて、蔵馬はバインダーを出すと2枚のリーブを取り出し二人に渡した。

「それなら分かつた、俺らもG.I.から早く出たいだけなんだ条件を飲むよ」

「ありがとう、ありがとう・・・」

二人は、バインダーを出し、蔵馬に自分の持つてゐるカードを差し出した。

「交渉成立だな、でわます・・・」

一人からの情報提供は、その日の遅くまで続けられた。

翌日、一人は蔵馬に礼を言つてリーブを使いG.I.から去つていた。

蔵馬は、ある程度の情報を聞いたことから、キルアに連絡をとることにした。

「コンタクトオ交信使用キルア！」

蔵馬は、一人から入手したコンタクトを使い、キルアと交信した。

「キルア、俺だ、蔵馬だ」

「おお、なにこれ、蔵馬どうしたんだ？」

「これは、G.I.の魔法カードコンタクトだ、3分間プレーヤー同士で離れていても交信ができる」

「いいなー蔵馬は、こつちは、ウイングの師匠つてババーに、痛つてー」

「どうしたんだキルア？」

「ば、殴んなよな！いやビスケつてのに修行をつけて貰つてるんだ」

「なるほどな、俺の方は、他のプレイヤーから情報を貰つたりしながらカードを集めている、いま指定は、指定ポケットのカードが15種類集まつたところだ、合流するか？」

「んー、俺と『ン』は、ビスケにこのまま修行つけでもりつよ、蔵馬は、何処にいるんだ？」

「こまマサドラにいるよ、キルア達は？」

「おー！こま俺たちもマサドラに向かってるんだ、ば・・・ビスケの修行で、巨石地帯からスロップで山を掘りながら真っ直ぐにだけどな、あと数日で着くと思うから待つてくれよ」

「了解、そろそろ3分たつから交信を終えるな、修行頑張れよ」

—6日後—

「蔵馬ひさしげりー！」

「おーい！蔵馬！ひさしげりー」

笑顔で、近づいてくるゴンとキルア

「ひさしげり、だな二人とも、そちがビスケか？」

（選考会のときに確かにいたな、A級下位の力を感じる）

蔵馬は、ビスケを見ながら選考会を思い出していた。

（ちょっとキルア！このイケメン誰だわさー…）

（前にゴンタクトで話をしてた、蔵馬だよ）

（早く紹介するだわさ）

ビスケの目はハートマークだった。

「こっちが、ビスケー応こなんでもウイングの師匠らしいぜ」

「はじめまして、ビスケです。お兄さんはキルア君とゴン君のお友達なんですか？」

（げつババアー猫かぶりやがった）

「ああ、ハンター試験の時からの仲間だ」

ビスケは蔵馬の体に体をもたれかけさせるようにしながら、蔵馬に話かけた。

「蔵馬サンつて、もう指定カードとか集めてらっしゃるんですね、すごいですわ、私達まだ入ったばかりで、全然ゲームの事わからなくて、宜しかつたらお話聞かせていただきませんか」

* ビスケは、蔵馬の人間の姿と妖狐の姿が同一人物のものとは知りません>

「話そつと思つていたからな、此処じや落ち着かないから俺の泊つているホテルに行こう」

鞍馬は、歩き出しキルア・ゴンは蔵馬の後ろをつきながら、ビスケは蔵馬の腕に勝手にしがみつきながらキャーキャーと蔵馬に話かけながら一緒にホテルに向かつて歩き出した。

鞍馬の泊つているホテルはマサドラで一番高級なホテルに到着した。

「ずつけー蔵馬こんなとこに泊つてたんだ、俺らなんてG-Hに着いてから野宿しかしてないのに」

「野宿も結構楽しいじゃん」

ゴンとキルアは、蔵馬の部屋に入つてそれぞれ感想を言つた。
「3人とも椅子に座つて、待つてくれ、俺はお茶の準備をしてくる」

蔵馬は、キッチンの方に歩いていった。

「ちょっと、アンタ達！あんな良い男なんで、早く紹介しないんだわさ」

「だつて、聞かれて無いもんねキルア？」

「おう、ババアの好みなんてしらないしな」

ババアと言つた時点でキルアは、ビスケに殴られた。

「早く、蔵馬の情報を私に教えるわさ」

「うーん、俺が蔵馬についてしつてているのは、ぐじら島で釣りをしてたときに出会つて、ハンター試験を一緒に受けて、キルアんちにキルアを迎えていて、天空闘技場で一緒に試合をしてグリードアイランドに一緒に入つてきたぐらいかな」

「あーあと、蔵馬つて、薬草作るのが得意みたいだぜ、ゴンの全治

4ヶ月のケガ、アイツの薬草使つたら1ヶ月で治してたしな、あとヨークシンシティーでも薬草売つて設けてたぜ、10日ぐれーで170億ジョニーとかいつてたし

「一イケメンでお金持ち！いいわさ、いいわさ、若いツバメをゲットしなくちやだわさ」

ビスケは黒笑みを浮かべ、そんなビスケにゴンとキルアは引いていた。

「またせたな」

蔵馬は、トレーにカップを載せて戻ってきた。

「お手伝いしますわ」

ビスケは、蔵馬からトレーを受け取ると、それぞれの前のテーブルにカップを置いた。

「それでは、俺のG.Iで得た情報だが・・・」

暫く、蔵馬によるG.Iの説明が続いて、蔵馬の話が終わると、キルアのハンター試験の話になった。

「なー蔵馬、現実に戻るカードつてもつてる?」

「あるぞ、使つてくれブック！」

バインダーを出すと、蔵馬はキルアにリープを渡した。

「おっサンキューー早速行つてくるわ離脱使用^{リープオン}」

キルアは、蔵馬に礼を言うとリープを使いハンター試験を受ける為に現実に戻った。

「それじゃ、キルアが戻つてくるまでどうする?」

「ゴンが一人に聞いた。

「決まっていますよ、ゴン君あなたは、修行ですよ

「俺も、着いていこうか?」

ビスケは、ゴンに修行と云い、蔵馬は、ゴンとビスケについて来るといった。

（まづいわさ、蔵馬には、私の本性を見せたくないわさ、何とか別行動を取れるようにしないと・・・）

「着いてこなくて大丈夫だよ蔵馬、修行はビスケと二人でやるから、鞍馬はカード集めを進めてもらえないかな？」
(ナイフだわぞ「ンー」)で便乗して着いてくるのを諦めさせるわさーーー)

「そうですよ、ゴン君の修行は私が見ますので、蔵馬さんには、引き続き情報収集とカード集めをおねがいしたいですわ」

「分かった、また何か分かつたら連絡する」

こうして、キルアはハンター試験に、ゴンとビスケは修行、蔵馬はカード集めと情報収集に分かれて行動することになった。

—今回の蔵馬の入手カード—

N O · 0 9 3	人生図鑑	入手難度	:	B	1枚
N O · 1 0 1 0	トランസフォーム 擬態	入手難度	:	A	1枚
N O · 1 0 4 0	コンタクト 交信	入手難度	:	F	5枚
N O · 1 0 1 8	レヴィ 徴収	入手難度	:	B	1枚
N O · 1 0 1 9	キヤッスルゲート 城門	入手難度	:	3枚	1枚
N O · 1 2 1 7	ガルガイナー	入手難度	:	F	1枚

—今回の蔵馬の使用カード—

N O · 1 0 1 4	離脱 コンタクト	リープ	入手難度	:	B	3枚
N O · 1 0 4 0	交信	入手難度	:	F	1枚	

—バインダー内のカード—

指定ポケットカード 16種類16枚
その他カード 37枚

第一二三話 合流（後書き）

ビスケは、こんな感じにしました。

—マサドラー—

ゴン達と別れた藏馬は、カードを集めるためマサドラーを離れることにした。

今までに集めた情報で、G.I.にある大きな街は分かっている、城下町リーメイロ、マサドラー、ソウフラビ、アントキバ、アイアイ、ドリアスである。

指定ポケットのアイテム入手条件も幾つか聞いていたので、それを入手しに行く事にした。

—アイテム入手の旅—

まず、向かったのは、マサドラーをさらに北に行くとあるオアシス、ここで老人からの依頼を受け、砂漠の盗賊を依頼され、盗賊の宝を老人に返すと湧き水の壺を入手。

次は、さらに北に行き山岳地帯の村で、神隠しあつた子供を助けてくれるよう依頼される、険しい山に入り、洞窟で泣いている子供を見つけ神隠しの洞入手。

助けた村に、子供を連れ帰ると、帰還を祝つて宴会が行われ、そこで子供の父親から宴会に出されている酒は、泉から汲んだただの水という情報を聞き、泉の場所を聞いて、水を汲んでみると酒生みの泉を入手。

次は、恋愛都市アイアイに向かつた、入手方法が分かつていていた黄金るるぶ・黄金天秤を情報どりに入手した。

アイアイに居たプレイヤーとアイテムの入手条件を交換して、アイアイの東の森林にやってきた。

此處には、貴重なアイテムも腹の袋に詰め込む習性のあるというトラエモンが多数生息しているという情報だった、トラエモンはGエに出てくるモンスターの中で最強らしく、普通の一般プレイヤーでは、歯が立たないらしいが、蔵馬は10体のトラエモンを倒し、1枚だけカード化させトラエモンを入手、後は腹の袋から幸運通帳・縁切り鋏・遊魂枕・顔バス回数券・移り気リモコン・真珠蝗・魔女の瘦せ薬・人生図鑑・盗賊の剣・千里眼を入手した。

こうして、蔵馬は、一週間ほどで指定カード18を集めた。

流石に連續して、カードを集めをし、疲れてきた蔵馬は、温泉の村クサツに来ていた。

クサツには、14ヶ所の宿温泉があり、その一つ一つが違う効能を持つている、一週間ほど滞在し、一日(+)とに宿を変えながら体の疲れを癒していく。

そして14日目最後の温泉に入ると、女将から実は常連にしか知れしていない温泉の話をされ、滞在を一日伸ばし、最後の温泉にかかると美肌温泉を入手することができた。

アイテム入手条件が分かったアイテムは粗方手にいれたので、まだ行つたことの無いソウフラビに向かった。

—ソウフラビ—

海に面した街で、今までいつた街より大きかつた、すると突然後ろから何者かが抱き付いてきた。

振り返つてみると、黒髪でメガネを掛けた女の子が尻尾に顔をうすめモフモフと幸せそうな顔をしていた。

「うーん、もふもふー」

話しかけるも、女の子は尻尾に夢中で声が聞こえていないよ様子で、ふりほどこうとするが、かなり力が強いようで、離れなかつた。

すると、蔵馬に向かつて近く居てくる金髪の男がいた。

「すみません、ソレが抱きついちゃつてゐみたいで、コイツ気に入

つたものがあると周りが見えなくなるんですよアハハ」

金髪の男は、蔵馬に謝罪をして女の子を連れて行こうとするが、

女の子は離れようとしなかった。

「本当にすみません、ほら、シズクいくよ」

「イヤつーこのモフモフから離れない！」

意地でも離れようとしないシズクをみて、金髪の男が蔵馬に提案した。

「すみません、シズクのヤツ相当氣に入つわやつて見たいなんぞ、尻尾のアクセサリーを譲つてもらえないのでしょうか？」

「いや、尻尾は本物でアクセサリーじゃない、売つてやる」とは出来ない」

「えつ！本物なの、うーん、お詫びも兼ねて食事でもビーフですか？ 食事が終わる頃にはシズクも落ち着くと思うんで」

蔵馬は、ふりほじくのを諦めて金髪の男と一緒に食事をする」とは云にした。

レストランに着いて食事を注文し終わると、金髪の男が自己紹介をはじめた。

「ほんと申し訳ない、俺はシャルナークで、未だにしがみついているのがシズク、この街で仲間と合流する為に、来ていたんだ」

「俺は、蔵馬この街には、情報をもとめてやつてきた」

自己紹介が終わると、料理が次々と運ばれてきた。

「情報つて指定カードの事？俺たちゲームクリアが田舎じや無いから指定カード幾つかあるからあげるよブツク！」

シャルナークは、バイインダーを取り出して蔵馬に差し出してきた。

「良いのか？ラソンクカードもあるが」

「良いの、良いのどうせ拾い物だからアハハ」

そういうて、蔵馬に、豊作の・きまぐれ魔人・小悪魔のウインク・仕返し商店・マッド博士の筋肉増強剤・マッド博士のフェロモン剤・マッド博士の整形マシーンをわたした。

カードの受け渡しが終わると、蔵馬達が食事をしている席に男女

のグループが近づいてきた。

「よーひさしぶりだな、アンタなんで此処にいるんだ? シズクはどうしたんだ?」

前にあつた、フィンクスという男だった。

「なにしてるね、シズク! 危ないから離れるね」

なにやら、焦っているようだがフェイタンだった。

「ふーん、あんたが、フィンクスとフェイタンが言つてたヤツか、私はマチ」

フィンクスとフェイタンは、ピンク色の髪をした女性、マチに何を話したのだろう

「あれーフィンと知り合いなの?」

シャルナークは、フィンクスと藏馬が知り合いだった事に驚いていた。

「おうよ、プレイヤーを狩つてたら、『コイツが近くにいてな、ついでに狩る』としたら逆に倒されちまつてな」

フィンクスは、シャルナークに説明した。

「えつ! フィンが負けたの? フェイも一緒に居たんでしょう?」

フィンクスは、その時のこと説明しだした。

「ねーシャル今どんな状況なの?」

説明を聞いていたマチがシャルナークに聞いた。

「街中でさ、いきなりシズクが藏馬さんの尻尾に飛びついて離れ無いんだよ、暫くすればシズクも落ち着くと思ってさ、お詫びのついでに一緒に食事してるってわけ」

シャルナークの説明が終わる頃には、シズクが藏馬から離れ、テーブルの上の食事を普通に食べていた。

「もぐもぐ、もぐもぐ」

シズクは、夢中でゴハンを食べている。

「ようやく、離れたみたいだねシズクらしいけど」

笑いながらシャルナークは言った。

「ようやく、離れたことだし、俺はそろそろいかせてもらおう、力

「一ノ ありがとう」

立ち上がりつて店から出ようとする藏馬をシャルナーグが呼び止めた。

「あ、コレ俺のケータイ番号とホームコード何があったら連絡してね」

番号とホームコードが書いてある名刺を差し出してきた、名刺を受けとると、そのまま藏馬は店を後にしてた。

「ねーフェイタン、話を聞いたし実際にみて強いのは分かるんだけど、そんなにヤバイの？」

マチは、フェイタンから店に来る前に聞いた話と、さつきフィンクスが説明した内容、そして藏馬をみたが、そこまで危険だとは思わなかつた。

「危険よ、フィンクスを倒して、ワタシ見たときの日、あんなに鋭く冷たい目は、見たこと無かつたね、今はチカラをね、始めに見たときのチカラ旅団全員で戦つても勝てる気がしないね」

「だから、そんなにシエーヤツなり回業らしいし仲間にするべきだつての」

「俺も賛成だね、彼結構良さそうじゃんシズクも気に入つてたし」「尻尾モフモフで気持ちよかつた」

店に残つた旅団の面々は、そんな話をしながら食事を続けていた。

— 今回の藏馬の入手カード —

N O . 0 0 3	湧き水の壺	入手難度	： A	1 枚
N O . 0 0 4	美肌温泉	入手難度	： A	1 枚
N O . 0 0 5	神隠しの洞	入手難度	： S	1 枚
N O . 0 0 6	酒生みの泉	入手難度	： A	1 枚
N O . 0 0 9	豊作の樹	入手難度	： S	1 枚
N O . 0 1 0	黄金るるぶ	入手難度	： A	1 枚

NO	·	011	黄金天秤	入手難度	:	B	1枚
NO	·	015	きまぐれ魔人	入手難度	:	S	1枚
NO	·	018	小悪魔のウインク	入手難度	:	A	1枚
NO	·	022	トラエモン	入手難度	:	A	1枚
NO	·	023	アドリブブック	入手難度	:	B	1枚
NO	·	024	もしもテレビ	入手難度	:	A	1枚
NO	·	013	幸運通帳	入手難度	:	A	1枚
NO	·	014	縁切り鋏	入手難度	:	B	1枚
NO	·	019	遊魂枕	入手難度	:	A	1枚
NO	·	027	顔バス回数券	入手難度	:	B	1枚
NO	·	028	移り気リモコン	入手難度	:	B	1枚
NO	·	052	真珠蝗	入手難度	:	B	1枚
NO	·	055	仕返し商店	入手難度	:	A	1枚
NO	·	056	魔女の瘦せ薬	入手難度	:	B	1枚
NO	·	070	マッド博士の筋肉増強剤	入手難度	:	A	1枚
1枚	NO	·	071	マッド博士のフェロモン剤	入手難度	A	1
1枚	NO	·	072	マッド博士の整形マシーン	入手難度	A	
人生図鑑	入手難度	:	B	1枚			
盗賊の剣	入手難度	:	S	1枚			
千里眼の蛇	入手難度	:	A	1枚			

— 今回の藏馬の使用カード —

無し

— バインダー内のカード —

指定ポケットカード 42種類42枚

その他カード 37枚

第一十四話 指定カード（後書き）

原作でトランモンの袋にアイテムを詰め込ませようとするアイデアが出るくらいの、素敵キャラクターのトランモンさん、大量に狩らせて頂きました。

幻影旅団の皆様も再登場しました、個人的にシズクが大好きです！！

指定カード1枚1枚集めていると終わりが見えなかつたので、大量入手させていただきました。

第一十五話 卵と毒

—ソウフリティー

シャルナーク達と別れた蔵馬は、宿をとり今日は休む今年にた。
宿に入りベットに横になると、夢の中におちてこつた。

「蔵馬へ、ひさしぶりだね、ようやく帰るつて来る可能性を見つけたよ！」

夢の世界に入ると、ボタンから話し掛けられた。

「ひさしぶりですね、ボタンさん、本当ですか！？」

蔵馬はボタンに聞いた。

「うん、蔵馬の今いる世界とこの世界は、タマゴの内側と外側みたいな感じで繋がってるんだよ、こちら側がタマゴの外側でそっちの世界が内側だと思ってくれて良いよ、こちら側から、S級妖怪靈界特別防衛隊が固定させ、桑原君の次元刀ジゲントウで歪んだ空間を100人同時に妖氣を全開にして、空間を歪ませて、歪んだ空間をタマゴの殻を割った様な状態になつて、こちら側からの入り口が開くんだよ、ただ問題があつてね、丁度タマゴの薄皮みたいなのがあつて、コツチからだけじゃ色々試していいけど破れないんだ、あとは、蔵馬側から次元干渉能力で同時に攻撃すれば道が通じるんだけど蔵馬の方で次元干渉能者を探しておくれ、ゲートは審判の門跡地で固定してあるからね、準備が出来次第連絡をおくれよ、こちら側からのゲートは開いているから蔵馬が夢の世界に入れば、いつでも私に連絡が取れるから頑張るんだよ蔵馬」

元の世界では、三界が協力して、蔵馬の為に道を作つてくれたようだ。

「ありがとうございます、皆にお礼を伝えてください、俺の方も能

力者を早く探しします。再開できることを楽しみにしています」「こうして、2回目のボタンとの会話は終わった。

「次元干渉能者か、念能力者なら次元干渉能力をもつてている人がいるかもしないな・・・G.Iから一旦出て、ハンターサイトで調べるか」

鞍馬は、そう呟くと、「ゴンにG.Iから出て調べるものをする」とを伝える事にした。

「「ゴンタクトオ」交信使用ゴン!!」

「ゴンタクトを使用して、ゴンに連絡をし、現実に戻ることを伝え、どの位で戻つてくるか不明なので、G.Iルールの外に出て10日経つとアイテムは失われる事を懸念し、ゴン達に自分の持っているカードを渡すことにして、蔵馬が、ゴン達の元へ行く事になった。

「「マグネットイックフォース」磁力使用ゴン!!」

マグネットイックフォースを使いゴン達の元へ蔵馬は飛んだ。

「ゴン・キルア・ビスケひさしぶりだな、キルアは試験受かったのか?」

「おうーーそつこうで合格してきたぜ、G.Iに戻つて来る方が時間が掛かつたぐらいだぜ」

「ひさしぶりー蔵馬!俺必殺技考えたんだよ!」

「ひさしぶりです、蔵馬さん、カード集めは順調だったのですか?」

「上からキルア、ゴン、ビスケの順に蔵馬に答えた。

「キルアおめでとう、ゴンも修行は順調そうだな、カード集めは3週間で42種類42枚順調に集まつた」

「えーーもう半分近くも集めたのかよーー!」

驚きながら、キルアは蔵馬に聞き返したて來た。

「自力でゲームを攻略して入手したカードは、少ないけどな。人から貰つたり、トラエモンというモンスターから獲たりしたのが多い

そして、いつ戻つてこれるか分からないので全てあげるとゴンに言つたが、ゴンはジンが作ったゲームだから自力で攻略したいと言つて受け取れないと蔵馬に返した、蔵馬は、じゃあ預けるだけだ、預かってくれないかと言いなおすが、ゴンの反応は、悪かった、それを見てビスケが蔵馬のカードを私が預かりますと、地図以外全て引き受けてくれた。

「すまない、感謝する、又戻つてきたらコンタクトで連絡する」「ゴン達に礼をいい、蔵馬はG工唯一の港に行き所長を殴り飛ばし、帰還アイテムを入手した。

アイテムを手に入れた蔵馬は、そのまま入国管理ゲートへ行き受付を始めた。

「いらっしゃい、島からでのんですね？それでは行き先を決めてください選択できる港は50種類以上ありますので希望の場所を選んでください」

受付嬢は、そういうて地図を表示しながら説明をした。

「ヨークシンシティー」

蔵馬は、行き場所を告げると、受付嬢はコンソールを操作し蔵馬を転送した。

—ヨークシンシティー—

ヨークシンに着くと、蔵馬は、前回来た時に泊つた同じ宿に泊ることにする、部屋に入ると早速、電腦ページを開きハンターサイトで検索するも、検索結果は世界有数の情報量を誇るハンターサイトで見つからなかつたことから念の師匠であるウイングに電話をかけることにした。

電話で、まず、天空闘技場を出てからの話をし、粗方話し終えると、次元干渉能力者に聞いてみるも、自分の知り合いには居ない事と、個人の念能力については秘匿せいがあることから、探すのは難

しいと言われ、ワイングは、蔵馬にこういった。

「どうしても必要な能力なら、自分で作ればいいんですよ、蔵馬君は、特質系ですし」

ワイングは、蔵馬に習得には時間が掛かるかもしれないが、自分で編み出すのが一番早いと伝えた。

「ワイングさん、ありがとうございました」

蔵馬はワイングに礼を言うと電話を切った。

蔵馬は、自室で自分の知っている能力者桑原をイメージし、イメージトレーニングをする事にした。

3週間自室でトレーニングすると、蔵馬の右手にはイバラの様な念が巻きつき始めた。

まだ、訓練が足りないのか次元を切るどころか、何の効果も無いが、新たな手ごたえを感じ訓練に集中していった。

そこから、1週間経つと蔵馬の部屋を誰かがノックしてきた。

蔵馬は、訓練を中止し、ドアを開けるとそこには、バッテラ氏がいた。

バッテラに話を聞くと、凄腕の薬草を作る、ハイミットハイミットフラン隠者の薬師の話を聞き、噂を頼りに探してみるとマクバク共和国の王女の恋人を治したのが、ハイミットハイミットフラン隠者の薬師だと分かり、手を尽くして探していたようだ。

仕事の内容を聞くと、事故にあつて起きない自分の恋人を治して欲しいと言う話だった。

蔵馬は、患者を見せて欲しいと、バッテラに同行して恋人の待つ病院に向かつた。

バッテラの恋人は、かなり衰弱をして、危険な状況にあつた、蔵馬は、手持ちの薬草を全て使い彼女の体力を回復させることに成功した。

みちがえる様に、顔を色が良くなつた患者にバッテラは、嬉しさのあまり、号泣しながら、彼女の手を握り体を抱きしめた。

蔵馬は、完全には治つていない、今したことは、患者の体力を回

復させただけだと言い、検査をさせて欲しいと、バッテラに頼み、彼女を検査した結果、事故で倒れた事は事実だが、意識が戻らなかつたのは、毒物が原因と蔵馬は、バッテラに告げた。

バッテラは激昂したが、蔵馬は、この毒なら一日もあれば解毒剤を精製することができる、落ち着いて欲しいと蔵馬は、解毒剤を作る為、バッテラは彼女に毒を与えた者を探すために別れた。

翌日、解毒剤を精製しバッテラの元に向かおうとすると、突然数人の男たちに取り囲まってしまったは、蔵馬は、審判の門で使つた曼陀羅華を使用し、男たちを睡らせ、バッテラに電話をかけると、護衛を連れて現場にやってきた。

襲撃してきた男たちの顔をバッテラが見ると、バッテラの顔は、どんどんと赤くなり男たちの中に一人を殴りだした。

バッテラに尋ねてみると、この男は自分の可愛がつていた甥で、親戚の中でも唯一自分の彼女に対して普通に接しており、他の親戚の様に、遺産目当てで近づいて来たなどといわず、彼女が倒れてからも病院に見舞いに来るなどしていたそうだ、しかし彼女に使用された同じ毒を事故の一週間前に購入していたことが判明し我慢できなくなり殴つたと、蔵馬は、男を起こし尋問すると、遺産を目当てで、彼女が邪魔だったと男は答えた。

バッテラは、護衛の男たちに、襲撃した男たちをどこかに護送させた。

そして、蔵馬と一緒に恋人の待つ病院に向かつた。

病院に入り、解毒剤を飲ませて、しばらくすると、恋人はゆつくりと目を覚まし、バッテラに「なんで泣いているの？あなたは笑つていたほうが素敵よ」つといった。

バッテラは、そうだね、そうだつたね、と涙を流しながら彼女を抱きしめ嬉しそうに、ただただ抱きしめていた、そんな二人を見て蔵馬は、黙つて部屋を後にし自分の宿に戻つた。

翌日、バッテラと彼女は一人揃つて、蔵馬に礼をしにきた、治療の報酬として全財産を譲渡する契約書を蔵馬に手渡そうとするが、

蔵馬は断つたが、バツテラは此れを機に彼女と一人で隠居することを伝え、彼女を蔑んでいた一族全てには遺産を渡したくないことを話した。

蔵馬は分かりましたとバツテラから財産を受け取つると、バツテラは、自分がG.Iの攻略を依頼したツェズゲラ達に、この事を伝え違約金として、クリア報酬を支払と伝えてくれと頼んだ。

蔵馬は了承し、二人を見送るとG.Iに戻るべく古城に向かつて行った。

第一一十五話 卵と毒（後書き）

ちょっと展開が早すぎたよつな・・・

第一十六話 爆弾魔

古城に着くと、そこにはツェズグラがバッテラを探していた、蔵馬は事情を話すと、ツェズグラも中の事を話し出した、「ゴン達がボマーと戦うと聞いた蔵馬は、いそいでG.I.に入った。

G.I.にはいって直ぐに、浮葉科の魔界植物を召還して、空高く飛び上り、魔法カードを手に入れる為にマサドラーへ向かつた、蔵馬がマサドラーに到着すると同時に、ゴン達が同行でマサドラーに来た。

そこで、3人と合流した蔵馬は、姿を隠す為に茂みに潜りゲンスルー達の様子を伺いながら、3人に現在の状況を聞いた。

3人の話で、ゴンがゲンスルーを一人で相手にすると言い、キルアも新技の試運転を兼ねて一人で戦うと言つたので、ビスケと一緒に行動することになった。

ゲンスルー達は、辺りを見渡し姿が見つからなかつたことから、魔法カードを補充されるとめんどくさいつとカードショップに顔を出してくるが見つからない、仕方なく最後の同行アカンバー使いゴン達の前に飛んできた。

「見つかつた！逃げる！！」

4人は、森の中を疾走し逃げ出す。

「見失うなよ！こっちも同行アカンバーはもう無い！」

「くくく、なかなか速いな」

「1名増えたが、優男で残りはガキ共だ、俺たちの敵じゃねエー」

ボマー達は3人を猛スピードで追跡し、遂にゴンに追いついた。

「くくく、鬼ゴンにはもう終わりか？諦めてカードを寄越したらどうだ？」

「・・・」

「やだね、絶対お前たちなんかに渡すもんか」

ボマーたちは、ゴン達を誰一人逃がさない様に散開して、ジリジ

りと間合いを縮めてきた。

「おいゴン！－くそつ・・・」（よし・・・あとまほしづつヤツラ
を引き離す）

キルアは、ボマー達3人が離れたことを確認すると、行動を起こした、自分に近いボマーにとび蹴りをかました、しかし相手のパンチで弾き返されてしまう

「藏馬！－ビスケを抱えて逃げろ！－」

藏馬は、ビスケを抱えると、その場から飛び退いて、そのまま走り出した。

「おつと、逃がさねハーネ」

もう一人のボマーは、一人を追いかけだした。

「お前はオレだ」

最後のボマー、ゲンスルーはゴンに襲い掛かった。

－藏馬・ビスケ－

藏馬に抱えられた、ビスケはゴン達から大分離れたことを確認し、バインダーからカードを一枚とりだした、カードはビスケが手に持つた瞬間に、煙を上げて変化をした。

「アカンバニオン同行使用ソウフラビ！」

ビスケは、変化したカードをつかい、藏馬とボマーと一緒にソウフラビへ飛んだ。

「・・・仲間を大勢集めて待ち伏せしていた訳でもなし・・・か、わからねエな、なんで、そんな面倒なマネしてバラバラになつたんだ？」

「理由は一つ、キサマが他の一人に助けを求める」と、ゴンとキルアの戦いの邪魔になるからだ、目障りだ眠れ・・・」

（キヤーキヤー藏馬カツコいい！－つてフザケテる場合じやなかつた、なに！？この殺氣を、強いとは思つてはいたけど、この私が、気圧されるなんて）

蔵馬は殺氣を込め、ボマーに視線を向けながらビスケの視界から消えた。

（消えた！！）

瞬間、ボマーの一人は口から大量の血を噴出しながら地面に倒れこんだ。

「無様だな・・・」

蔵馬は、ボマーの一人を見下しながら呟いた

－キルアー

キルアの先ほびビスケが逃げ出すのを確認すると同行

アカンパーー

を使いゴンのそばを離れた。

「同行アカンパーーが解せないな、なぜバラけた！？まつタイマンは望むところだがな」

ボマーは、走るキルアを追いかけ攻撃しながら話しかけてきた。（コイツかなり強い体術や筋力はオレが、やや上けど、オーラの量はオレがはるかに劣るだろう、それは、攻撃や防御に大きく影響する、通常の攻撃じゃおそらくダメージは与えられない、だからこそイイ実験になる）

キルアは、考えながらボマーの猛攻を避け、相手の力量を測つてから、攻撃に転じた”肢曲”キルアの得意とする歩法で、相手の攻撃をかわし、懷に入り込むと相手の腹に両手を当てて新しい技”雷掌”をくらわせた。

雷掌は、キルアの発でオーラを電気に変えて相手を痺れさせる技、まだ練度は低いが数秒は動きを止められることがわかつた。

「ガキがあくろ手にスタンガンか何か仕込んでやがったな」

ボマーは、キルアの年でオーラを電気に変えることが出来ると予想できず、スタンガンの攻撃だったと間違った認識をもつた、次にキルアは、ポケットからコートを出し、左腕に装着した。

キルアは、ヨーヨーを構えるとボマーに向けてヨーヨーを放ち頭を薙ぐように攻撃するが、しゃがんで避けられてしまう、攻撃目標を外したヨーヨーは木の幹をエグリとり、キルアの手に戻つていつた。

「一体、何で出来てやがる！？」

あまりの威力にボマーは、キルアに聞いた、

「（兄貴）特注の合金、重さ50キロ位あるから食らつたら効くぜ！？」

話ながらヨーヨーを再度投げ一旦避けられた所で、体を捻りヨーヨーの軌道を変え、ボマーの顎に直撃させた。

キルアは、ボマーが後ろに吹き飛んだ瞬間に、ボマーに気づかれないようポケットからもう一つヨーヨーを出し、右腕に装着した。吹き飛ばされたボマーは、キルアが追撃をしてこない一瞬に作戦を考え実行した。

邪魔なヨーヨーを手放させるために、足元に落ちていた石を見えないように拾い上げ、キルアに向かつて飛び込みながら左腕のヨーヨーに石を当て、吹き飛ばせる、そして接近戦になると右フックを放ち、キルアのスキをついて、右わき腹にミドルキックを直撃させキルアを吹き飛ばした。

「よし！あばら粉碎コオース！」

勝利を確信したボマーに、背後から強烈な後頭部への攻撃がたえられた。

キルアは、吹き飛ばされた瞬間に右腕に装着したヨーヨーを近くの木に糸を経由させ背後からボマーに攻撃をくわえたのだった。

倒れたボマーの頭に、キルアはヨーヨーを落とし、電気を流し込み氣絶させた所をヨーヨーを使い縛り上げた。

「実験終了どつちもイケるね」

自分の新たな攻撃の結果に満足した。

襲い掛かつってきたゲンスルーの上段からゴンの頭に迫つてくる右手を手の甲で弾き上げ、後ろに飛び退いて体勢を整えた。

先ほどのゴンの右腕を回避する動きをみて、ゲンスルーは、だれに自分のことをボマーと聞いたか、誰に能力のことを聞いたか質問をしてきた。前者の質問にはツエズゲラと答え、後者に関しては答えずにバインダーを出し、ゲンスルーに勝負を持ちかけた、ルールは先に”まいつた”と言つたほうが負け、これを了承し、本気の勝負が始まつた。

ゲンスルーが構えをとると、ゴンは鍛をしオーラを高めた、ゲンスルーはゴンのオーラに関心したが、自分も鍛をしゴン以上のオーラを練り上げた。

ゴンは、ゲンスルーに反撃をゆるさないように、激しく攻め込んだが、オーラの攻防力移動が粗く自分の攻撃のスピードに追いつかずダメージを与えるれない、全てに置いてゴンの上をいくゲンスルーによりゴンはダメージを受けるが、倒れても起き上がつてきた、次第にゲンスルーもイライラしゴンに話しかけた。

「いい加減諦めたらどうだ？ 勝ち目なんかないぞ？」

「全然！！ オレはまいつていない！！」

力強くゲンスルーを睨むゴンにゲンスルーは、勘違ひをしていたことに気づく、これは、肉体でなく心を抓む闘いだと、ここにきてゲンスルーはゴンとの闘いで初めて自分の発を使用した一握りの火薬ゴンは左腕を捕まれ爆破されるも、左腕にオーラを凝で集めダメージを激減された。ゲンスルーは、ゴンの攻略法の穴をついて一方的に攻撃を加える、途中からゴンは目にオーラを集めゲンスルーの一握りの火薬

を使用するかどうかを見極めながら戦うようになった。

気づいたゲンスルーは、両手にオーラを集め一握りの火薬を両手で発動し、ゴンに最後通告をしゴンが断ると、これからする攻撃を言いながらゴンに向かつていつた。

「両手を同時に爆破する」

「無事に残していくたいほうを凝で守れ」

「次に残つたほうの腕と、左足を同時に爆破する残していくたいほうを凝で守れ」

「それを永遠と続ける、キサマがダルマになるまでな！！！」

「やれるもんならやつてみる！！」

ゲンスルーは、「ゴンの両腕を掴むと宣言通り一握りの火薬両腕を爆破した。

瞬間！ゲンスルーの視界が歪んだ、いきなりのことで、状況が理解できないゲンスルーだったが、ゴンの必殺技ジャンケングーの練り上げられたオーラを見て後ずさりをした、ゴンが、グーを放つが木の根に躊躇後に倒れこんだゲンスルーをはずしてしまった。

ゲンスルーは冷静になりゴンを見ると、ゴンの両腕は爆破されて、左腕は失い右腕はじゅうしょうだった、爆破されるときに左腕は完全に捨て、右腕は少しのオーラでガードしたことが分かる、自分のダメージを考えると足にガードするオーラを回し自分に攻撃してきたことが・・・そして未だに戦意を失わず自分に挑んでくる。

（こいつ・・・完全にイカれてやがる）

流石のゲンスルーもコレには、動搖した。

「ブック！」

ゴンはいきなり、バインダーを開きカードを取り出しゲンスルーに負けを認めるように迫つた。

「諦めるなら今のうちだぞ、コレを使うと最悪の場合、お前は死ぬかもしれない」

ゲンスルーは、ハッタリだと思ったが、今ゴンはバインダーを出していることからチャンスだと思い、自分もバインダーを出してゴンに近づいた。

「ブック！根負けだまいった、どうやってもお前に負けを認めさせるのは無理なようだ持つて行け」

ゲンスルーはバインダーをゴンに向けると自分のバインダーを指

差し一つの頼みをいった。

「何？」

「このカードだけは勘弁してくれないかな？」

そういわれて、ゴンがゲンスルーのバインダーを覗き込むと、ゲンスルーは右手を鍵手にしゴンのノドを潰し、バインダーを閉じれなくさせるとき絶させるために、首へ手とうを叩き込んだ。

手とうはオーラを首に回しカードしたゴンは、先ほど取り出していたカードをゲンスルーに向けパンチを放つた、瞬間1分の時間がたちカードからアイテムに変化したそれを、打ち抜いた。

打ち抜いた物は、ガソリンを中に詰めた大瓶だつた、それによりゲンスルーはガソリンまみれになり一握りの火薬を封じられた。

「これで、もう一握りの火薬は使えない絶ツ対ぶつとばしてやる！」

ノドが潰れたゴンはかすれるような声でゲンスルーにバインダーから1枚のカードを取り出してから言った。

ゴンは、オーラを右腕に集めると、ジャンケンジャーを地面に向かつて放つた、すると地面が抜け落とし穴に一人とも落ちていった。

ゲンスルーが混乱しているうちに、ゴンは横穴に入り、先ほどのカードを上に向かつて投げた瞬間にカード化が解け大岩が落とし穴に向かつて落ちてくる、ゲンスルーは慌ててゴンが逃げた横穴に入るも、オーラを練りこみジャンケンジャーを準備していたゴンに腹を殴られ血を吐いて気絶させられた。

戦いが終わったゴンは、キルアに交信を使用して連絡を取り合流した。

合流した4人は、それぞれ倒したボマーを縛り上げ、最後の交渉を始めた・・・

第一十六話 爆弾魔（後書き）

妖狐藏馬は、圧倒的でした。

G.I編が終わったら、靈界ランクを更新します。

第一一十七話 最終話（仮）

体を縛り上げられ、地面に横たわっている、ボマーたちに、キルアとビスケはバインダーを差し出すように迫った。

「早速だけど、バインダー出して」

「あんた達が仲間を裏切って、手にしたカード全部返してもらひます」

ゴンのジャンケンを食らい弱っているゲンスルーは一つの条件をつけた。

「条件がある・・・大天使でバラを治してやってくれ・・・複製はある・・・」

ゲンスルーは自分の隣に倒れている、仲間の傷を治すように頼んだ、バラは先ほどの藏馬との戦闘で内臓が破裂し、すでに意識が無い状況だった。

「安心しろよはじめつからそのつもりだから」

「こつちは、予め6人分の複製^{クローン}を用意して^{クローン}いたわさ」

それを聞いたゲンスルーは、バインダーを出し、それをビスケが受け取つた。

「ゲイン！」

ビスケが、カードを取り出しカード化を解除すると、美しい天使が現わされた。

『わらわに何を望む？』

「こいつの両手とノドを元通りに治してもらいたいんだけど、つか出来れば悪いとこ全部治してもらえる？」

キルアは、ゴンを指しながら天使に願いを言った。

『お安い御用では、その者の体治してしんぜよ』

天使は、ゴンに息吹を吹きかけると、ゴンの体は一瞬にして完治した。

『でわさらばだ』

治療がおわると天使は、消えていった。

次の大天使も使い、瀕死だつたバラに使つとバラも完治し、意識を取り戻した。

2枚目を使つたところで大天使の息吹を複製^{クローン}で増やそうとするが、使用した瞬間、複製

（クローン）

は破壊されてしまった。

「ちよちよちよつと、ちよつと、どーなつてんの！？あたしのせい！？あたしのせいなのー！？」

慌てたビスケは、混乱しながら叫んだ

「・・・いや、『ゴレイヌだ大天使の息吹の引換券を複製^{クローン}が擬態^{トランスフォーム}で増やしたんだ、それなら向こうの引換券が先に大天使の息吹になる』

キルアが話すと、ゴレイヌが^{コラクタクト}交信

で連絡をしてきて、この場に来る事になった。

ゴレイヌにボマーを治すことを伝えると、彼は反対をした、しかし、ゴンは戦う前に皆で決めたことだと返した。

「『めんキルアもう少し我慢してくれる？』

「問題なし！このくらい蔵馬の薬草があればすぐ治るし」

キルアは、蔵馬を見ながらゴンに返答し、蔵馬は、外で薬草は使いきつたが1日もあれば作れると言つたところで、ゴンは、自分のもつている最後の1枚の大天使をゲンスルーに使つた。

「オイちょまてよ！？わかった！？わかったよ！？お前等にやるよ」
ゴン達をみて、ゴレイヌは、持つている2枚の大天使を差し出してきた。

「つたく、お前等と話していると、何かオレの方がスゲーガキなんじゃねーかと思えてくるぜ」

「いいの？ほんとに？」

「ああ、つーかな『コ^コへ来て話を聞く前は渡すつもりだつたんだよ、俺たちのカード全部な』

「え！？」

「これは、ツエズゲラ含め俺たち5人の合意だ、俺たちはもうゲームをおりたんだ」

— そ う 、 、 、 ハ ツ テ テ さ ん か と

「ああ違約金つて形で全額支払われるそつだ、」
「ほんこいの藏馬からな」

卷之三

「バッテラさんの全財産つて、一体いくらだよ！！」

「そんなことが、あ、たんだ
」

「そんな訳で、カードは全部お前たちにやる、使い方は自由だ！」条

「/△を-問題なフ-:-:-」

コンは、コレイヌからカードを受け取ると99枚目をバインダーにセットした。

99種がバインダーにセットされたことで20,000の入手イベントが始まった、クイズは五択形式の指定ポケットカードについての問題だった。

そして結果が発表された。

- 1 -

「やつたア――！！！100種類コンプ！――！」

するとゴンのもとに、1羽のフクロウが飛んできて”支配者からの招待状”をゴンに渡した。

アカンバー 一蹴してごせと腹食を掠めてくるも 招待状に書かれていた場所、城下町リーメイロに同行で飛んだ。

「マイロに着くと、一人一人は城の中に招待され、そこで0支配者の祝福”と3枚のカードを収めることの出来る箱を受け取りゲームマスターからジンの話を聞いた、そのご城下町では盛大

なパレードが行われGIの全てのプレイヤーが集まつた。

パレードの御輿に担がれた4人は、町中を進んでいった、観客の中にヒソカを見つけた藏馬は、声を出さずに口だけでヒソカにメッセージを送つた。

『パレードが終わつたらマサドラ南岩石地帯で待つ』
『オーケイ?』

パレードが終わると、藏馬は、GIクリアのプレゼントと言いながら一つの箱をゴンに渡し、GIから出たら開けるようにと3人に伝え、マサドラに向かつた。

—マサドラ南—

ゴン達と別れた藏馬は人間の姿に戻り、岩石地帯に来るとヒソカは、先に待つてた様で、座りながらトランプを石に投げドクロの形を作つていた。

「待たせてしまつたみたいだな」

「いいよ? 楽しみにしていたことだからね? それよりも、どうしたんだい? あの姿はゴン達と一緒に居なかつたら分からなかつたよ? 今は元の姿に戻つているけど?」

「ええ、あの姿は俺の本当の姿ですが、戦う約束をしたのは、この姿ですからね」

「ククク? ボクを舐めるなよ?」

そう言つとヒソカは立ち上がり凶悪な殺氣を放ちながら藏馬に襲い掛かつた。

戦闘の天才であるヒソカでも、あるヒソカは藏馬と互角に戦つていた、伸縮自在バンジーガム)の愛(を巧みに使い、人間の姿では凝を使えない藏馬と一進一退の攻防が続いていた。

激しい攻防戦の中で、戦いながらも一人は成長していった、周りの岩は跡形も無くだけ、二人を中心として更地が広がつていた。

そして遂に決着がつく！！

「樹靈妖斬拳」

藏馬の放つた一撃をヒソカは両手でガードするも腕ごと胸を貫かれた。

「ククク？ もう終わり、もう終わりかい・・・まだ・・・ボクは戦いたい！！」

胸を貫かれ倒れたヒソカは、最後の力を振り絞つて叫んだ、するとヒソカの体から妖気が噴出し傷が塞がっていく・・・魔族大隔世。・・ヒソカは、昔から自分は他人とは違うと感じていた、自分では押されることも出来ない殺人本能、強者との闘争その全てが今分かつた”魔族”自分は人間では無かつた、全てを理解したヒソカは、魔族である自分の力を使える様になつた、そしてゆっくりと起き上がりつた。

「その妖気、ヒソカ君も魔族だつたんだね、ココからは本気で行かせてもらひ」

藏馬は、妖狐の姿になり、ヒソカに向かつて攻撃を仕掛ける、魔族になつた藏馬と魔人になつたヒソカは、そのご10時間ほど戦いをつづけ、手持ちの種を全て使い尽くした藏馬は、未完成の発を右腕に纏いヒソカに向かつて腕を振るつた。

藏馬の攻撃をヒソカは避けた、しかし、攻撃が当たつていなにもかかわらず、ヒソカの右腕は、消滅してしまつた。

「・・・何をしたんだい？」

予想できなかつたことに、ヒソカは驚き、戦いながら藏馬に尋ねた。

「樹念次元斬」とでも名付けるよつか、未だ未完成だが、空間を破壊する」

新たな技で、戦局は藏馬が有利に進んでいった、そこで思わぬアクシデントが発生した、二人の戦いが余りに激しかつたので戦闘が得意なGM、レイザー・ドゥーンが駆けつけ一人を攻撃した。

突然のだつたが藏馬は、その攻撃を避けた、いや避けてしまつた。

ヒソカは、そのまま攻撃を受けつつもダメージを無視して、避けてスキが出来てしまつた蔵馬の腹に手とうを入れるとそのまま蔵馬の核（魔族の心臓）を握りつぶした。

その後、ヒソカは戦いの場に現われた二人を瞬殺すし、蔵馬の死体に近寄ると、魔族に生り新しく得た念を使った略奪スナッチラバする愛を使い蔵馬の体を取り込み無くなつた右腕を再生させた。

「魔界つて所があるんだ？ボクにはコッチの世界だともう楽しめそうに無いね？クロロやゴンに魅力を感じ無くなつたし？蔵馬の能力で魔界に行けば面白そうだねククク？」

蔵馬の体を吸収し、蔵馬のチカラ・能力・記憶を奪つたヒソカは、右腕に能力を発動させ田の前の空間を切つた。

「樹念次元斬？」

切つた先には、空間が歪みゲートが出来ていた、ヒソカはそのままゲートを潜つた。

－審判の門跡地－

審判の門を潜ると、ヒソカの目の前に3人の男たちが待つていた。審判の門跡地で待つていたのは、幽助・桑原・飛影3人は、こちら側のゲートが開いてからゲートの前で蔵馬を待ち続けていたのだ。ヒソカは、3人のチカラを感じ取ると自分の股間に熱いものを感じた。

「やあ？はじめまして？幽助・桑原・飛影だよね？」

ヒソカは、幽助たちに近づきながら声をかけた。

「ああ、なんで俺たちの名前をしつてるんだ蔵馬の知り合いか？」

幽助はヒソカに聞き返した。

「うん？さつきまで蔵馬と戦つていたんだ？蔵馬を食べたから君たちの事も解つているよ？」

ヒソカは、殺氣を幽助達にむけて放つと笑顔で右腕に蔵馬の念を発動させた。

「コレ証拠？蔵馬の能力植物をあや・・・」

途中まで言つたところで、ヒソカは幽助に顔面を殴られ吹き飛ばされた。

「ククク？せつかちだな、もう押さえきれないや？」

こうして蔵馬の敵討ちをするべく、幽助・桑原・飛影は一斉にヒソカと戦いだした。

戦いが始まって直ぐに飛影は邪王炎殺黒龍波ジャオエンサクコクリュウハを吸収し、幽助は、妖力を高め魔族本来の姿に戻り妖弾を放ち、桑原は次元刀で切り裂いた。

三人の力を合わせてもヒソカの力は、3人の力を上回つており、ヒソカ有利のまま戦いは次第に激しさをましていった。

人間である桑原は、既に体力の限界を超えて、靈力もすべて使い果たし気を失つてしまつ、じわじわと、追い詰められ、飛影は最後の切り札、邪眼を使用し威力を底上げした本日2回目の邪王炎殺黒龍波ジャオエンサクコクリュウハを放つが、防がれてしまうも大幅に体力を削りとらることに成功、反動で飛影は深い睡眠に入った。残つているのは、慢心相違の幽助と、いまだ余力のあるヒソカ最後の戦いは終わりを見せようとしていた。

「ククク？楽しい戦いももう終わりだね？」

「へつ！まだまだコレからだぜ！！」

幽助と、ヒソカは再び接近戦の殴り合いを始め、辺りにはS級妖怪2人分の妖気の放出で竜巻が起こり地面が砕け、激しく殴り合いをしていたが、ついに幽助が打ち負けて地面に倒れた。

ヒソカはトドメを刺そうと幽助に近寄つていくと、突然体に異常が現われた、ヒソカの内側から肉を貫き肌を破り無数の茨がヒソカの体をしばり動きを封じた。

「へへ、蔵馬は、そこにいたんだな・・・この一撃は俺たちの一撃だヒソカ遠慮なくもらつておけよ」

幽助は、ヒソカに近づくと渾身の力を右腕に集める、そこには、

靈氣とも妖氣とも聖光氣とも異なる黄金のオーラを発つする、幽助の拳があつた。

「くらいやがれ！！！靈光妖弾！！！」

黄金に光る拳はヒソカの胸を突き破り遂に、魔人ヒソカを倒す事に成功した。

「だーしんどー！もう動けねエー蔵馬！俺たちが勝つたんだ！！」

幽助も体力の限界で、地面に倒れ込み、仰向けになつて右腕を天に向け、蔵馬に勝利を宣言した。

ヒソカの死体には、無数の草花が生えだし、蔵馬も勝利を祝つているかの様だつた。

－グリードアイランダー

ＧＩのクリア報酬の3つを、ホテルの部屋で、3人で選んでいた。「この中の3枚を決めたら港へ行つてくださいってさ

「で、どうするのよ、選ぶ3枚は！？」

「一人一枚でいいんじゃねー？」

「じゃ、あたしわブループラネット

「ゴンは決ましたか？」

「うんまあ一応・・・

「マジ！どれよ？」

キルアに聞かれ、ゴンはバインダー内のカードを指さす、キルアは、ゴンの考えを理解し、自分のアイテムをゴンに合わせたものを選んだ。

翌日、港に行き3枚の現実に持つて帰るカードを指定した。

「選んだのは、N0.002一坪の海岸線N0.081ブループラネットN0.084聖騎士の首飾り以上の3枚で本当によろしいでしょうか？」

そして、現実に戻つた3人はカードを具現化せた、ビスケは、ブループラネットを手に入れて大喜びし、ゴンは聖騎士の首飾りを

首にかけ、最後の1枚である一坪の海岸線を手に取った、聖騎士の首飾りの効果で擬態^{トランスマスク}が解除されカードは本来の姿に戻った。

「それでも、よく実行する気になったもんだわね、指定ポケツトじゃないカードを選ぶなんて」

「うん、でも最初にオレがゲームに来る時にもし1番じゃなかつたら、きっと確信は持てなかつたと思う

2番目にゴレイヌさんだつたつていうのも大きかつた、印象に残つてたしね」

「え？ え？」

「ここに来る前ジャンケンしただろ？」

「オレが1番でゲームに入つてスタート地点でキルアと藏馬を待つてた時、近くに誰も居なかつたんだ、

つまり、オレがゲーム内で最初に会つたのは、2番目に入つてきたゴレイヌさんはばず、でもバインダーで調べたら、その前に1人遇つている人物がいたんだ”ニッグ”ジンのスペルはG I N G「N I G Gは、そのアナグラムつてわけね」

「多分オレは、赤ん坊の頃ジンと一緒にG I 来た……！」

「おそらくジンはあんたに、こう言つたかつたんだわね、何を捨ててもオレに会いたいなら、このゲームをクリアするくらい強くなつてね、ゴンあんたは、ジンに会つたら……まず何をする？」

「もちろんキルアを紹介するよー オレの最高の友達だつて！ー！」

「よせよ、はずいだろ」

「ホント、やめてよ」

そこには、自信満々に言つ「ゴン」と、恥ずかしげるキルア、感動で涙をながすビスケがいた。

「そーいやゴン、藏馬に貰つた箱開けてみよつぜ」

「そういえば、そうだねプレゼントつてなんだわー」

「ワタシへのラブレターこもだわぞ」

「あーないない」

「んじや、開けるよ」

箱の中には、手紙とカギが入っていた

「ほら！やつぱり手紙じゃないわぞ」

「ぜつて一ちげーつて、ゴン読んでみてくれよ」

「ゴンが手紙を読んでみると、帰る手段が見つかった事、貸し金庫のカギを入れてあるのでバツテラ氏から受け継いだ財産を有効活用すること、最後に別れを別れを告げるのがはずかしいということが書かれていた。

「えーみずくさいな蔵馬」

「ビスケへのラブレターじゃなかつたな」

「くやしーわぞ、若いツバメを逃がしたわぞ……ゴン、因みに金額とかわ書いてあるのかだわぞ？」

「んーちょっとまつてね・・・あつ・・・」

「おい、どうしたんだよゴン？」

手紙を見ていた固まつて動けなくなつたゴンの手からキルアは手紙をとつて見た。

「・・・」

「あんたたち何固まつてるんだわぞ、ワタシも見るわぞ」

手紙をみた、ビスケも固まつた。

「「カムバーク！蔵馬！！こんな大金活用できないよ（ゼ）」」

一人の叫び声が、港の中で鳴り響いた・・・

—ゴンディングー

ヒソカとの死闘が終わつて丁度5年、荒野だつた審判の門跡地には、様々な草木が生茂る森になつていて、森の中心、ヒソカの死んだ場所には、一本の巨木が生えていた。

毎年蔵馬の命日には幽助・桑原・飛影・コエシマ・ボタンの5人

が巨木の前にお参りをしに来るようになっていた。

今年も、皆で集まり、巨木の前で宴会をしていると・・・巨木の中から蔵馬が出てきた。

「みんな、ただいま」

第一一十七話 最終話（仮）（後書き）

書き終えて、これで良いのかと思ひ（仮）にてさせていただきまし
た。

これで終わりですが、優柔不斷な私なので、各話を修正しながら、
キメラ編も書くかもしれません。

今まで読んでいただいた皆様ありがとうございました。

閑話 靈界ランク・念能力2

〈蔵馬〉

ランク A級下位

念能力 無し

念系統 特質系

〈ゴン〉

ランク B級下位

念能力 ジャジヤン拳

念系統 強化系

〈キルア〉

ランク B級下位

念能力 雷掌イズツシ

念系統 变化系

〈ビスケ〉

ランク A級下位

念能力 魔法美容師まじかるエステ

念系統 变化系

〈ヒソカ〉

ランク B級上位

念能力 伸縮自在の愛パンジーガム

念系統 变化系

〈ツェズグラ〉

ランク B級中位

念能力 現在不明
念系統 現在不明

〈ゲンスルー〉
ランク B級上位
念能力 一握りの火薬
命の音 リトルフラワー
カウントダウン

念系統 現在不明

〈サブ〉

ランク B級中位
念能力 一握りの火薬
リトルフラワー
念系統 現在不明

〈バラ〉

ランク B級中位
念能力 一握りの火薬
リトルフラワー
念系統 現在不明

〈妖狐蔵馬〉

ランク S級
念能力 樹念次元斬
ジュネンジゲンザン

右腕にオーラを集め植物を腕に巻きつかせて攻撃する蔵馬
が使用していた時は未完成で、空間を削り取る攻撃でしかなかつた。
JOJOの虹村億泰のザ・ハンドの能力といつしょ w
念系統 特質系

〈魔人ヒソカ〉
ランク S級
念能力 伸縮自在の愛
パンジーガム

スナッチャバ
略奪する愛

倒した相手の体を吸収し、チカラ・能力・記憶を奪つたう、ただし相手の魂すら奪つてるので、吸収した相手次第では、体の中で抵抗されることがある。

樹念次元斬
じゅねんじげんざん

右腕にオーラを集め植物を腕に巻きつかせて攻撃する戦馬を吸収したことで、完成された能力効果は、桑原の次元刀

念系統　変化系

その他G.IのキャラはC下位→B中位つてことで

オリジナル能力って難しいですね；

この度、完結しましたが、余りにも設定を生かしていない事と、未回収フラグも多数、文字の間違え、句点などの間違え、文章の書き方などの問題多かつた、むしろ問題しか無かつた。

そもそも、1週間で完結させようとしていて無計画に、作品を書いたことが間違いだつたと、思い知りました。

各話を大幅修正して、読みやすい作品に仕上げますので、それまでは、この作品のダメな所を感想に書いていただくとありがたいです。

それでは、最後に皆様、私の作品を読んでいただき大変ありがとうございました。

お問い合わせ（後書き）

修正中

http://nocode.syosetu.com/n4813
w/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770w/>

植物だいすき

2011年9月6日18時05分発行